

「おー寒い。」

背中を吹き抜けた空風に、加羽沢征二は思わず身をすくませた。師走も近いとあって、上野広小路には結構な人が出ていた。夕刻のアメ横に連なる人の流れから離れて、京成上野駅の前を湯島の方へと急ぐ。千鳥格子のジャケットの襟を立てて胸元を掻きあわせると、ますます猫背が丸くなった。もつれた硬い髪にはちらほらと白いものが混じり始めている。

信号を渡り不忍の池の畔まで来ると、柳の並木から暮れ残った夕焼けに、東天紅の赤いネオンが妙に明るく輝いていた。

加羽沢は、ヤクザである。いや、もとヤクザであったという方が正しいのかもしれない。一本気な性格で、走り出したら止まらない”暴れ牛の征二”と、一頃は界限でも鳴らしたお兄いさんだった。しかし、もうこの名前もめつたに持ち出されることはないだろう。

親分が府中の刑務所に入所してから早くも五年が経ち、もはや組も組の形をなしてはいない。本来ならばだれかが親分の留守を仕切らなければならぬのだが、加羽沢はどうしても外れた箍を戻す気になれなかった。

加羽沢が拗ねたように何もしようとしなかったのには理由がある。今度ばかりは、親分の事が理解できなかつたからだ。ボケたというのはたやすいが、鉄砲弾も辞さない覚悟で勤めた親分が何を考えているのかわからないとなると、今まで支えてきたものがぶつりと切れたような気がした。その後しばらくは何もする気が起きず、加羽沢は毎日ふてくされて寝てばかりいた。

もともと、たいして大きな組ではなかつた。多い時でさえ十人もいただろうか。今では類をたぐつても、五、六人集めるのがせいっぱいである。テキ屋の流れを汲みながら、シノギはますます細る一方で、そのやり方もずいぶん昔とは変わってきた。暴対法で八方ふさがりの中、単に品物を扱う上では、もとよりヤクザの色は薄く、普通のカタギの店とたいてい変わらぬようになっていく。暴力団と呼ばれたくないというのはいいとして、近頃のヤクザは時代と共に、いわゆるヤクザではなくなりかけている。

痩せたりといえども親分のお陰で、他の組との関わりを一線できっちりと守り通したため、よけいな組織や派閥のしがらみとほとんど無縁でいることができた。しかし、寄るご時世の波にだけは抗しきれず、親分がいた時でさえ、この家業がもうそう長くは続かないという事に一種暗黙の了解があった。

「征二よお、ヤクザは終わりだあ。」

警察に連行されながら親分はそう一言いい残していった。

今にして思えば、結局あの時、親分の一言で組の解散は決まっていた。自ら身体を張って、組の始末をすることで、おそらく、親分は自分が昭和最後の任侠の一人である事を気取りたかつたのだらう。だが、しかし。加羽沢は、まだ親分の意図をつかみかねている。

加羽沢が親分のところに預けられたのは、まだ中学生の頃であった。さすがに普通の子分のように杯を交わしたのは、もう少し後になっての事であるが、それ以前は、なりばかり大きい、ただのおとなしい子供だった。成績も悪くはなかった。そのまま行けばごく普通の道を歩くはずが、ある時期を境にグレた。母親のせいである。

加羽沢の母親は、清元の師匠で小唄、端唄に新内まで器用にこなした。しかし、その実は芸者上がりで妾だった。

物心ついた時から加羽沢に父親は無く、清元伝授の看板をかかげた格子戸の妾宅に母親と二人きりで住んでいた。

父親の話は何度も聞かされていたが、母親のいいかげんな性格からか、毎度話の内容が変わった。ある時は国会議員。またある時は銀座の大酒店の社長。今ならばそれが母親の想像の産物であったとわかるが、子供の頃加羽沢は、自分の父親が怪人二十面相になったような気がした。

最後についた旦那という男は、まるで愛想の無い痩せた老人で、時たま顔をあわせると口を一文字に結んだまま、ぎよろりとした目で加羽沢を睨み付けた。そいつが地獄の底から湧き出るような声で清元の稽古をしていると、他の弟子達は自然と家に寄り付かなくなった。

自分の衰えに気づき、他に頼るものがない事がわかると、母親は必死で男を繋ぎ止めようとした。閨で上げる声が大きくなり、中学生になったある日、加羽沢はいたたまれず、ついに奥の襖を開けた。明りがついたままの部屋で、四つんばいになった母親を、あばらを浮かした老人が後ろから攻めていた。

「いやだねえ、この子は色気づいて。」

母親は媚びたように笑い、その場を急いで取り繕ったが、加羽沢はその時の老人の目と、ごくりと上下したのど仏をけして忘れることができなかった。

その日の老人は泊まりであった。明け方まで迷ったあげく、バットを持ち出して、加羽沢は、寝ていた老人を襲った。幸か不幸か狙いが外れて額に大きな瘤を作っただけに終わったが、当然の事ながら、それが加羽沢の人生の転機となった。母親は、男を取り、加羽沢は、近県の親戚に預けられた。

そこからは絵に描いたような筋書きで不良の坂道を転がり落ちた。学校中の生徒を脅し、教師を脅し、それでも足らずに、近所のヤクザと縄張りでも入り合った。親戚の手前、手をつけかねた母親は、このまま刑務所にでも入るよりはと、たぶん誰かからの差し金だろう、昔のつてを頼

りに加羽沢を親分のもとに預けた。
加羽沢は、ヤクザという新しい規範にはすんなりと従った。それ以上はもうどこにも行きようが無いと観念したからである。

「麒麟龍の伝八」。その名前は背中彫り物から来ていたらしい。一時は筋を通す事でこの世界でも名の知れた親分さんであった。片肌を脱いで啖呵を切れば、その名は関東八州から全国にまで鳴り響いたという。そういつて親分はよく背中中のモンモンを見せてくれたものだったが、威勢のいい動物を二匹も欲張ったため、彫り師の意図に反し、よく見ると中華料理屋でビールを飲んだような気分になる。

しかし、親分の精神は年を取っても衰えを知らず、自分が任侠の徒である事は、親分の哲学になっていた。任侠と暴力団、ヤクザとチンピラは違う。事あるごとに親分は子分達には素晴らしい続けていた。

「ヤクザがカタギと違うのは、自分の死に場所を心得ているってえ所だ。ヤクザの真価ってえものが問われるのは、死ぬ直前の話だ。日頃いばりくさっているやつに限って、その時は案外だらしねえもんだ。そんなものを見てみると、自分の死に様ってえもんがおよそわかるようになってくる。そりゃ、自分の分って物がわかるって事だ。となれば、どうしたって日頃は謙虚にならざるをえねえだろう。だから、表の明るい世界から、自分で一步身引いているのがヤクザだ。昼間から風切って歩いて、堅気相手に喧嘩売ってるような連中は、ヤクザたあいわねえ。もしそうだとしたら、大変な心得違えつてもんだ。」

加羽沢も、かつてきつちりと親分にそう教え込まれた。

見栄を重んじる表と違って、ヤクザの裏側は実に地味な世界である。親分に拾われた当時は、親分の家の便所掃除に始まって、氷や貸しおしぼりの配送が延々と続いた。車なんて十年早いとあてがわれたのは、自転車である。度胸がついたと少し偉くなったところで、やらされたのは借金の取り立てだった。顔がいかついで立っているだけでもいいと仲間うちにはおだてられていたが、いつも結局最後のところでもいつも相手に逃げられてしまう。海千山千を相手にするには、どこか人がよすぎたのだろう。手ぶらで帰ってくれば、さらに上手の親分を相手にしなければならぬのだから、これもけして楽な仕事ではなかった。

「人がいやがる所にこそ、ヤクザのシノギはある。」

親分はそういったが、まだ若かった加羽沢に、ヤクザの世界はだいぶ当てが外れたような気がした。

宵越しの銭を持たない江戸っ子としては、生まれ損ないになるのだろうか。さすがに現金はあまり無かったものの、組には直接経営していた安キャバレーといくつかの利権が残っていた。他の組との関係だろうか、断つても先方からみかじめ料を払ってくる奇特な店まであった。あぶれ者

だつて生活に困らなければ、無理にやくざなこともしない。その意味で、親分はずいぶんと金銭にはうるさかったが、いふなれば、組を健全に経営していた。組員にも、遊んで儲かるような事は、一切させなかった。きちんと税金を払うのも、親分に言わせれば、ヤクザのけじめのひとつだった。

一方で、社会の秩序を裏から支えるために、ドロドロした矛盾を一手に引き受け、表に出さないようするのもヤクザである。

しかし、やっていることが普通の人間と変わらなくなれば、何のためにわざわざヤクザをやっているのか、実際問題としてわからなくなる。あえて残るのは任侠の意地なのだろうが、高邁な精神にもかかわらず、その矛盾は、しだいに組員の一人一人まで広がっていった。

そうなるともう組の存続や再興を期待する者もない。みながこうまでばらばらになると、跡目の相続など気にするやつもない。

その後、何度か刑務所を訪ねたが、親分は黙して語らず。尚もしつこく食いさがると、後のことは自分達で考えろという一点張り。取り付く島もなかった。

そんな中、植木のリースをやっている山本が久しぶりに組の事務所に顔を出した。店の名前の入ったジャンパーを着て、すっかりカタギの格好が板についている。

「兄貴、折り入って話したいことがあるんで。」

「どうしたい。」

「足、洗わせてもらいやす。」

さして意外でもなかったが、加羽沢はどうしたものかと迷った。

「世話になった親分の手前、やっぱりそりやねえだろうが。」

「兄貴には申し訳ありやせんが、実は、もう親分とは会って話しやした。」

「なんていったんだ。」

「植木リースは、ちゃんと続けさせて頂きやす。ただ、もう代紋背負つてやる商売じゃない。せつかくだからカタギの商売として、きちんとした会社にしてやっていきたいといいやした。組にはけして迷惑かけやせん。後々のことも引き受けますんで、あつしの考えたやり方でやらせてはもらえねえかと。」

「親分は。」

「好きにしろと。」

山本は、挑むように加羽沢の目を覗き込んでいった。

「指、詰めやすか。」

親分が早々と指詰めを禁止したため、組の全員が小指を持ち長らえることができた。さらに、自分が肝臓病を煩ったのは、モンモンを背負ったせいだと考えて、彫り物も禁止した。孔子の教えではないが、今さら

親から授かったものを傷めて常人と違った体になる必要も無い。これはまさに親分の慧眼といえた。となれば、今さら杯返せ、指詰めるなどと正面切っている方が馬鹿を見る。

「自分できつちりと決まりはつけさせていただきやす。」

山本は頭を下げたまま、事務所を出て行った。そういう山本を引き止めるような力は、もう組に残ってはいなかった。

解散に当たり、組員の身の振り方を心配したが、覚悟していたせいか、さしたる混乱はなかった。親分の教育のお陰で、組員が知らないうちに自立していたためである。要領のいいやつは、無理にヤクザを続ける理由もない。

加羽沢は、最後まで残ってしまった子分を数人連れて、キャバレーの経営者という事になった。よその組には相変わらずにらみをきかせる必要があったが、さして美味しくも無い縄張りにあえて手を出そうという物好きもそうはいなかった。

優等生のような解散に一番喜んだのは、おそらく警察であろう。廃業届を出し、ヤクザがヤクザである事をやめると、これで組はきれいさっぱりと無くなってしまった。

とはいっても、親分が自分自身につけた結末の方は、そう格好のいいものではなかった。

最後に一人で全部背負い込んだのは立派といえるが、もともとの原因は、女を取ったの取られたのという、いわば私怨だ。七十を過ぎて、よくもまあそこまで執着するものがあつたと思うのだが、相手の親分が幼な馴染みの上に、このことだけには、さらにいろいろなしがらみがあつたらしい。

もともと親分は、上野は寿の仏具屋の倅で、敵方の親分は、下谷あたりの屑鉄屋の倅。ともに寛永寺の境内で戦争ごっこをして、こっちの親分が銃剣突撃をやってつけた傷跡が、今でも先方の眉間に残っているという因縁の間柄だった。

二人ともヤクザになつたというのも奇遇だが、親分の話によれば、そうおかしな事でもなかったらしい。

昔のヤクザは、もっと庶民の生活の中に溶け込んでいた。銭湯でモンモンをさらしても、さして奇異ではなかった。ヤクザと揶揄されても、差別はされなかった。だからヤクザ者だという僻みもない。

喧嘩だ出入りだといったところで当時ならば規模は知れている。悪い事をするといったって、今の組織犯罪に比べれば可愛いもんだつた。もとよりに、自ら堅気の衆とは一線を隔していたため、けして迷惑をかけることはない。けじめというものがしっかりついていた。だから町の連中もその存在を許し、いっしょに生活していた。

むしろ、ヤクザの親分さんといえ、町中の連中にさえ一目置かれるだけの存在だった。請われればヤクザは、喧嘩の仲裁や親の代わりにも心得者への説教まで買って出た。そんな訳で、家の中のある者が一人くらい、杯を受けて、いつの間にかヤクザになってしまっても、別段不思議なことではなかった。親分は、そんな風に語っていた。

しかし、みな、親分が一人で殴り込みに行くというのには驚いた。

「光子の事で、米山のそこへ落とす前を付けに行く。おめえ達には、手出し無用。」

神棚の下の大きな椅子に座って、ぽつりとそういうと、親分は、口をへの字に結んで目を閉じてしまった。ご意見無用の合図である。

ふつう玉を取りに行くなら、鉄砲弾は子分の役目と相場が決まっている。実際にやるかどうかは別にして、ヤクザの子分はそのために困われている。それが親分自ら乗込んで、逆に返り討ちにも遭おうものなら、組の解散にもなりかねない。普段は冷徹な親分だけに、この時はみな色でボケたかと思った。

女も、これまたすさまじい女で、東大を出て、N証券に勤め、最後は銀座のクラブでチイママをしていたというが、それがどこをどうたらしこんだのか、両方の親分を手玉にとっていた。

聞く所によると、先方にはピンクのロールスロイスを買わせたとかで、そうなるかと清貧を誇るこちらの親分は、いささか分が悪い。根津のおんぼろマンションに困っただけで、さして小遣いもやらなかったケチが身から出たサビという事になる。

だいたい、どちらも似たり寄つたりの、潰れないから生きているという組だ。その老いぼれの親分連中にわざわざ手を出したという女の気の方こそ知れない。おそらく双方に調子のいい事をいつているのだろうが、惚れた欲目で、親分の方は、まったく女を疑うという事を知らない様子だった。となれば、老人同士の見栄の張り合い、女への確執がどんなにすさまじいものだったかは、想像できなくもない。

光子と呼ばれる女は、歳の頃なら三十四、五、色白で、確かに端から見ても美人とはいえた。なぜか歯並びが悪いが、痩せ型の割に胸が大きいのが取り柄だった。微笑むと唇の右端が上がり、どこか酷薄そうな表情になる。しかも、普段はバカの振りをしているくせに、時々「私は頭が違ふのよ。」というのが顔に出て来る。それが妙に鼻につくものだから、子分達の受けはすこぶる良くなかった。

「シャネルなんざあ着ているくせに、化粧が度下手。頬紅が濃すぎるのは近眼のせいだろう。銀座勤めという割に、いつも強烈な香水を付けているのは、やはり田舎っぺの証拠。」

親分のいないところでは、散々ないわれようをしていた。

親分の右腕として用心棒も兼ねたため、加羽沢は始めのうち、光子の送り迎えもこなしていた。何の折りだったか、この日は親分を先に本宅まで送り届け、その足で光子のマンションに向かった。銀座の店を出た時は、二人ともしゃんとしていたはずなのに、親分が降りたとたん、光子が乱れた。

「征さん、あたしもうだめ。早く帰して。」

マンションに着いた時はすでに正体が無く、加羽沢は後部座席から引きずり出すようにして下ろすと、担いで光子を部屋まで運んだ。世に酔った払いの女ほど始末におえないものはない。腕の中でストッキングに包まれた太股の張りのある弾力を感じていたが、そのまま背中に吐かれそうなので、それどころではなかった。ハンドバックをあさって鍵を取り出すと、今度は光子を両腕で抱き上げて中に入った。

鉄のドアが閉まる音がしたとたん、光子の腕が首に絡みついてきた。パームのかかった前髪が顔に降りかかり、唇が熱いものでふさがれた。

加羽沢の手が離れると、光子は加羽沢にぶらさがったまま足を絡めてきた。下半身が押し付けられる。光子の唇から、声が漏れた。

加羽沢には、心の底で、どこか光子に同情するものがあつた。ヤクザの情婦といったって、けして楽な商売ではない。気難しい爺さんを相手に多少の金をもらっても、いったいどんな楽しみがあるというのだろうか。日頃、親分と離れた時の光子を見るようになるつれ、他の子分のように加羽沢は光子を馬鹿にする気にはなれなくなっていった。その頃の光子は一面、実に健気な女だった。しかし、親分の女に手を出すというのは、また別の話である。

体の隙間に下から腕を通すと、あっけなく首の輪がほどけた。そのまま軽く押すと、光子は玄関先に尻餅をついた。黒いスカートのすそが乱れて、中から白い下着が見えた。

「姐さん、悪い酒だ。これくらいで勘弁してください。」

光子の目は、丸く見開かれていたが、ふっという吐息とともに、四角く歪んだ。

「なにさ、意気地なし。」

光子は唇を手の甲で拭いながらいった。

「見損なつたよ。親分の跡目はあんたが継ぐんだろ。」

加羽沢は光子に背を向けた。

「女にここまでいわれて、何黙っているんだい。あんたにそのくらいの度胸はないのかい。」

後ろから光子の声が飛んでくる。

「ありやせん。」

加羽沢は、開けたドアの向こう側に返事をした。

「でも征さん、覚えておきなよ。あたしは欲しい物は必ず手に入れるからね。」

加羽沢は何もいわず、そのまま光子のマンションを出て行った。
この日から加羽沢は親分の運転手を若い者に押し付けた。光子はその
後大人しくしていたが、どうやら別な方向に手をのばしていたようだ。

「みつともねえからやめて下さいよ。」

「てめえらなんぞに何も頼んじやいねえ。」

親分は、後年痩せたせいで、風貌が亡くなった落語家の円生に似ている。
顔が似ているという事は、骨格が似ているという事で、声まで似ている。
それが生つ粋の江戸弁で啖呵を切ると、妙に迫力があつた。

『寢床』のご隠居ではないが、意固地といえればこれほど意固地な人もい
ない。「やるといつたらやる、だからやる」では、駄々っ子も同然である。
「ガキの喧嘩じゃないんすから。親分、頼みますよ。亡くなった姐さん
に、あつしら顔向けできなくなるんで。」

「死んだもんに顔向けなんざあしなくてもようがす。きつちりと落とし
前つけんだから放つといておくれ。」

親分は目を剥いていう。

「あんな女のいったいどこがいいんですかい。」

と、いいなくなるのを、みながぐつと抑えた。

しかし、さらに「ついてくるな」と何度も念を押すので、親分も内心で
は心細いらしい。

「んでも、それじゃ万が一ん時、最後を見届ける者もおりやせんで、ヤ
スの野郎だけでもお供させて下せえ。」

親分は鼻で「フン」といったきり、何もいわなくなった。

「本当にいいんですかい。」

子分達はみな口々に加羽沢に聞くが、加羽沢も、今度ばかりは
「俺に任せろ。」

と、いうくらいしかこの場を収めようがなかった。

翌日、早々と親分は白の着流しで事務所に現われた。白地の上に黒で
染め上げた柄がなんとも大胆である。黒の帯とうまく合わせているが、
どうやら筆文字で漢字がくずしてあるらしい。

「親分、これなんて読むんですかい。」

テツが聞くと、

「南無妙法蓮華経。」

と、得意そうに答えが返ってきた。

さらにみな、履物を見て驚いた。どこで見つけてきたのか草鞋をはいて
いる。しかも、くるぶしの当たりまで編み上げている時代劇の飛脚が履
くようなやつだ。いや、四国のお遍路さんだろうか。

やおら着物の前をはだけけると、体にはきつちりと晒しが巻かれていた。
長ドスを飲んでるのはいいのだが、さらに親分は馬鹿でかい鉄の固ま

りを取り出し出て来た。南部十四年式。昔、ヒロポン中毒の復員軍人から買ったという旧帝国陸軍の軍用拳銃だ。

「親分、本気ですかい。」

「あたぼうよ。」

「でも、それ最近撃った事ねえつすよ。」

闇で流通しているトカレフやファイリピン製の小型拳銃と違い、口径が大きすぎて、もう弾が手に入らない。それでも親分が銃の後ろのつまみを引くと、一発目が音を立てて薬室に装填された。それを懐に入れて帯の間に差して止めたが、あまりの大きさに弁当箱でも仕込んでいるように見える。

「車、出しましょうか。」

「目立つといけねえから、歩いていく。」

もうこれだけ目立つたら何にもならないだろうと思うのだが、上野とは不思議な所で、そのような格好でもみごとに飲み込んでしまう雰囲気がある。お山の桜も散ったばかりで、白を着る季節にはまだほんの少し早い。後ろからなら、踊りのお師匠さんにも見えないことも無い。

「でも、萱場町までは結構ありやすぜ。」

「勝鬨橋の向こうだって歩いて行く。」

「じゃ、ヤスお供しろ。」

また言い出したら聞かないが始まったので、結局、そのまま送り出す事にした。

相手の事務所というのは、茅場町のビル街から少し入った商店街の中にあつた。マンションのビルの二階で、表向きには不動産屋の看板を出している。

親分達の姿が見えなくなると、加羽沢はテツに車を運転させて、一足先に萱場町に乗り込んだ。一ブロック離れた所に車を止め、テツとは携帯電話で話しが出来るようにした。ヤバくなったら親分を引きずり込んで、逃げだすための算段だった。脇道を迂回させ、遠回りをしながら来たのだが、さすがに徒歩の親分達はまだ着いていなかった。

車道を挟んで斜向いの酒屋に飛び込むと、内ポケットに入れておいた黒い手帳を出して、相手の目を見ながらいった。

「すみませんがちよつとご協力お願いできますか。」

顔はにこやかだが、目付きが鋭いという点で、刑事とヤクザは共通する。以前にもこの手を使って、まず疑われた事はなかった。

「あちらでなんかあつたんですか。」

不動産屋をあごで指しながら、酒屋店主がいう。

「いや、ちよつと情報がありましたね。どうって事無いです。お手間はとらせませんから、いるだけいさせて下さい。」

あとは客の振りをしながら、不動産屋に続くマンションの入り口を見張った。

四十分ほどすると、ようやく歩道の向こうにヤスの姿が見えた。

ヤスは、親分の遠縁の親戚という事で田舎から預かっていた。もう二十歳を過ぎていたのだが、大きな図体のせいも、少しばかり頭の血の巡りが悪い。紺色のアデイドスのジャージ姿は、まるで相撲取りの自主トレニングのようだった。その手前に白くちらちらするのが親分だろう。ヤスが一回りも大きいので、親分の姿は、ヤスの影の中にはまり込んで見える。

早くもヤスは、バテているらしく、あごを出すどころか、顔が空の方を向いてしまっていた。足が先に行って、上半身が後からそれを追いかけているようだ。一方の親分は、なかなか颯爽とした風情に見えるが、例の荷物が邪魔をして、着物が着崩れている。それを両手で抱えて歩きづらそうにしている所は、検診を受けに来た妊婦といったところか。

近くまで来ると、親分達はいきなり隣の八百屋の脇に走り込んだ。壁にへばりついてたかと思うと、時々、路地から身を乗り出して不動産屋の方を伺っている。人が通ると、積み上げられた木箱の向こうにこそと身を隠す。ただ、加羽沢のいる道路の反対側からは、丸見えなのが間抜けである。酒屋の主人まで身を乗り出して、でかい図体と白の着流しの怪しげな振る舞いを眺めていた。昼過ぎの半端な時間とあって、人の往来がまばらなのが救いだっただ。

かれこれ一時間くらい経っただろうか。加羽沢は、密かに相手が不在である事を願っていた。相手がいなければ水が入って、何とか親分の気も変わるかもしれない。

しかし、マンションの入り口が突然開いたかと思うと、サングラスをかけた当のご本人が、運悪く子分まで連れて出て来てしまった。

「ヤバイぜ。」

加羽沢が走り出したのと、親分がみかん箱を蹴散らして飛び出して来たのが同時だった。

親分の動きは素早かった。

「よっちゃん、覚悟。」

「トンちゃん。」

相手も親分が誰だかわかったようだ。

何度も修羅場をくぐったプロとあって、相手の鼻先に銃口を突きつけると、親分は躊躇なく引き金を引いた。しかし、弾の方はそうはいかず、五十年の歳月に耐え切れなかったのだろう、銃の中に居座って出て来ようとはしなかった。

それでも「カチリ」という音にへたり込んでしまった相手は、地面を四

つん這いになって逃げようとする。

さすがに側にいた子分の方も事態を飲み込んだらしく、前に割って入ると、咄嗟に親分の胸を平手で突いた。親分は三メートルばかり跳ね飛ばされ、後ろ向きにたたらを踏むとそのまま地面に尻餅をついてしまった。一瞬遅く、加羽沢が子分に体当たりをかませた。

すそが割れて禪をさらした親分は、一瞬呆然としていたが、我に返って不発弾をはじき出すと、座り込んだ姿勢のまま両手で拳銃を構えて撃った。

今度は、大砲でもぶつ放したかというような大きな音がした。年寄りの細腕に馬鹿でかい銃はガクガクと揺れていたが、妄念のこもった弾は狙い違わず、這って逃げる相手の尻に当たった。

「ザマーミヤガレ。」

甲高い声で親分が叫んだ。

このあとの親分の動きは、さらに素早かった。拳銃を放り出し、裾を尻まで絡げると、ガードレールを飛び越え、車道を韋駄天のごとく上野方向へと走り去った。加羽沢は急いでその後を追いかけた。

一方、ヤスはというと、目の前の事態に付いていけなかったらしく、八百屋のごみ箱の陰にしゃがみ込んだまま、その後もしばらく両手で顔を覆っていたそうだ。

警察からのお迎えは、なかなか来なかった。親分は、さつさと湯屋でひと風呂浴び、入所用の衣装であるグレーのジャンパー姿に着替えると、ナイロンのバックに歯ブラシと下着を入れて粋な鳥打ち帽まで用意して待っていた。

例によって、神棚の下の椅子に親分は腕を組んで座っている。時折、窓から下を見張っているテツに、「まだか？」と聞く以外、一言も口をきかなかった。

相変わらず親分は、物差しでも入れているのではないかというくらい背筋をシャンと伸ばしている。時折つばきが溜まるらしく、口元を粋なそろばん玉模様の手ぬぐいで拭うが、それ以外は身じろぎもしない。

この雰囲気ではさすがに、暇つぶしに花札という訳もいかず、一同は部屋で神妙にしていた。しかし、夜中も三時を過ぎたあたりから、みな必死であくびを噛み殺し始めた。

「いっそ自首したらどうなんすかね。」

テツが耳打ちするので、加羽沢は足を思い切り踏みつけてやった。

ついにその日の晩は、警察は迎えに来なかった。

朝になって、レインコートを着た刑事がようやく階下の電信柱の陰に現われた。よく事務所に探りを入れてくる防犯課の宮地という刑事らしい。禿げ上がった額とかな壺眼に見覚えがあった。ただ、建物の入り口

には入らず、こちらの窓の様子を離れたところから監視しているだけだつた。

「親分、ついに来やしたぜ。」

テツが嬉しそうにいう。

「そうか、何人だい。」

「一人つす。」

「フン。」

親分は迎えが少ないのが不満らしい。

しかし、さすがに一発ぶつ放したというだけあって、一人制服の姿が見え出すと、あつという間に人数が十二、三人に膨れ上がった。

「親分、来やしたぜ。今度は二、三十人はいやすぜ。」

「フン。」

ようやく、親分もまんざらではない様子である。

いったん集まると警官達は、一気に事務所へと押しかけてきた。鉄のドアが激しくノックされる。加羽沢が開けると、どやどやとなだれ込んで、部屋中に警官が溢れた。中にいた組の連中一人に対し、警官二、三人がさつと脇に張りつく。一番偉そうな背広を着た刑事が、親分の前に進み出た。

「戸谷伝八だね。はい、殺人未遂と銃刀法違反の容疑で逮捕状出てるからね。はい、これが書類。じゃ逮捕するよ。はい、逮捕、七時四十分。」

「謹んで、お縄を頂戴いたしやす。」

古風な台詞に、手錠をかける若い刑事の手が一瞬、止まった。親分は神棚の神農黄帝に一礼すると、自分で出口の方に向かった。

「はい、関係者全員、重要参考人で来てもらいますからね。はい、事務所鍵、誰かこっちに渡しといてね。」

結局、みなバラバラに連行されたため、加羽沢たちが聞けたのは、親分のあの最後の一言だけだった。

親分が、組の解散まで持ち出してがんばったせいとか、加羽沢は、その夜の夜に解放された。ふつう、組織の上の方の犯罪を下の方がかぶろうとするのだが、逆の成り行きに警察の方も戸惑ったらしい。さつさと親分を挙げてしまったので、取り調べもどこか迫力を欠いていた。

「たしかに、自分が警官とは、一言もいっていないよなあ。まぎらわしい手帳出したって、あれは、あつちの早とちりという訳なんだよなあ。だが、今度だけだぞ。もうなめたまねすんじやねえぞ。」

加羽沢は、帰り際、刑事の官地に煙草臭い息を吹きかけられながら、精一杯の嫌味をいわれた。酒屋の店主は、ずっと加羽沢のことを刑事だと思っていられない。しかし、親分のお陰で、組全員を挙げるほどのネタは、つかみきれなかったようだ。

とりあえず事務所に戻ると、ドアには警察の封印と張り紙がしてあった。仕方なく帰ろうとすると、廊下のエレベーターの扉が開いて赤いビニールのような服を着た女が一人、そこから降りて来た。光子だった。

「征さん、よかった。誰か来ないかと探してたの。」

光子が、駆け寄ってきた。靴も爪もハンドバッグも、みな赤かった。

「征さん、よかった。あたし、どうしたらいいかわからなくなって……。」

そういいながら、光子は、加羽沢の顔を見上げた。瞳が潤んでいる。ごくりと生唾を飲む音が聞こえ、赤い唇が少し開いた。

しかし、光子がそのまましなだれかかって来ようとするのを、加羽沢は半歩後ろに下がって避けた。パーマのかかった栗色の髪が、左の肩先をかすめる。

「姐さん、まだ仕事がありやすんで。失礼いたしやす。」

自分で鼓動が激しくなっているのに気が付いた。しかし、加羽沢は深々と一礼すると、顔を上げずにそのままエレベーターに向かった背中光子の視線を痛いほど感じたが、光子は追いかけて来なかった。線香のような香水の匂いがして、自分の足音だけが響いていた。

結局、事務所は、誰も寄り付かずそのまま長いこと放置され、いつの間にか人手に渡っていった。加羽沢は、光子とも、この後は久しく会わなかった。

つくづく、最近、気が弱くなったと思う。親分がいなくなると、自分いろいろと考えることが多くなったせいだろうか。加羽沢はふて寝をしながらそう考えていた。

加羽沢には、若気の至りで、最初の女に産ませた娘がいた。その当時は、女の方も若かった。加羽沢も先のことをあれこれ考えられるほど、まだ大人ではなかった。

始めは、女の一人もいなければ格好がつかないと思ってできた関係だった。もともと女には自分でも呆れるほど淡白で、後にも先にもこの女他には自信があった。だいたい女を追いかけてモノにしようという情熱さえ無かった。マザコンとはいわないまでも、どこか幼児期の母親の影響がこなしきれずに残されていたのかもしれない。とどのつまりは、女を追いかけるのが怖かったのだろう。

しかし、この時は何がどうなったのか、クラブのホステスだった女に周りのすすめで引き会わされてみると、加羽沢はひと目で気に入ってしまった。女の方もまんざらではない様子で、そんな女の顔が見たかったのか、自分でもわからないまま、しばらく女のもとに通っていた。

子供が出来たと知った時、女は当然のように受け入れた。産むということにも、加羽沢もあえて反対はしなかった。他に女がいないので、それでもいいかと単純に思っただけである。しかし、いざ子供が生まれると、

女の性格は一変し、当然ながら二人の関係も変わった。女は現実的になり、展望の無い関係に時折苛立つようになった。加羽沢は、そんな女をどのように扱っていいのかわからなかった。

やがて娘が育ち、手を放すことが出来るようになる、女は元の仕事に復帰した。そうして接点が薄くなり、いくつか歳を重ねると、会った所で二人ともどこか気まぜくなるようになってしまった。結局、なんだかよくわからないうちに足が遠のいて、別れたというより、会わなくなつたというのが加羽沢の本音である。

女は、水商売を続けた。別に未練があつた訳ではないが、加羽沢はその後も年に数回、板橋の団地にある家に、何がしかの金を届けに立ち寄つていた。子供も、自分の子が可愛いというより、捨てて置けない義務のようなものを強く感じていた。実際、赤ん坊の娘をどう扱ったらいいのかも、加羽沢はよくわからなかったのである。

遊ぶ時は派手に遊ぶが、もともと飲む打つ買うは性に合わない。だから何かの折りには、懐に小金が貯まっていることがあつた。意外に自分の家族を大事にするというヤクザの本能があつたのだろうか、加羽沢はつまらないことで消えてなくなるよりはとこの習慣を続けた。

女は、不在がちである。他に男でもできていたのだろう。すでに相手は何をしていようと気にはならなくなっていたが、惰性なのか一度ついた習慣は離れず、思い出すと自然に女の家に戻が向いていた。そのうちに娘が育つて、加羽沢が行くと、代わりに出てくるようになった。この頃、中学生になった娘は、母親からのお下がりのピンクのセーターをいつも着ていた。

認知はしていたので、娘の方も、加羽沢が父親であることに気がついていたようだ。

娘は、遠慮がちに加羽沢を「おじさん」と呼んだが、加羽沢は、毎度、口ごもつたきり、娘の名前も満足に呼べなかった。

「これ、母ちゃんにな。」

そう一言いって金を置いてくる。それだけの希薄な親子の関係であつた。

娘は、放りっぱなしの割には、不思議とグレもせず育つていった。毎度ずいぶんと間があくので、見るたびに娘が大きくなるのが分かった。誰に似たのか髪の毛は天然の薄茶色で、細面の顔に尖った顎がつんと澄ましている。どの時だったか、痩せた体に胸の膨らみを認め、加羽沢は少しどぎまぎとした。聞くともなく、娘は、美容師の学校に通っていると話していた。玄関のドアの外は、隣のドアに通じるベランダになっている。振り返ると娘は、いつまでもぼつりとベランダに立ってこちらを見ている。

この日、娘のいる棟までたどり着くと、入り口の前に見慣れない自転車

が一台止めてあった。部屋に灯りはついていたが、呼び鈴を押しても、娘は、なかなか出て来てくれなかった。何度か呼び鈴を押し、諦めて帰ろうとすると、ドアが細目に開いて、隙間から娘の顔だけがのぞいた。

「ごめん。人が来ているの。」

ドアチェーンの陰から、娘はうつむいたままそういった。いつもの涼しげな眼のあたりが、ほんのりと赤く上気して見える。

「男がいる。」

と、加羽沢は咄嗟に思った。

「じゃあ、これ。」

封筒を差し出すと、娘は済まなそうに受け取って、そのままドアを閉めた。

加羽沢は、いったんアパートから遠ざかると、入り口が見える目立たない場所に立って待った。街灯の照明もそこまでは届かなかった。

十一時を過ぎた頃、ドアから明りが一筋漏れ、ジーンズをはいた茶髪
の男が中から出て来た。娘は見送らず、そのままドアが閉まった。情事
の後の熱気が部屋から押し出され、ここまで伝わってくるような気がし
た。

降りてきた男が自転車にまたがった所で、後ろから寄り付いて、左腕を
首に回し、相手の右腕をつかんでぐつと捻じ上げた。声を上げそうにな
ったので、左腕をさらに締めた。

「いいか、よく聞け……。あの娘をおもちゃにすんじゃねえぞ。わかった
か。」

加羽沢が耳元でそう二度繰り返すと、腕のなかの首がガクガクとうな
ずいた。茶髪からは甘ったるい匂いがした。もう少し絞めてやろうかと
加羽沢は思った。

「よしてよ。」

突然、後ろで声が出て、振り向くと娘が立っていた。両手で握り締め
た柳刃包丁の切っ先が震えていた。

男を突き放すと、自転車ごと倒れて、あたりに大きな音がした。

「よしてよ。私の邪魔しないでよ。お願いだから……。ヤクザになんか、わ
かんないんだから。」

娘は、かすれた声で、しぼり出すようにそう言うと、顔をくしゃくし
やにゆがめ、声を上げて泣き出した。赤ん坊のような大声だと加羽沢
は思った。

近所の窓に明りがつき始め、しまいには寝間着姿の人間があちこちに
出てきた。加羽沢は、地面に倒れたままにいる男の尻を一度思い切り蹴
り上げると、そのまま歩き出した。後ろで、男に駆け寄る娘のサンダル
の音が響いた。

自分の頭の中に霞がかかって、馬鹿になったような気がした。娘に何を
してやりたかったのか、ぼんやりとして、自分でもわからなくなってい

た。
針のように細い三日月が夜空に引つかかっているのが見え、加羽沢は駅に続く坂を下って行った。

ヤクザが、急にキャバレーの経営者になったところで、その実、さしてやることも無い。加羽沢は、切り盛りをテツにまかせ、自分は店にも行かず、出来る限り奥に引っ込んでいることにした。

テツはもともと女を扱う事が好きだったせい、ホステス達にうまく取り入って、当初は意外な働きを見せた。偽物のベルサーチを着込むと、いかにも水商売ぜんとして、テツにはキャバレーがよく似合った。

ヤスは、どこにいても幸せなので、裏の力仕事を主にあてがってやった。図体はでかいが、顔がだらしな過ぎて、用心棒だけは勤まらなかった。

キャバレーは、上野から湯島に向かう道を左に外れて、路地を一つ奥に引っ込んだ所にあつた。上野の繁華街に行くか、湯島に向かうかの半端な所で、多くは土地の人間を相手に商売していた。もともとは上野でも古い一角で、その昔は茶屋、待ち合いを残していた所。寄席帰りの客を集める飲み屋街から始まって、今でも、辺りは下町らしい雑然とした雰囲気を保っていた。

親分のご薫陶よろしく、界限では良心的といわれる経営を引き継いだため、まずまずの固定客が残っていた。儲かりはしないが、しばらくは順調に堅気生活が続くかと思われた。

しかし、五年の間にしだいに客層が高齢化し、キャバレーなどという工夫の無い形態では、新たに若い客層を取り込む事もできなくなっていた。そこに襲ってきたバブルの崩壊で、あぶく銭を扱っていた俄か成り金が軒並み姿を消してしまふ。まさにそのような親爺達で支えられていたため、与えられた衝撃はかなり大きかった。

ホステスの給料の支払いが少しでも危うくなると、それを敏感に察知することのできるいい娘から先に辞めてしまふ。その結果、さらに客足が遠のくという悪循環に陥つた。かといつて店を売り払うにも時節が悪く、先の見通しも立たないので、やめるにやめられない。かろうじて五年目も生き残つたのは、他に行きよの無いホステスの給料を踏み倒したのと、単に建物が自前であつたためだろう。

あまりにも暇だというので、加羽沢は、久しぶりに店に出てみる事にした。

路上の看板には、ピンクの地色に人魚の格好をした女の子の漫画が描いてあつた。その周りを豆電球がせわしなく点滅しているが、二つ三つ切れているようだ。入り口のドアもニスをはがれて白茶け、木材のささくれが浮き出している。派手な看板と入り口の落差は大きく、いかにも

薄汚れて貧弱に見えた。クリスマスか正月に使ったらしい金銀のモールがまだドアの釘にへばりついていていた。

早かったせいか、加羽沢が店に着いた時、客は一人も入っていないかった。以前は、夕礼と称して開店前に気合の入ったミーティングをやっていたものだが、今日は開店時間を過ぎてても、女の子の頭数さえそろっていない。

「店の者はどうした。」

「二人ばかり風邪ひいて熱が出たとかで休みで、もう二人は、なんかの用事で遅れて来るそうで……。いや、ここんどこ冬枯れで、ちつとばかり客の入りが少ないすから。これ、うちだけじゃねえすからね。」

照明が全開になっていて、黒のビニールソファの破れ目があちこちに目立ち、床の赤い絨毯は、染みだらけなのがわかる。後ろ壁の棚は鏡張りで、天井のスポットライトを反射してきらきらと輝いているが、その前に並べられた国産のウイスキーのボトルは、ひどく雑然としていた。この手の店特有のあらゆる香りが交じり合ったような黴臭さがただよっていた。

出てきた女の子達は、店の一角に集まり、客が来ないのをこれ幸いと無駄話に花を咲かせている。ピンク地に白いフリルのついたミニスカートの制服は胸が大きく開いていて、どこかのファミリーストランのものと同じ。店がにぎやかだった頃はそれでもよかったが、今では売れ残って店にいる連中と、明らかに雰囲気合わなくなった。一番歳上の婆さんに着せると不思議の国のアリスのコスプレのようだ。シンナーで脳みそが溶けたとかいう茶髪の子は、唯一若いのが、ブクブクと太りだしたために南方系人種を思わせ、そいつに制服を着ると、某オペラ歌手にそっくりだ。

カウンターの奥では、ヤスと半年前から来ているバイトの吉田が、経理用で買い込んだパソコンを熱心に覗き込んでいた。ヤスはいつもより嬉しそうな顔をして、だらしなく口が開いている。

加羽沢が画面を見ると、外人の金髪美人が大腿を広げて、脇に立った男の巨大なシロモノを口に啞え込んでいた。

「なんだこりゃ。」

「インターネットです。」

「インターネットつうのはこんなもんだったのか。」

「いや、そうじゃなくて、こういうのも見れるってことです。」

「…これじゃ、商売も上がっちゃう訳だ。」

加羽沢が妙な感心をする。

「こういうの出して、ヤバくないのか。」

「アメリカのサイトだから、いいんです。」

「アメリカのテレビがなんで見れるんだ。」

「それは、電話回線を通して……。」

「バカヤロ、それじゃ、電話代が大変じゃねえか。」

「いいえ、電話代は、都内の通話料金と同じです。」

吉田が困った顔をする。こういう時の癖で天然パーマの頭を掻いていた。

「そりゃ、いつてえどういいう訳だ。」

「つまり、プロバイダーがいて、そこにサーバーがあつて、そこと海外が繋がってるんです。だから、ここからアクセスするのは、東京のプロバイダーのサーバーまでだから……。」

「俺にや、わからん。」

加羽沢は首を振っていった。

吉田がマウスを操作するたびに画面が変わり、ヤスが「おうおう」と興奮する。

「とにかく、こういう感じでパソコンを使って、あちこちのホームページを見るっていうのがインターネットなんです。」

加羽沢は、曖昧にうなづいた。

「ホームページによつては、もう買い物だってちゃんとできるんですよ。それが今後の小売りの基本になるとまで言われてます。だから、これらの商売の話はインターネットぬきではできません。」

「なんでそんな事知ってるんだ。」

「僕は、W大学でベンチャービジネスを勉強してるんです。インターネットの使い方は重要な課題なんですよ。」

吉田が得意そうにいう。

「インターネットを使ったビジネスとしては、いろんな商売が考えられますが、例えば、インターネットカフェなんていうものが既にあります。だから、ここにパソコンを十台ばかり並べて、インターネットキャバレーなんていうのもできるんですけど、どうですか。」

パソコンの格好をしたホステスがいるキャバレーを頭の中で想像して、加羽沢は腰を浮かした。

「やっぱり、俺にや、わからん。」

カタカナだらけの日本語を聞いて、ひどく疲れたような気がした。ただ、もうこれからは、エロ写真を売ったって、たいして商売にならないだろうということだけはわかった。

八時過ぎに客が一人で入って来た。他に客がいないので、四人いたホステスが全部付いてしまい、当人はしごくご満悦そうな様子である。

「あの客知ってるか。」

「池之端の葬儀屋の社長。こればつかしは景気不景気関係なしで。今日は友引で焼き場が休みなもんすから、暇なんですよ。こないだ来た時もしかそんな事いってましたぜ。あと、お得意さんで残ってるのは、谷中の坊さんだけ。」

「こうなったら、本当に何か別の商売でも考えなきゃならんな。」

結局、この日の客は、葬儀屋の社長一人きりだった。禿げ頭にキスマークを付けて、客が帰ると、残ったホステス達も落ち着かなくなった。

「もう開けてる方が高く付きやすんで。」

テツは早々に店仕舞いに取り掛かった。

「おう、そのインターネットつう商売、なんとかなんねえか。」

帰りがけに加羽沢がこう尋ねると、吉田は嬉しそうに

「じゃあ、暇だから考えて来ます」

と、いつて出ていった。

翌日、吉田は自前のノート型パソコンを担いで店に現われた。電源をつなぐと、カウンターのの上に置いて加羽沢たちを呼んだ。

「すみません。これ見て欲しいんですけど。」

「何するんだ。」

「プレゼンテーションです。」

テツとヤスが、何かもらえると勘違いして集まって来た。パソコンの液晶の画面に絵が映った。

「紙芝居みてえつすね。」

と、テツがいう。

『プロジェクト893、テーマ、インターネットを使った新規事業開拓。』太字で書かれた表紙の次に、画面が変わると大きく一億と書いてあった。

「パソコンの普及は全世界で、一億台強といわれています。一方インターネットの利用者は、約五千万人。アメリカのAOLという会社だけでも世界に会員が二千四百万人います。同じくアメリカのある学者は、インターネットの利用者が2000年度には、十億人に達するだろうと予測しています。」

「一人から一円づつもらったって十億か。こいつは悪くねえな。」

テツがおかしな感心をしている。

吉田がいうには、パソコンに商品の説明を載せておくと、とにかく膨大な人の目に留まる可能性があるということだった。そこで注文を取ることで商売ができるのだが、問題はいくつかあって、まず何を売るかということ。次にそれをどうやって届けて、どうやって代金を回収するかということだ。目の前に客がないというのが、普通の商店とは大きな違いになる。

「宅配便を使って、代金まで回収してもらったり、クレジットカードを

使うことも考えられますので、二つ目の問題はなんとかできると思いますが。」

しかし、電子取引では、代金決済の部分が今後の課題とされている。したがって、今は、まだ完全な状態とはいえない。例えば、品物を受け取って金を払わないやつが出て来る可能性がある。逆に、金だけとって品物を送らないやつもいるようだから、どっちもどっちではあるが、要は、あまり高額の商品を扱おうとすると、売り手の危険が大きいかといつて、クレジットカードや宅配を扱おうとすると、経費がかさむので、ある程度の利益が出る商品を扱わなければならない。

「つまり、どこでも買えるような物で、安い商品だと、ちよつときついです。」

ここいらでヤスは飽きたらしく鼻くそを掘り出した。

吉田は、パソコンに円グラフを映し出した。

「では、ここでどんな会社か、インターネットにホームページを出しているか調べてみましょう。これは、超有名なインターネットのサービソ会社にはホームページを登録している企業の業種別内訳です。コンピュータやインターネットサービスの会社の数が非常に多いのは、うなずけるとして、自動車、建設、健康関連の会社が健闘しています。中でも注目はこちら、十四番目のアダルト業界。何でアダルト業界がこのベスト十五に入ってしまうのでしょうか。世の中の企業の構成からすると、このアダルト関連企業の数に異様に多いと思いませんか。」

確かにエレクトロニクス、アパレル、製造、出版といった業界がインターネットに出てくるのは、宣伝の事を考えると当たりまえともいえる。しかし、アダルト業界がそれにびったりと並んで企業数が拮抗しているというのは不思議だ。

「要は、アダルト業界が、インターネットに合っているんです。」

吉田は得意にそう結論づけた。

「実際、あの手のものはその辺で買いつらいでしょう。逆に、売る方は、仕入れ原価の割に、結構高い値段で売れる。」

「じゃ、あすこのポルノショップの親爺に口聞いてもらって、バイブとか売ればいいのか。」

「そこなんですけどね。結論からいうと、もうそれじゃ駄目なんです。競合が多すぎて、もつと工夫が無いと駄目です。」

調べてみたんですが、どのホームページでも品揃え、価格にさして違いはありません。これじゃもう売れないでしょう。

実際、ある所で聞くと、初期の頃はインターネットで、月々百万円近くも売り上げがあったそうです。この手の商売としては、かなり画期的な売り上金額です。しかし、今は、その半分以下、下手したら十分の一以下だそうです。」

「…甘かねえなあ。」

「問題は、やはり何を売るかという事なんです。僕の考えてきたのはここまでです。」

可愛い女の子のヌードが画面に現われて、真ん中にENDと書いてあった。

この日は、金曜日が二十五日の給料日と重なって、久々に客が四組も入り、それ以上の話ではできなかった。最後に吉田が、

「今度は、ブレイクストーリーミングでもやってみましょうか。」
と、いった。

「なんだそりゃ。」

「マーケティングで、商品開発の時なんかには、知恵を出し合う手法なんだそうです。おもしろいからやってみましょう。」

翌日は全員早めに集まる事になった。吉田の指示で店のソファアームに車座になって座った。

「今日は、加羽沢さんのご紹介で、アダルトショップ誠実堂のご主人にも来ていただいています。」

きちんとネクタイを締めた六十代の紳士がみなに軽く頭を下げた。

「みなさん、そんなに緊張しないで下さいよ。」

どことなく試験を待つような雰囲気だった。一方で、クリップボードを持った吉田はかなり張り切り切っている。

「では、ルールを説明します。僕がキーワードをいいますので、それについてなんでもいいから、思いついた事をいって下さい。記録は僕が取ります。ただ、一っだけ約束事があります。それは、前の人がいった事を、決して否定したり、けなしたりしない事です。なんでも、いいねえ。いいこというねえ。そう思って続けて下さい。簡単でしょう。」

加羽沢もテツもヤスも慣れないことにどうも落ち着かない様子である。

「では、テツさんから。キーワードは、アダルトショップ。」

「えっ、あっ、アダルトショップね。何思ったかいやあいんすよね。ならば、コンビニ。」

「何だそりゃ。」

「いや、近所でコンビニのとなりにあったから。」

「なんだくだらねえ。」

「加羽沢さん、いいんです。コンビニのとなりってコメントでも。テツさんにその先を続けさせて下さい。」

「だから、コンビニのとなりで、売ってるもんは、バイブ、下着にビデオだろ。そーいや訳のわかんない薬なんかも売ってたな。あとは、うーんと。」

「その辺の事でしたら、私がお手伝い致します。」

誠実堂の主人が助け船を出した。

「薬は薬事法というのがございまして、何かあると困りますので、うちの店では扱っておりませんが、強壮剤から、感度の良くなる薬、逆に感度の悪くなる早漏防止剤やフェロモンの分泌を促して女性の方にもてるようになるという薬までございます。」

あと、忘れてならないのは、SMの方のロープ、ろうそく、鞭。一口に鞭といいましてもいろいろございまして……。」

誠実堂の主人は、鞭に始まって、バイブレーターの商品に込められた経営哲学まで延々と教えてくれた。

「加羽沢さんはいかがですか。」

「……だから、変態。変態といやあ犬。」

「兄貴、変なもん好きっすね。」

「バカヤロ、おれじゃねえって。そういうやつがいたんだよ。あと、ブルセラ。」

「これも危ないっすね。」

「だから、俺じゃねえって。ぶつとばされてえか、手前は。」

「ややこしくなったので、そこは、その辺でやめておきましょう。」

吉田が止めに入った。

「ヤスさんはどうですか。」

「犬……。犬のシヨンベン……。」

一瞬の沈黙が訪れた。

「そーいやあ、シヨンベンで思い出したんすけどね。こないだイメクラやってる娘に聞いたたら、本気でシヨンベン売ってくれっていうやつがいるっとうんすよね。その娘、本当に一万円で売ったって。」

テツがその場を取り繕うようにいった。

「そりゃ、案外面白いかもしれませんよ。まだ他の人があまり扱っていませんし。」

誠実堂の主人がいう。

「私の知っている人にもお好きな方がたくさんいます。なんかの拍子に興味を持つちまつてそっちの方が好きになったという方は案外多いのではないのでしょうか。その手の雑誌も出回っているようですし。そういう方は、先ほどのお話じゃありませんが、みなさん品物の調達先に苦心されています。ただ、お店としては、小便を小便としてそのまま売る訳にはいきません。何かもう一工夫すればまた違うんでしょうけどね。」

一同は、ここで釣り込まれてうなずいた。

「世の中いろいろな人がいますが、いわゆる変態という行為を実際に行う人は、そう多くありません。そりゃそうでしょう。頭の中で考えた変態的な行為を、みながみな実践したら、そこら中変態だらけになってしまいます。」

その手の趣味の人は、本当は、かなりの人数いるのだが、理性あるいは世間体をはたらいて、行為に至る前の段階で満足してしている。実際に、

S Mクラブに通っているのは、あまたいる変態のごく一部である。ほとんどは、想像が満たされればそれで満足する。となれば、変態は想像力の産物であり、また、大半の変態は想像力の範囲のものであるといえる。

「ですから、変態の方達は人並み優れた想像力をお持ちの方が多くいうで、私どもは、その想像力を相手にして商売をしている訳です。」
誠実堂の主人は、にこやかにそう話した。

「逆に、想像力が貧しいと、本当にやっちゃうんでしょね。ほんとにやったらどうなるかって事が想像できないから。」

吉田がそういうと、

「そうなんですよ。だから、本当の変態さんは、みな紳士ですよ。私みたいに。」

誠実堂の主人は、ホホホッと笑った。

「で、シヨンベンの話しだが。」

「ですから、私が思うに、その小便から、女の方を想像して楽しまれる方もいるのではないかと。これはかなり高度な変態ですな。そして、そういった方は、実際、私達の想像しているよりは、遥かに多いと。」

「何人くらい。」

「まあ、それは、やってみないとわかりませんね。でも、生まれて最初にあるのが、母乳と尿の匂いでしよう。だから小便には、きつと何かあるのかもしれないね。心理学的にはきつと説明がつくはずです。」

吉田が的確にフォローした。

「あと、人間以外の動物では小便の匂いでテリトリーを示したりして、小便がだいぶ重要な働きをするみたいですから、人間にだって何かあるのかもしれない。昔、犬を飼っていたんですけど、散歩の時なんか匂いをかぐのに必死でしたよ。」

「まあ、女の子に無理やりウンコさせて喜んでいるやつまでいるんすからね。それよりは、まともでいいつすよ。」

まさに、目くそ鼻くそを笑う話しだが、テツがわかったようなことをいう。

「で、本気でシヨンベン売るって事か。」

「それは、またもう少し考えてみましょう。特に売り方の問題が、まだだいが残っていると思います。でも、誠実堂さんのおっしゃった他に誰もやっていないという所が、気になりますね。」

店の開店時間が近づいたので、この日はこれでお開きとなった。

十一時頃、例によって早々と店仕舞いをしてしていると、来客があった。光子だった。

エルメスの馬柄のブラウスに黄色のケリーバック。紫の柄物のシャネルスーツ。首からはGマークのネックレスが重そうにぶら下がっていた。

「ジャンボ尾崎みてえに派手っすね。」
テツが小声でいう。

光子はかなり酔っている様子だった。後からもう一人、連れが入ってきた。

「征さん、テツさん、お久しぶり。この人、金田さん。」

色の浅黒い痩せ型の男だった。ゼニアのスーツにドレスシャツの胸元が開いていて、ブレスレットと同じデザインの分厚い金のネックレスが見えた。はれぼったい眼の奥でキラリと光った物があった。

「金田さんはね。あたしの彼。」

光子は、そういつてふらふらと金田に近づくと、いきなり首に腕を回して濃厚なキスをした。唇を離すと、抱きついたまま首だけこちらに向けて、ニタリと笑った。

「このお店、よかったら金田さんが買ってくれてよ。」

「姐さん、店仕舞いなもんで、今日はお引き取りを：。」

「あたしのこと、嫌いなんでしょ。顔に出てるわよ。」

「そんな、めっそもねえ。」

「そーおー。じゃ、もしかしたら：、征ちゃんは、金ちゃんのことか妬いてるんだ。」

そういつて光子は、ひとしきり大声で笑うと、金田に抱かれるようにして出ていった。帰りしなに金田は、こちらに向かってしっかりとメンチを切っていった。

「相変わらず男の趣味悪いっすね。」

「：。」

「なんで来たんすかね。」

「さあな。」

加羽沢は、出入りでつけた手の甲の古傷が久々に引きつるような気がした。

その日、吉田は早々と店に出て、パソコンに向かっていた。

「いいアイデアが浮かんで来るのを待っていても仕方がないと思って、ホームページだけ作ってみました。」

画面を見ると、黒字に金色の文字が浮かび上がっている。

「なんて読むんだ。」

「エル・ドラド。スペイン語で『黄金郷』という意味です。ここに商品と値段、こちらの連絡先のEメールを貼り付けて登録すると、受注が取れるようになります。」

「商品の件はどうするんだ。」

「いや、まず話だけでも、どれくらい反応があるのかがわかります。反応があれば、少しやってみる。少しやってみてダメだったら、ごめんなさいして、あとはたたむだけす。」

「本当にシヨンベン売るのがか。」

「そこは、冗談半分というところでサンプルくらいは作ってもいいでしょう。あの商品の打ち出し方だけは、面白いのでいろいろ考えてあります。ただ、値段だけは最初に決めておかないと。」

加羽沢はテツを呼んだ。
「マジっすか。」

「試しにやってみるって事だ。お前なら値段はいくらにする。」

「いくらって、ビール瓶一本もシヨンベン買うんすか。」

「それも決めなければいけないんですが、たぶん、ほんの少し、香水のサンプルくらいだから多くて二、三CCかな。」

「じゃあ、この手のもんっすからね。やっぱし二万円かな。」

「欲張っちゃいけねえ。」

「しかし、趣味のもんっすよ、これ。飛びつきりいい女のシヨンベンだったら、やっぱし高えんじゃねっすか。」

「あんまり高い値段付けて、シヨンベンなんか売っているのがバレたらどうなる。送料が高そうだから、三千円がいいとこだ。」

「だけど天然物っすよ。そんなに数はけけないんだから、もうちつと上見ないと。なあ、吉田。」

「そうですねえ。僕は、まだ誠実堂さんがいうほどこれで商売できるとは思えませんが、ただ、マーケティングの事を考えると荒利率は六十パーセントを確保したいですね。コストが二千五百円とすると、最低六、七千円は欲しいです。」

「じゃあ、六千円ぽつきりだ。」

「だから、兄貴は商売を知らねえっていうんすよ。これは小売りの商売っすよ。十円、二十円が大事なんだ。あっしの実家なんざあ小間物屋っすよ……。」

なんだかんだで、結局、七千九百八十円というバーゲンセールのような値段になった。値段が決まると話しはぐっと具体化に近づいたような気がした。

「今回は、試供品という事で希望者二十名に限り無料としておきます。次に商品の事なんです……。」

吉田がいうには、こちらから小便であるという事は一切いわないで、相手に気付かせる方法を取るということだった。

「いろんな問題がからみますので、この商品は内容や使用法をまったく説明できません。だから、こんな風に女の人の写真を載せて、その側に、グラスに入った液体を置きます。で、買って下さいっていうんです。それだけです。」

吉田は、週刊誌に載っている水着のグラビアを見せながらいった。

「だから、原材料提供者の写真が要ります。」

「ほんとにその女のシヨンベンにするんすか。」

「商いだ。最初から騙しとあつちや気分がよくねえ。テツ、誰か女知らねえか。」

「シヨンベンくれる女だったってねえ。」

店の者にはまだ知られたくないし、やはりその辺は、餅は餅屋で、近所のSMクラブの女王様なら話しが早いという事になった。

「それじゃ明日デジカメ持って来ます。あと、商品名なんですけど。」
 ゴールデンでは、新宿みたいな感じがするということで、ここは日本語の『黄金液』に決まった。

「調べてみますが、一般名称に近くなっていますので、おそらく商標の方は大丈夫でしょう。」

いつの間にか、新商売の第一歩が踏み出されていった。

翌日、テツと吉田が帰ってきた。

「どうだったい。」

「いやあ、あすこの女王様は、Sの日とMの日が交互にくるんすよ。今日はSの日だったんで、もう恐えーのなんの。いきなり足舐めさせられて、もうちつとで鞭つすよ。」

「写真は撮れたのか。」

「それは、ばっちりです。あえて普通の格好してもらってます。」

吉田がパソコンにカメラを繋ぎ、写真を映し出した。ソファーに半身でひじを支えに横たわった女王様が、自前らしい黒のドレス姿で写っている。背景にちらりと下がっている鎖が意味不明だが、化粧もややケバイといったところだ。腰の辺りにブランドグラスが置かれ、中に金色の液体が入っている。

「これは本物か。」

「いえ、缶入りの日本茶を使いました。撮影には本物よりきれいなんで。」

「じゃ、本物は。」

「もう、ちゃんともらって来やしたぜ。」

テツがコンビニの袋に入ったペットボトルを出した。

「だけど、商売だからって、一万円とられやした。」

「バカヤロ。それじゃこっちの商売になんねえだろが。次からは千円にしてもらって領収書取ってこい。」

「そんな事いったら、それこそ本当に鞭打ちつすよ。部屋入ったら、いきなり後ろ手に手錠をかけたんだから。それが素早いなんのって。」

「次はMの日に行きやいいんだろ。」

「じゃあ、僕はヤスさんと容器を探してきます。」

吉田がヤスを連れて出て行った。

「これがいいと思うんですけど。」

吉田が小さな瓶を取り出した。透明のガラスにコルクの栓がはまっている。

「デパートのファンシーショップで見つけたんです。中には星の砂が入ってました。これがあるだけ買って来たので、容器は三十個手に入りました。次からは、容器のメーカーから直接買うようにします。で、これだけですと、栓が抜けてしまうので、送れません。」

吉田は色付きのテープを取り出した。

「キティちゃんの描いてあるテープまで試したんですが、結局はこれ。黒のテープが中身の金色にマッチして高そうに見えます。中身はただ仕込んでありませんが、これに、同じくファンシーショップから買った黒のリボンを付けると完成です。」

中の物を知らなければ、香水でも入っているように見えるだろう。

「これもホームページに写真を撮って貼り付けます。申し込み用紙のフォーマットは、もうホームページの中に出来ていますから、もう完成です。あと、クレジットカード会社への登録の問題が残っているんですが。」

「この店の番号をそのまま使うと商売が違って、ややこしくなるな。新規登録は時間がかかるし、できるかどうかわからねえ。誠実堂の親爺にやらせてみるか。」

「あの親爺、紳士の顔してやすが、商売となると渋いつすよ。弱み握られねえうちに脅しといた方がいいんじゃないか。」

「新しい商売をやるうってんだ。昔のやり方はやめておこう。」

この日、インターネットに、本当に店が開いた。

「客は来たか。」

「そりやまだ無理ですよ。このホームページのこと、まだ誰も知らないんですから。画面のここにカウンターが付いていますので、誰かがアクセスすると数字が出ます。そうだ、外人がアクセスできるように英語バージョンも作っておこう。『黄金液』は、『ゴールデン・ジュース』ですかね。」

吉田は、忙しそうである。

「ここからが面白いところなんです。こちらから他の人のホームページに行って、掲示板というコーナーがある所には、そこに書き込みをします。チャットというおしゃべりのコーナーがある所では、おしゃべりに参加します。そうやってこのホームページの宣伝をするんです。『あのホームページの黄金液ってなんだろう。』とかいってね。いわゆる口コミです。まずはSMかスカトロ関係のホームページでやってみます。」

「そんなもんがあるのか。」

「この検索というツールを使って、例えばSMと入れると、ほら、こんなにたくさん出てきますよ。」

インターネットは、三万件以上のキーワード該当個所を検索していた。

「ションベンと入れたらどうなる。」

「やってみましょう。これでも四千件以上出てきますね。ビデオ屋が多いようですが、もしかしたら、もうこのネタで商売している人がいるかもしれませんね。気になるので、チェックしておきます。まさか小便を特許で押さえてはいないでしょうけど。」

吉田はこの日ずっとパソコンに向かっていた。

一方、店の台所では、前掛けをしたヤスが長いスポイトで、ペットボトルから小瓶に小便を移し替えている。

「いくら女王様っていったって、匂いは同じっすよね。」

「次は、どっか場所を考えなきゃいけない。話している分にはいいんだが、やっぱし本物が出てくると、どうも勝手が違う。」

この日は、吉田の努力にも関わらず、たいした反応は無かったようだった。

「初日なんてこんなもんです。まだまだ手はいっぱいありますので焦らないで下さい。メールで問い合わせは一晚中來ますから、今日はもう放っておきます」

確かに小便が飛ぶように売れるとは思えないが、なんとなく胸が高鳴るような期待感があつた。

「昨日から届いたEメールは、ちようど十件でした。ほとんどが、黄金液って何だという問い合わせか、タダなら何でもいからおくれという反応です。その中で二件、早くも黄金液を小便だと嗅ぎ付けた人がいます。」

一人は、『あのおねえさんのおしっこなら送って下さい。』という単純な内容ですが、もう一人の方は、すごいです。公務員を定年退職した七十八歳のおじいさんが、メンメンと書いてきてくれました。その一部ですが、

『小生、三年前に妻を亡くし、以後孤閨を守っておりますが、やはりこの齢になりましたも、ご夫人に対する思いは忘れがたく。もし広告の品が写真の方のお小水であるなら、死んだ妻のむつきを取り替えた折りに嗅いだあの馥郁たる香りを思い出し、この世のよすがと致したく、なにとぞ：云々。』ね、すごいでしょ。こんな世界もあるんですね。」

「俺には、わからん。」

「歳食うと、立たないから、別なもんが良くなるんじゃないすか。婆さんが美人に見えるっていうし。」

「この後どうすんだ。爺さんに送ってやるのか。」

「少なくとも一週間は、何も反応しません。引き続き他のホームページで謎の黄金液のうわさを流すだけです。試供品の提供は消費者組合から広告に対するチェックがかかる事がありますので、ちゃんと実績を残します。ただ、それも、もう少し後です。」

「サンプルのシヨンペンは悪くならねえか。」

「うーん、まあ、それは、ありえます。発送時に『なま物ですのでお早めにご使用下さい。』というカードでもいれましょうか。あと、『子供の手の届く所に置かないで下さい。』とかいう一般的な注意書きも要ると思います。」

吉田が、水を得た魚のように生き生きしてきた。脇ではヤスが、太い指で瓶にリボンを巻こうと四苦八苦している。

「そんなじゃ、摩利支天さんに行ってお賽銭でもあげてくるか。」
こうして、インターネット開店のひと騒ぎは終わった。

はずみが付くと他の事も動き出すようで、この週にはキャバレーにも、盛況とまではいかないが、以前より客が入るようになった。吉田が調子に乗ってインターネットにキャバレーのホームページまで載せてしまったのも、定かではないが、何か影響を与えたのかもしれない。

「こつからフェロモンでも出てるんじゃないかね。」
「まさか。」

「でも、猫だつてそろそろさかりがつくころつすよ。人間だつてねえ…。」

「このまま様子を見るしかねえ。」

吉田は、相変わらずパソコンに向かっている。いつの間にかカウンターの数字は百を超え、四十件以上のEメールが来ていた。

「今からこの表示を出します。」

『品薄のためお客様には多大なご迷惑をおかけしております。誠に申し訳ございませんが、もうしばらくお待ち下さい。尚、商品は、大量生産が出来ないため、引き続き品薄状態が続くと思われます。ご注文はお早めにお寄せ下さるようお願い申し上げます。』
と、どうですか。」

「まだ一本も売っちゃいねえんじゃないかねえか。」

「そうですね。でも、こう聞くと、とりあえず注文したくなるでしょう。もうしばらくこうやつて煽ります。」

「忙しいのに大変だな。」

「いいんです、学生はこの時期わりとヒマですから。入学試験が終わるまでは僕たちの授業は無いし。そのかわり、うまくいった時のボーナスはお願いしますね。あと、サンプルは、本当に買ってくれそうな人にまず送ってみます。それから、いよいよ出荷となると、伝票とか細かい手続きが要るはずですから、その辺のことは、テツさんと打ち合わせしておきます。」

みな昼の仕事と夜の仕事を二つこなすようになっていた。

この夜、自転車は止まっていなかった。中に明りが見えるので、娘が居るといふ事はわかった。しかし、加羽沢は呼び鈴を押す事をさすがにた

めらった。ドアの郵便受けに封筒を差し込んで離すと、蓋が閉まる際に、思いのほか大きな音をたてた。中で人が動く気配がするので、加羽沢は急いで戸口を離れ、もと来た道を引き返した。ドアが開いて、娘の影だけが、ちらりと視界をかすめたが、加羽沢は後ろに向かつて手を振ると、そのまま歩きつづけた。娘がずっと戸口に立っているのを背中で感じていた。

翌日、店に出ると、吉田が紙切れを持って待っていた。

「加羽沢さん宛てに女の人からキャバレーのホームページにメールが届いたんですが。心当たりありますか。」

メールは娘からの物だった。ただひとこと「ありがとう。」と書いてあった。

「おかげさまで、今日現在で約二十個注文が取れています。ただ、これでは、人件費まで入れたら商売にはなりません。もう少しがんばる必要があります。月に百個売る事を目標にしましょう。そうすれば小遣いくらい出るようになります。」

あと、サンプルを送った反応が来ました。

『小便なんか送るな。バカヤロ。』

これは何か最初から勘違いした人ですね。

次は、例のおじいさんなんですが、

『この度は結構なお品をお送りいただきありがとうございます。まことに甘露。絶えて久しい喜びのうちに賞味させていただきました。』

ということです。」

「じゃ、爺さん飲んじまったのか。」

「そういうことらしいです。」

「爺さん病気になるねえか。」

「詳しくはわかりませんが、空気に触れさせておくとアンモニアが出てきて体には良くないそうです。でも、宇宙船のアポロ計画で、飲料水に変える研究をしていましたし、飲尿健康法なんていうのがあったくらいですので、即死ぬような事はないでしょう。でも、それを売る立場としては危険です。飲んだり、体に摂取する事はやめさせる指導が要ります。」

それでも、もし、飲んだ人が死んだりしたら、注意書きを書いておいても、法律で何らかの責任を問われます。これは重大な経営上の決断です。」

「飲むなど書いてあんのに、みんなが飲む訳でもねえだろう。」

「そこが難しい所です。PL法っていうんですが、作って売る側には厳しく出来ています。よく猫を電子レンジに入れて乾かそうとした例が引き合いに出されます。電子レンジに猫を入れて乾かしてはいけませんと

書いてなかったというんですが、それでもメーカーは逃げられません。」

「テツ、お前、試しに飲んでみる。」

「それはないっすよ、兄貴。」

「一本くらい飲んででもデータになりませんので、あまり意味ありません。」

「そんなじゃ、俺にや、わからん。」

結局、この問題には結論が出なかった。なぜ商売がそんなに難しい問題になってしまうのか。加羽沢は、その辺の所がよく理解できなかった。吉田は、どうやって品物を新鮮なうちに届けるかというマーケティング上の重要課題解決に取り組んでいる。

そうこうしているうちに、ホームページには順調にアクセスが増え始めた。さすがに怪しげな写真だけで注文する人間は少ないが、黄金液が自分の望む物である事が分かると、その手の顧客にはこのホームページが貴重な供給源となる。一回に五本、六本まとめ買いする者が出始めた。

「テツさん、すみませんが、また女王様お願いします。昨日もらった分、もう注文が入っちゃったんで。」

「もう、昨日だつて乳絞りじゃないつてさんざんいびられて、ほんとにまいったっすよ。あつちは専門家だから。」

「まだ鞭でなぐられちゃいねえだろ。」

「そりやそうっすよ。近くよらないもん。だから、言葉責めの方がやらときついで。千円でいいよつていつときながら、こつちが五千円払うから許しくれつていうまでいじめるんすよ。もうたまんないっすよ。」

「それはそうと、瓶詰め作業もここじゃもうまかないきれねえ。テツ、おめえんとこの部屋を貸せ。」

「兄貴、そりやないっすよ。そんなことしたら、あの匂いで、家で寝ても夢の中に女王様が出てきちゃう。」

「いいから。それがそのうち快感に変わるんだつて。」

急遽、テツのアパートが生産拠点という事になった。

テツのアパートは本郷にあった。まとめて購入した瓶が四百個近く残っていた上に、リボンなどの在庫もあり、その辺はヤスが荷造りをして運ぶ事になった。ヤスは、大きな唐草模様の風呂敷きに箱を並べて積んでいる。

最近のヤスの作業着は白衣で、どこか保健所の職員にでも見える。本人も、それがえらく気に入っている様子だが、胸に付いた黄色の染みを何とかする必要がある。

そこに、レインコートを着た禿げ頭の客が開店前なのに入ってきた。刑事の官地である。

「ご無沙汰しやした。」

「夜の商売だつてのに、何で昼間っから働いてんだ。」

「貧乏暇なしで。」

「そりゃたいへん結構なことだが、お前ら最近ヤバイ橋渡ってねえだろな。」

「どんな橋で。」

「シャブがらみとかよ。」

「めっそもねえ。」

加羽沢がそういったとたん、ヤスが風呂敷き包みを動かしたので、中から瓶が一つ転がり出て、宮地の足の前で止まった。

「なんだこりゃ。」

「こないだ景品に星の砂配った時の残りで。」

「星の砂あ。」

「そうです。こつちに中身の入ったのがありますから。」

吉田がデパートから買ってきた時の本物を手渡した。

「えらく場違いな物配るな。」

「そんな事ありやせんで。ここにキテーちゃんのテープだつてありやす。」

「まあ、いいか。これ、もらつとくからよ。」

宮地は「悪い事するなよ」と一言い残すと、店から出ていった。

「あれ、鑑識に行くんすかね。」

「こちとら、後ろ暗い事はしていねえんだから、何もビビることあねえや。」

それでも一応、尾行のついていない事を確認して、加羽沢はヤスに荷物を届けさせた。

翌日、加羽沢が店に出ると、吉田が血相を変えて飛んできた。

「大変です。アメリカから三百個も注文が来ています。」

「ほんとか。」

「ちゃんとクレジットカードの番号が書いてあります。クレジットカード会社にも承認をもらいました。」

「あつちは何買うかわかってんのか。」

「こないだサンプルを送ったら、同じ人から注文が来たんです。だから、本気でしよう。やっぱり初回は、無料でサンプルを送るのが有効なようです。」

「しかし、三百個とは、おそれ入ったな。」

「それがアメリカなんでしょう。」

そうなると仕入れの方が問題である。容器の方は何とかなるにしても、中身が問題だ。

「今の注文からすると、一リットル以上要ります。移し替えの時にだいぶロスが出ていますので。」

「女王様だけで大丈夫か。」

「二、三日分を全部もらうことになるでしょう。」

にわかに製造工場が活況を呈した。テツが自宅と女王様の間を往復することになった。

「シヨンベンなんて、誰んだって同じっすよ。あつしらの分で間に合わせちまいましよよ。」

「いや、客をなめちまつてはいけねえ。この手の物を欲しがる人間には、必ず違いがわかる。」

加羽沢が自信を持ってそう断言するので、テツはぼやきながらも女王様詣でを繰り返した。吉田も工場でリボン結びを手伝ったが、材料の入荷量が少なく効率が悪い。

「世の中不況だつてのに、なんでこんなんで忙しいのか。もう自分の商売が何だかわからなくなってきたっすよ。」

テツは、またブツブツいいながら仕入れに出かけていった。

物が物とはいえ、金色の液体の入った小瓶が数百個も並ぶとなかなかの壮観である。これまでの商売には無かった充実感があった。この商品がみんな海を越えてはるばるアメリカまで行くと思うと、背筋をゾクゾクとするものが走った。この商売で、生産者としての誇りを身につけたようである。

加羽沢は、ヤスがけつつまずいて床に材料をこぼした時などは、思わず頭を張ってしまった。

そこにテツが帰ってきた。

「兄貴、大変だ。」

「どうしたい。」

「女王様が淋病になっちゃった。」

見ると、テツは側に女王様を連れていた。写真より、ずっと歳がいつている。ハイヒールを脱いだとしても、思っていたより遥かに小柄で、ビニールの手提げ袋を提げているところなどは、ごく普通のおばさんである。

「この人がどうしても付いて来てくれっていうんで来たんだけどさ。今日、ちよつとおかしいんで店から病院に行ったら、検査されて、菌が出てますっていうのよ。こないだ、あたしのあるそこに自分の精液塗ったやつがいてさ。洗ったんだけど、そいつが怪しかったみたい。」

「いつごろの話して。」

「そうね、五日くらい前かな。気が付かなくてごめんね。抗生物質使うから、一週間もすれば治るっていうんだけどね。また治ったらサービスするからさ、許してよね。」

女王様は、明るく笑って帰って行ったが、吉田のいう経営上の重大な決断がまた残った。

「てえことは、この辺のものは売り物にならねえってことだ。」

「匂いを嗅ぐだけなら大丈夫ですけど、飲んだり自分の体にかかけたり

する人もいますから、やはり危ないです。」

「出来ちまったものはどうする。」

「中身は捨てて、瓶は、消毒すればまた使えるでしょう。でも、またこういう事態があるとすると、ロットナンバーか製造年月日があるのかな……。」

問題は、新しい材料の供給先だった。

「テツ、おめえの女はどうだ。」

「いや、今のはだめっす。せんにも話したかもしれやせんが、胸がでかいもんで、ブラジャーすると人一倍肩が凝るっていつて、毎日、ビタミン剤をがばがば飲んでるんすよ。だから、わかるっしょ。シヨンベンはビタミン臭くつてもういけやせん。」

「前の女は。」

「こんな事をたのめるくらいなら、別れたりしねえっす。」

「他にもいたろう。」

「そりや、いたんすがね。あつし別れるのが下手なんで。毎度、恨み残してばっかし。あてにならねえっす。」

「情けねえ野郎だ。」

吉田も、彼女がいるくらいなら、こんなにアルバイトに精を出すはずもなく、パソコンとEメール友達がせいぜいで、ヤスについては、さらに期待薄。加羽沢は仕方なく自分の昔の女を訪ねることにした。

テツに吉原まで送らせると、加羽沢はそのまま一件のソーブランドに入ってしまった。店は、昔と変わっていなかった。客と思っただろう、ボーイが恭しく出迎える。

「政子はいるか。」

「はい、政子さんは出ていますが、ご予約のお名前は。」

「俺が来たといやわかる。」

ボーイは怪訝そうな顔をして奥に引っ込んでいった。しばらくして、背の高い女が玉のれんを分けて現われた。

「あら、征さん、ずいぶんとお久しぶり。」

本当に嬉しそうな笑顔を見せるのが、相変わらずだった。何度見てもいいもんだと加羽沢は思った。

昔、政子が以前の店で働いていた時に、親分のとつてで、悪い客とのトラブルを解決してやった事があった。その後しばらく馴染みの関係になっていたが、例によってまた面倒になって、足が遠のいてしまった。政子が店を変え、この高級店で働き始めた頃、一度だけ訪れたのが最後だった。

当時はまだ娘の幼さが残っていたが、今では立派な、吉原の女という形容がぴったりする。少し顔が丸くなったような気がするが、百七センチを超え、長身と細くくびれたウエストはかつてのままだった。さり

げなく高そうな濃紺のスーツを着込んでいるのも懐かしい。

「ちよつといいかな。」

「征さんならなんとかするわ。」

政子は、ボーイに向かって、うなづきながらいった。加羽沢は政子の部屋に通された。

「何か飲む。」

「手間はとらせねえ。ただ、お前さんは一服してくんな。」

「征さんは。」

「俺あ、煙草やめた。」

「なら、私だけ吸えないじゃない。」

「その方が、俺が落ち着くんだけ。やってくれ。」

加羽沢は一連の顛末をたどたどしく政子に話して聞かせた。

「それじゃ、私のオシッコが欲しいってこと。」

この時ばかりは、きれいにトリミングされた長い眉が人の字に寄った。

「ま、そういうことだ。」

真剣になった時の癖で、政子が加羽沢の目をじっと見つめる。加羽沢は視線を受け止めきれず、下を向いてしまった。

「いいわ。征さんのたのみだから。ただ、私だって給水タンクじゃないんだから、今すぐ一リットルといわれたって出ないわよ。ボーイさんうまくいつて預けておくから、あとで人を寄こして。」

「すまねえ。」

「で、今日はどうするの。」

「おう、悪かった。入浴料とあれはおいていく。」

「こんな話しだけじゃもらえないわ。」

「お前も吉原の女だ。ただで働いちやいけねえ。」

「私の体に、もう興味ないってこと。」

「：お前の大きな足は、まだいいと思う：。」

加羽沢の声が小さくなってしまった。そんな加羽沢に、政子はまた例の笑顔で笑った。

「これ、私のプライベートな名刺。Eメールのアドレスが書いてあるから、私がかまらない時はそこにメールしておいて。次の物の受け渡しもメールで連絡するわ。いちいちここまで来ていたらたいへんでしょ。それに、今度またここに来て何もしようとしなかったら、私の方から強チンするかね。」

次の客が待っているからと、部屋の出口で別れた。帰りしなに抱きつかれて、唇を奪われた。マヌケな顔をしてしまったらしく、政子は加羽沢を見てひとしきり笑った。

吉田がEメールを送ると、政子はデジカメで撮った自分の写真を添付して送ってきた。

「No. 1 売り切れに付き、No. 2 をお送りします。という事にします。この人もかなりの美人だから問題ないでしょう。」

ホームページへの問い合わせは日増しに多くなってきた。アクセスだけなら数百件を超えるようになった。

「サンプルの発送はやっているのか。」

「住所を知らせてくれた人には出来るだけ送るようになっています。結構経費がかかっていますが、販促費としては、仕方ない所でしょう。」

テツさんが発送と代金回収を仕切ってくれていきますので、助かっています。僕はパソコンでリストをアウトプットして渡すだけです。でも、テツさん、出荷伝票だけはちゃんと僕に回してくれないと、回収がわからなくなりますよ。」

テツは、ここ二、三日ほとんどこの仕事にかかりつきりになってしまい、キャバレーには遅れて来る始末。まさに、本業が何だかわからなくなっていた。

「僕の計算では、アメリカ分を合わせると今月は三百万円以上の売り上げになると思います。サンプルの無料送付で初期の掛かりがからんだから、利益はまだ期待できませんが、この調子でいけば、来月からは給料も払えるんじゃないかと思います。」

回収も心配していたんですが、前払いの局留め郵送ってケースが多くて、結構現金が入って来ます。やはり、自宅に送られると困るんでしょうか。こちらとしてはキャッシュフローに貢献して助かっています。」

三日たつと、政子の写真がよかつたのか、さらに受注が伸びた。

「これじゃもう政子姐さん一人じゃ間に合わないかもしれせんよ。」

「こないだの、爺さんの客、どうしたい。」

「そういえば、最近静かですね。」

「死んだんじゃないやねえだろうな。」

「よしてくださいよ。縁起でもない。それよりやっと三百本たまったんで、アメリカに国際宅配便で送ったんです。そしたら、お客さんが税関から中身に付いて聞かれたそうです。」

「こっちからは、なんていったんだ。」

「ハーブを漬けた水だと連絡しました。ただ、用途を化粧品としたら、税金を五十パーセントもかけられたって、お客さんが怒っています。」

「何か適当に言い訳するしかねえだろう。とりあえず、あやまっちゃまえ。」

そこにテツがやって来た。

「いやあ、シヨンベンだろうが何だろうが、景気がいいって事はいいことつすね。」

仕事が好き調なせい、本人まで羽振りがよくなったように見える。濃いグリーンのアルマーニ風のジャケットは、仕立てが上品になってさも本物らしく、メツキのはげた香港製ダイヤ入りローレックスが、金色の新品に

換わっていた。

「こんだけ注文が入って品薄なんだから、ちつとは値上げしたらどうっすかね。材料の値段が上がったっていやあ一万円超えてもいけるっすよ。」

「商売は細く長くだ。」

「兄貴、いくら中身がシヨンベンだからってそうはいかねえっすよ。この手の商売は花火みたいに一発ドカンとやっておしまいにするのが一番なんで。儲かったところで、こんなシロモノ早くたたんじまわないと、あとがヤベえっすよ。」

「まだ儲かったとはいえめえ。」

「そりやそうなんすけどね。誰だって作ろうと思や作れるもんでしょ。まねするやつが出てくりやすぐに値は下がるだろうし、そうなたらもう、手間がかかるだけでいい事ありやせんぜ。だから売れるときや高く売っちゃう。」

「べつにシヨンベンなんぎ無くったていいもんだ。それをわざわざ買ってくるっていう奇特な客がいたとこで、カサにきて値上げしちやあ、商売を甘く見てるってもんだ。」

「兄貴、そう兄貴のいってる事もわかるっすよ。でも、もうそういう商売は古いつてことっすよ…。」

二人で一丁前に経営の方針に関する議論が出来るようになっていた。テツが強気になれるほど、このところの受注は、伸びが著しい。五、六本どころか十本以上のまとめ買いが日に十件以上入ってくる。

「材料は足りているのか。」

「へえ、なんとか間に合っているっす。」

「金はどうしてある。」

「銀行に預けておくと税務署がヤベえと思つて筆筒預金。」

「吉田がいつてたが、来月にや割り前払うことになるから、きちつとしとけ。」

そこに、受話器を持った吉田が現われた。

「加羽沢さん、大変です。ヤスさんから電話なんです、工場に警察の人が来ているらしいんです。」

「ほんとか。」

「まだ部屋の中には入っていないようですが。」

「なら、俺たちが行くまでそのままがんばってろといつてくん。悪いが、店の方はたのむぜ。」

テツもあわてて、加羽沢よりも先に店を飛び出した。加羽沢がその後を追いかける。

本郷まで来ると、テツのアパートの前には、二人の男が立っていた。例の宮地である。もう一人は役者顔で、紺の三つ揃いを着た若い刑事だった。

「待たせてくれるじゃねえか。」

「おいでとは、知らなかったもんで。ガサ入れですかい。」

「いやあ、今日は住民の方と防犯の話でもしようかと思つてな。」

「旦那は、所轄が違うでしようが。」

「固い事いいてえんなら、それもいい。出直してくるが、そんなときや、話しが違うぞ。こつちからお願ひしている時の方が、いいんじゃないか。」

加羽沢はテツに開けるように目で促した。

「いや、しかし、ここはあつしんちすからね。あつしの都合もありやすんで。」

「つべこべぬかさねえで、開けてやんな。」

テツがインターフォンを押すと、心配そうな顔をしたヤスが内側からドアを開けた。例の白衣を着て、すっかりおじけづいている。

「邪魔してもいいか。」

「任意でことで、ようがす。」

玄関を上がるとさつそくヤスの仕事場が見えた。ビニールのテーブルクロスの上に、金色の液体の入った小瓶が並んでいる。つんとしたアンモニアの匂いがする。政子を思い出すと複雑な気がした。

役者顔が奥に入つて行き、宮地が残った。

「なんだこりゃ。」

「シヨンベンで。」

「なんだと。」

「だから、シヨンベンで。」

「嘘をつくな。嘘を。これがシヨンベンである訳が無い。」

宮地は、小瓶を一つ取ると鼻の前に持つていった。思わず顔をしかめたが、それでも納得がいかないらしい。

「いいか、これがなんかのヤクだったら、お前ら全員、一卷の終わりだ。」

宮地は小瓶を高々と振りかざしている。

「だから、本当にシヨンベンなんで。」

加羽沢がそういうと、宮地は、意を決したらしく、全員の顔をひと睨みすると、指を一本瓶の中に突っ込んで、それを恐る恐る眺めた。尚もその場にいる人間全員の注目を浴びている事に気付くと、今度は、指をエイとばかり口の中に入れた。

「ベツ、なんんだ、こりゃ。」

「だからシヨンベンで…。」

「…。」

「さつきからあつしが何か嘘をいいやしたか。」

「…うむ。正直者め。」

そこに、もう一人の若い方の刑事が戻つてきて、首を横に振った。他の部屋からも、めぼしいものは見つからなかったらしい。

「いいか、今日はこれで引き上げるが、今度つからは……」
 ここでググッと台詞につまると、宮地はもうひと睨みしただけで、急いで玄関から出ていった。加羽沢たち三人は、その場に立ったまま見送った。

テツがフーツと吐息を漏らす。

「いやー、ヤベえもんが出てこなくてよかつたつすね。」

「このネタだけでしょっ引くには、もうちっと手間がかかるだろう。」
 ヤスも嬉しそうにニタニタしている。

「それはそうと、ここまで来たついでだ。お前が集めたお宝を拝ましてもらおうじゃねえか。」

「いや、だから兄貴、金はあつしが安全なとこに隠したんすよ。」

「たしか、ここで筆筭預金と聞いたが。」

「いや、ここもヤベえかなと思つて女のうちに預かつてもらつてんで。」
 テツの顔が引き曇っている。

「テツよ。てめえ、何か悪い見起こしちやいねえだろうな。」

加羽沢の目がすつと据わった。

「兄貴、よして下さいよ。あつしが何したつていうんですかい。」

テツを壁際までじりじりと追いつめると、平手で横つ面を張った。

「いてえ、いてえよ兄貴。これは何かのまちがいつすよ。」

今度は襟首をつかまえて、拳骨で顔の真ん中を殴ると、テツは、尻餅をついた。両方の鼻の穴から、鼻血がつうと流れた。

次は蹴飛ばそうとした所で、ヤスが間に割つて入ってきた。目から涙をこぼしながら、震えている。何か抱えている物を加羽沢に押し付けようとした。キティちゃんの描いてある赤いリュックサックだった。

「あつ、バカヤロ、それはだめだつていつといたろ。」

テツが横から手を出そうとするのをはね飛ばし、加羽沢はリュックの中身を手早く調べた。一万円札の束が十個以上入っていた。

「何だこの金は。」

「だから、売り上げつすよ。」

テツがふて腐れている。

「いやに中身が多いじゃねえか。」

「だから、他ん所の売り上げもちつとばかり混じっているんすよ。」

「お前がいつてえどんな商売をあずかつたつていうんだ。」

「だからあ……。」

「いえねえんだつたら、これは俺がもらつておく。」

「兄貴、勘弁してください。それじゃあつしは殺されちまうつすよ。」
 テツの態度が急に神妙になった。

「じゃあ、いつてみな。」

「だから、……シャブつすよ。ちつとばかり同じ方法で流してみたんで。」
 「シヨンベンに混ぜてか。」

「いや、送り先を例のEメールでもらって、送り方と回収をおんなじ方法で、混ぜてやっただけっすよ。この通販のルートを使えば足がつかねえって。」

「お前の知恵じゃねえな。」

「だから、頼まれて。」

加羽沢には、ピンと来るものがあつた。

「光子か。」

「…。」

テツは横を向いてシカトーいる。

「シヤブは、親分のところから御法度だったはずだ。」

「だから頼まれたんすよ。」

今度こそ腹に蹴りが入つた。テツがうつ伏せに倒れたので、頭を踏みつけてやつた。

「兄貴、勘弁してくれ。親分もいつてたっしよ。光子とならば立つんだって。あの女、やるとほんとにいいんすよ。だから一度だけ金田に会つてやつて、あいつのいう通りにしたんすよ。そんだけっすよ。」

「情けねえ…。これで顔でも洗つて出直しな。」

加羽沢は、ペットボトルの残りをテツの頭の上に注いだ。

「あつしも運が悪いつすよ。今日がその集金日だったんで。だから、兄貴、せめて半分でも払わねえとほんとにみんなヤベえことになるっすよ。」

起き上がりながら、テツがそうわめいていた。小便と涙と鼻血で顔がまだらになっている。

「テツよ、お前は自分のしでかした事をその半分もわかっちゃいねえ。お前は、この商売に手を染めた時から、四六時中監視されているだろうし、今日の宮地の一件だって気づかれている。金払って半端な言い訳したって、もう間に合わねえんだ。危なくなった橋は、どっちに転んだ所で、トカゲのシツポ切りだ。もう、お前はやつらの仲間にもなれねえ。」

いつの間にか外はとつぷりと日が暮れていた。案の定、窓から見ると、駐車禁止地区にもかかわらず、車が2台止まっている。中までは暗く見えませんが、人のいる気配がしている。

「兄貴、どうしたらいいんで。」

「テツとヤス。お前ら、かわいそうだが、今日は警察の厄介になりな。あそこならばらくは安全だろう。シヤブがらみだ。朝鮮人のバックには、きつと、どえれえ組織がついている。やつらが押し込んでくる前に早くやつちまおう。」

「どうやって。」

「それは、これから俺が仕組む。俺はなんとかこの場を抜け出して吉田の所に行く。あいつも下手すると巻き込まれちまうからな。」

金は、俺がしばらく預かるが、これが片付いたら、分け前は必ず渡す。いいな。」

加羽沢は、上着を脱ぐと腹巻きの間に札束を積めた。テツからレインコート借りてその上に着込む。サイズが違う上に、ただでさえつき出した腹に札束の厚みが増え、前のボタンがとめられない。しかし、この際、贅沢もいつていられない。

それが済むと、警察に電話した。

「もしもし、今、銃声みたいな音を聞いたんですが。こちらですか、こちらは本郷……」

数分後、早くも遠くにサイレンの音が聞こえてきた。

「いいか。パトカーが来たから、家を飛び出して走れ。たぶん捕まるだろうが、そんな時は、おとなしくしよつ引かれて、ある事無い事話しちまいな。それで一日二日は厄介になれるだろう。そこから先は、自分で考えな。」

パトカーが三台来た。テツとヤスは、パトカーが止まるや否や、アパートを飛び出し、道に向かって駆け出した。ばらばらと人が追いかける足音がした。

「すみません。どなたか目撃者の方はいませんか。目撃者の方は。」

加羽沢は、外に出ると、黒い手帳を頭の上にかざしながら、近所に向かって怒鳴った。止まっている例の車の窓をノックする。ウインドガラスが下りて、中の人間が戸惑ったように首を横に振った。

「おーい、誰かこちらの人から話しを聞いて。」

パトカーの方に呼びかけると、制服の警官が駆け寄ってきた。

「他に目撃者の方はいませんか。」

加羽沢は、そう叫び続けながら人込みを抜けると、街灯の暗い方に向かって歩いていった。

角を曲がり、安心して走り出そうとした瞬間、暗がりから人が飛び出して来た。

「しまった。もう一人いたか。」

次の街灯の明りに目を奪われていたために反応が遅れた。

男は、抱きつくように体当たりしてきた。わき腹の辺りを強く押された感じがした。キラリと光った物があり、腹巻きが裂けて、中から札束がばさばさとこぼれた。

お陰で、今度は男に一瞬のスキができた。

男の顔を両手で捕まえると、眉間に向かって思い切り頭突きを食らわせた。ゴツンと鈍い音がした。男が後ろに下がって逃げようとする所を左手でたぐり寄せ、男の喉仏の下を例の手帳で水平に突いた。つぶれた悲鳴が聞こえた。さらに下顎のあたりを押さえ、思い切った向こうに突き放すと、男は仰向けに倒れて地面に頭を打った。上から踵でみぞおちの辺りを蹴る。

この時になって初めて加羽沢は、相手が痩せた若い男である事がわかった。持っていたのはバタフライナイフ。プロでなかったことを神様に感謝

したい気持ちだった。

あらためて腹巻きとコートの前を搔きあわせると、次の曲がり角へと急いだ。札束が切っ先をそらせたらしく、腹巻きの上半分が切れて、その辺りにあった束がいくつか抜け落ちていた。

何かの拍子に右の膝をひねったらしく、痛みがだんだんひどくなってきた。加羽沢は走るのをあきらめて、足を引き摺るのが目立たないように早足で歩いた。

店に着いた時は、時計が十時を回っていた。幸いにも、店には客が一人しかいなかった。

「すみません、社長。明日棚卸しなんで、今日はこれで閉めさせていただきますやす。」

加羽沢は入り口から入るなり客に向かってそう叫んだ。

「ずいぶんとおかしな日に棚卸しするね。」

「いや、ここんとこ税務署に目つけられちまって、こないだのやり直しなんです。」

「そうかい、じゃ、よかったら、今度うちの先生紹介するよ。いつでもいってくんない。」

「そんな時は、お願えしやす。」

客を追い出すと、ホステスを帰し、内側から鍵を閉めた。やつらがここに来るまでには、もうしばらく時間がかかるだろうと踏んだ。

「テツがドジ踏んだんで、他の組のもんから追われる事になった。お前の話しも伝わっているかもしれないねえ。悪いが当分田舎にでも引っ込んでくれ。身の回りに気を付けてな。」

「何が起きたんですか。」

「詳しくは知らねえ方がいい。」

「加羽沢さん、水くさいじゃないですか。僕だって薄々はわかりますよ。最近のの売り上げ、どう見ても異常です。この黄金液の商売が何かに絡んでるんでしょう。」

「そういうことだ。」

「となると、顧客名簿や出荷関係の伝票を持っているのは、僕ですから、僕も危ないってことじゃないですか。他の組だろうが警察だろうが、このままではみんな僕の所に来ますよ。」

「消しちまう訳にいかねえか。」

「そりやできますけど、こつちにとつては、これが唯一、最後の切り札でしょう。逆に武器に利用できませんか。今消したら、あっちもきつと証拠が無くなって大喜びでしょう。」

「ちげえねえ。」

「でも、たぶんあっちにもパソコンのプロはいると思うんです。何とかしてこのデータベースをつぶそうとするでしょうね。」

吉田は、ノート型のパソコンを持ってきた。

「家でも仕事しようと思つて、これまでの注文を僕のパソコンに入れておきました。どう使うかはわかりませんが。加羽沢さんは、これを持って逃げて下さい。どこかにつなげば、メールも受けられます。パスワードは、『トモチャン』です。」

「そんなこといったつて、使い方はどうするんだ。」

「わからなかったら、僕の携帯に電話下さい。」

裏口のドアがガチャガチャと音を立てた。

「もう来やがったか。」

「どうします。」

「こういうことで困った時や、お巡りさんをお願いするのが一番だ。」

加羽沢は、百十番に電話した。

「もしもし、今、店を閉めたら、店に押し込もうとするやつがいるんですよ。ここですか。キャバレーなんですけど。売り上げねらっているのかも…。相手は集団です。」

この夜の警察は大忙しだった。

「悪いが、あとは頼んだ。それから、これは路銀だが、同じ所に二晩続けて泊まるんじゃないぞ。どうしようもなくなったら、また警察に駆け込め。」

加羽沢は札束を一つ吉田に放り投げた。

パトカーのサイレンが近くに聞こえるようになると、加羽沢は裏口を開けた。外には男が二人立っていた。パトカーの音に浮き足立っているようだった。

「お巡りさん、こつちです。」

加羽沢が叫ぶと、男達はぎよつとしてこちらを見たが、すぐに踵を返して逃げ出した。裏口は袋小路になっていたため、表通りに向かわざるを得ない。

「待てーっ。」

加羽沢が大声を上げて追いかける。しかし、膝が痛くて走れないので、声と上半身だけで走る格好をする。マイケル・ジャクソンのムーンウォークのようだ。

「あいつらです。」

到着した警官がつかれて先に走る二人を追いかけた。

あつという間に警官に追い抜かれたので、加羽沢は、そのまま横断歩道を渡ると、春日道りの反対側を御徒町方向に逃げた。

真夜中が近くなっているので、酔客の数もまばらになっていた。いくつ卡路地を回って付いてくる者がいない事を確かめると、あえて反対方向のタクシーを捕まえ、吉原に向かった。

政子の事が気になった。

吉原は、江戸の頃から伝統で、治安が半ば裏の世界で仕切られてい

る。金田のような外人系の組織が容易に手を出せる所ではない。

ただし、警察の手を借りない自浄力は、他の犯罪者の侵入をも拒む。加羽沢とて吉原でのゴタゴタは許されない。

タクシーを玄関前まで付けさせると、加羽沢は政子の店に飛び込んだ。

「政子はいるか。」

「政子さんは、あいにくと今日はラストまで予約がいっぱいなんです。他の娘でよろしければお世話しますが。」

「待たしてもらおう。話しがしてえだけだ。手が空いた時に呼んでくれ。」

加羽沢は待合室のソファアに座ると、パソコンを取り出した。何もわからないがとりあえずスイッチを入れてみると、画面が動き出し、パスワードを要求してきた。舌打ちしながら、吉田の携帯に電話をかけたが、何度やってもつながらなかった。

人の声があったので、フロントの方を見ると、客が一人、ボーイに送られて帰る所だった。前髪の長い若い男で、出しなに加羽沢を認めると、ニヤリと笑った。細い目の中がきらりと光って、ドアが閉まった。

「政子はどうした。」

フロントのボーイにいう。

「今、お客様がお帰りになりましたので、呼んでまいります。ただ、この後他に、もう一件、予約がございますので……。」

ボーイが奥に引っ込んだ。加羽沢は一瞬迷ったが、すぐにその後を追った。政子の部屋の前まで来ると、ドアが開いていた。中でボーイが呆然と立ち尽くしている。政子は裸のままベッドに倒れていた。

「バカヤロウ。救急車だ。救急車だ。」

ボーイが我に返って飛び出していった。

手足に痙攣がきている。

「政子、政子。」

加羽沢が頬をはたきながら呼びかけると、政子はうつすらと目を開いた。

「政子、俺がわかるか。」

「ああ、征さん。」

口を開けると顎が震える。

「政子、お前、自分がどうなっちゃったか分かるか。」

「……お客さんが、……私のあそこに、薬を入れたらしいの。」

「わかった。かわいそうなことしちゃったな。もういいから黙ってる。」

「征さん……また、一回……貸しね。」

政子の唇だけが笑った。そこにボーイが帰ってきた。

「救急車、今、来ます。」

「お前は、その前にシートでもかけてやれ。それから、手があいているや

つがいたら、政子の手足をさすってやってくれ。消防の人が来たらあそこにヤクを入れられたっていうんだぞ。いいな。」

さらに政子がトラブルに巻き込まれるのを恐れて、加羽沢は店を離れる事にした。パソコンをかかえ、玄関を飛び出した所で、ちょうど救急車が止まった。

「上のカウンターの奥です。店の娘が倒れちゃったんで。」

救急隊員が上がっていくと、加羽沢は店の前の路地を三ノ輪の方に行こうとした。ソープの帰り客か、野次馬が何人か集まろうとしている。

しかし、加羽沢は、その先の曲がり角に、男が一人ぼんやりと立っているのを見つけた。どことなく辺りの雰囲気から浮いている気になる。十中八、九例の連中の仲間だろう。しかし、まさかここで手出しはできないだろうと、一度は男の前をすり抜ける事を考えたが、早く走れないの思い出して引き返した。そこで反対方向を見ると、予想通り電信柱の陰に、似たような男がもう一人張っている。とっさに救急車で脱出することを思いついて店の方に振り返ると、サイレンが鳴り出して、政子に乗せた救急車がたった今走り出した。

加羽沢は仕方なくできるだけ救急車を死角にして隠れるように壁際を通り、斜向いの店に飛び込んだ。

「いらっしやいませ。」

土蔵のようなあしらいの建物の玄関に入ると、眼鏡をかけたボーイが出て来た。

「フリだが、かまわねえか。」

息が乱れているのを押さえ、加羽沢は極力普通の客を装おうとしながらいった。

「けっこうでございます。」

「ダブルでいいか。」

「今からダブルとなると、ちよつとどうでしょうか。お待ち下さい。」
ボーイが奥に入っていった。

「けっこうでございます。夏目さんがお相手致します。」

部屋は和室のようにあしらってあった。加羽沢はソファアに腰掛けると、頭の中をまとめようとした。長い一日がグルグルと回転する。緊張の束が何本か切れ、急に疲れが襲いかかってきた。これからどうしようかと考えた所で、外から声がかかり、和服を着た女が襖を開けた。

女は、戸口の前に正座したまま、丁寧なお辞儀をした。

「いらっしやいませ。夏目でございます。」

小さな声だった。顔を上げると、加羽沢の方をちらりと見て微笑んだが、すぐに視線を下に落とした。うつむきかげんのまま、風呂場に降りて、湯加減をたしかめると、浴槽に湯を張り始めた。風呂場の準備ができたらしく、座敷に戻ると、乱れ籠を置いて帯を解いた。さすがに加羽沢も、考えをまとめる事などできなくなった。最後に肩からはらりと着

物が落ちて、白い背中と赤い腰巻きが現われた。

「どうぞこちらへ。」

女が呼んだ。小ぶりの乳房と盲腸の傷痕が見えた。首から肩の線で、三十も半ばを超えていると加羽沢は思った。

「わかった。だが、もうちつとゆっくりやってくれ。」

加羽沢がそういつて動かずにいると、女は少し困ったような顔をしたが、近づいて来ると、加羽沢の両手をとって誘った。加羽沢は、あわてて立ち上がって背中を向けると、腹巻きから札束を取り出し、上着とズボンのポケットに詰め込んだ。手伝おうとする女をとめて、急いで服を脱ぎ、裸になると、加羽沢は自分一人で風呂場に向かった。

少し遅れて、女もするりと湯船に入ってきた。面と向かうと、女は微笑んで、すぐに視線を落とした。

「時間はある。焦るこたあねえ。」

女は、「はい」と返事をしながら、両手を延ばすと加羽沢の胸に触れた。そのまま体を預けて重なると、首の周りに腕を回した。胸に乳房が押し付けられて、女の唇が、加羽沢の唇を捕らえた。唇に力が加わり、舌が入ってくる。唇が唇の上を這い、女の口から声が漏れた。手のひらが、胸から脇腹を伝い、加羽沢の股間を柔らかく包んで動いた。

女の目が開いて、加羽沢の目の中を覗き込んだ。

「悪いがちつとばかし、先に考えなくちゃならねえ事があるんだ。」

女は指先で加羽沢の唇をぬぐうと、静かに体を離れた。

「おにいさん、ヤクザかい。」

「…いや。」

「じゃ、悪いことしてるかい。」

「…いや。」

「それじゃ、追われている。」

加羽沢が返事に窮すると、女は初めて視線を合わせた。

「そうなんだね。」

「そんな、大したことじゃねえ。」

「…めんどろはいやだよ。」

「どうしてそう思うんだ。」

「だって、あの持ち物は、尋常じゃないよ。」

「…。」

「だけど、にいさんは、もうあたしを四時間も買っちゃまったんだよ。めんどろがないんだったら、その間はあたしに仕事をさせておくれよ。ここであたしといる間は安全だよ。」

女は加羽沢の瞳を見つめながら、ゆっくりといった。

「…ちげえねえ。…お前さんのいう通りだ。」

「こんなんでなけりゃ、もっといい思いをさしてあげるんだけどさ。」
女の声がまたかすれて小さくなった。濡れた手が頬に触れ、顔を上げ

ると加羽沢の目の前には、女の乳房があった。

夢の中で眠ってしまった事に気づき、慌てて目を覚ました。枕元に襦袢を羽織った女が座っていた。

「どんくらい眠っていた。」

「一時間くらい。でもまだ時間はあるよ。」

「次の事を考えなきゃいけない。」

「にいさんが寝てる間に、店の脇にいた連中を追っ払っておいたよ。あとは、店の車を出すから、好きな所にいきゃいいさ。」

「すまねえ。だが、どうして俺をそう信用するんだい。」

「にいさんは、ほんとに悪いやつじゃないよ。こういう商売しているとわかるのさ。だけど、こんな時に二回もできるつてのは、どっか鈍いか、よほど人を信じやすいかのどっちかだろうね。」

「ちげえねえ。：お前さんには何か礼がしてえんだが。」

「いいさ。ただ、ちゃんと裏を返しに来ておくれ。それがここのけじめつてもんさ。」

加羽沢を乗せた車は、三十分もかけて尾行が付いていない事を確かめた。加羽沢が政子の店を告げると、運転手は怪訝な顔をしたが、何も言わず吉原に戻り加羽沢を降ろした。朝まだ早いので、界限には人影が見えなかった。

面が割れていない事を願いながら、政子の店に入った。昨晚とは違う若いボーイが出て来た。

「すいませんが、貞子の事で来たんですが。」

加羽沢は、政子の本名を知らなかった。

「はあ。」

「いえ、姪っ子が貞子っていうんですがね。」

「申し訳ありませんが、貞子という者は、こちらには、おりませんが。」

「いや、夕べ、消防署から電話があつて、貞子が入院したっていうんで、今朝一番で田舎から出て来たんですが、この辺のことがよくわからなくて。とりあえず、勤め先のホテルがここと聞いてましたんで、来てみたんですが。」

「少々お待ちを。」

ボーイは何か察した様子で、奥に引っ込んでいった。どこかにモニターがあるはずなので、加羽沢は下を向いて顔を隠していた。

「お待たせしました。姪御さんは、こちらの病院にいるそうです。」

ボーイは地図を取り出して、近くの病院までの道順を説明してくれた。どうやら親戚という嘘が通つたらしい。加羽沢が丁寧に礼を述べていると、フロントの電話が鳴った。ボーイが受話器を取ったので、頭を下

げて店を出ようとすると、ボーイに呼び止められた。

「加羽沢様ですか。外線からお電話なんですが。」

差し出された受話器を加羽沢は反射的に受け取ってしまった。

「…もしもし。」

「…。」

電話は無言のまま切れた。やつらにまた見つかった事がわかった。

店を出ると日本堤の交番がある方向に急いだ。まだその道筋には、それらしき人影は見当たらなかった。膝が痛んだが、気にしてはいられない。交番の前でさりげなく呼吸を整えると、加羽沢はまた歩き出した。政子のいる病院は、そこからすぐの所にあった。

外来の待合室に入ると、ソファアームに座り、周りの人間を調べた。順番を待つ患者達の大半は老人で、特に怪しい影はなかった。加羽沢はそのまま患者の振りをして、三十分ばかり待った。やつらがここを嗅ぎ付ける事は十分に予想できた。

加羽沢は売店を見つけると、新聞、週刊誌、菓子などを買い込み、手提げ袋に詰めてもらった。それを持って入院棟の方へ進むと、受付を無視して、通り掛かりの看護婦に声をかけた。

「すいませんが、姪っ子が急に倒れちまって、夕べこの病院に担ぎ込まれたっていうんだが。」

「ああ、あの救急の患者さんですね。でも、面会は午後からになりますよ。」

「それが訳ありで。何しろ、店で倒れちまったもんで着替え一つ持ってねえんで。これだけでも渡してやりてえんだが。」

加羽沢は紙袋を見せた。看護婦は何かと察して飲み込んでくれたらしく、加羽沢に着いて来るようにいった。加羽沢の良心がほんの少し痛んだ。政子は救急処理室と書かれた所から少し入った個室にいた。

「じゃ、荷物渡したら、直ぐ帰りますんで。」

中に入ると、政子は目覚めていた。腕に点滴がつながっている。

「征さん。」

「どおでえ。」

「もう大丈夫よ。薬物性ショックだって。お化粧していないからひどい顔してるでしょう。」

「ほんとに、よくなったのか。」

「体からはもう薬はぬけたみたい。でも、病院は私の事をジャンキーだと疑っているわ。だから私もすぐここを出る。」

「それが、ちつとばかしややこしい事になっちまった。できたら、店は、しばらく休みな。」

「わかってるわ。今朝、目が覚めた時、征さんが飛び込んで来てくれた事を思い出して、ずっと考えてたの。あの客、急に向こうから指名し

てきて、私の所に先週から五回も通ってたのよ。ただ、征さんの事が絡んでいたとは知らなかった。」

「冗談じゃねえ。俺達はただ、利用されたただけだ。お前の分の仇もきつと取る。せつかく始めた商売をつぶされた落とし前もつける。」

「征さんは、大丈夫なの。」

「俺の事なら自分で何とかする。」

「吉田くんからは、メールで連絡が入っていたんだけど、テツさんが急に例の物を取りに来なくなったのよ。」

「その辺の調べはもうついている。」

「吉田君は大丈夫。」

「連絡がとれねえ。パソコンに連絡が入っているかもしれないねえんだが。」加羽沢は吉田のパソコンを見せた。

「私のハンドバックに携帯がはいっているわ。それも持ってきて。」

加羽沢がケースからパソコンを取り出すと、政子が携帯をケーブルでつなげた。スイッチを入れ、パソコンを立ち上げると、画面が表われた。

「私の携帯ならつながると思うの。パスワードは何。」

「トンチャン。いやトモチャンだった。」

政子はいとも簡単にEメールを呼び出した。

「やっぱり吉田君からメールが来ているわ。この番号に電話して欲しいそうよ。」

さつそく電話すると、呼び出し音が二回鳴らないうちに、吉田が出た。

「加羽沢さん、連絡取りたかったんですよ。夕べは、僕まで警察に連れて行かれて、携帯取り上げられたもんだから、連絡つけられなかったんです。」

「今はどこにいる。」

「友達の宿に転がり込んでいます。で、テツさんは、覚醒剤所持の容疑で逮捕されたみたいです。ヤスさんは行方不明です。加羽沢さんの声が警察の電話の録音に残っていたんで、宮地刑事も加羽沢さんを探しています。」

「テツはそこまでドジだったってことか。マエがあるから執行猶予はつかねえぞ。宮地もションベン飲まされたんで、相当頭に来てるな。」

「これからどうします。」

「とりあえず俺はあまり長居が出来ねえ所にいる。ここを何とかしなくちやなんねえんで、悪いが力貸してくれるか。」

「どうすればいいんですか。」

「まず、車だ。レンタカーでもなんでもいい。金はあるだろう。それから、ヤスの白衣はまだどこかにあるか。」

「探せば店のどこかに残っていたと思いますよ。」

「もし見つからなければ新しいの買っちゃいな。あと、すき焼き用の牛

肉がいる。」

「何すんですか。」

「今晚のおかずよ。俺はこの病院の泌尿器科にいる。」

病室の外に人の気配がしたので、加羽沢は携帯を切った。

「すまねえが、ここを出て行く。いくらやつらでも吉原の首領と事をかまえるはずはねえだろう。ただ、看護婦以外の人間が来たら、すぐに非常ボタンを押しな。」

「もう油断しないから大丈夫よ。次はちゃんとお店に来てね。」

「おう。たしか、一回借りがある。」

政子は、いつもの笑顔を見せたが、病院の白いシーツの上では、妙に青白く見えた。加羽沢はまたもうひとつ借金が増えたような気がした。

おそらく出口には、見張りが付いている。そう思っていると、目立たないがそれらしき人間が、待合室の患者に混じっている。一人は、ソファの端に座って新聞を読んでいるが、どことなく態度に落ち着きがない。もう一人は、さらに出口の近くにぼんやりと立っている。確証はないが、老人達に混じっている若い男をまずマークしていった。その他にも、どこかに潜んでいる気がして、加羽沢は注意を引かないように、診察室の方へと移動した。

予想通り泌尿器科の近辺にはそれほど人がいなかった。髪をアップにして赤いチャイナドレスを着た女が一人、女性週刊誌を読んでいる。加羽沢はそのとなりに座って順番を待つふりをした。反対側の眼科には何人か婆さんと子供が並んでいるだけで、特に怪しい人間は見えなかった。やがて、隣の女が診察室に消えたので、加羽沢は一人になってしまった。吉田は、まだやって来なかった。

その時、出入り口とは反対の方向から、白衣を着た若い男が空の車椅子を押しながら現われた。加羽沢は下を向いてやり過ぎしたが、男の投げた視線が妙に気になった。どこかしら違和感がある。男の履いている真新しいナイキのトレーニングシューズが、どうしても頭に引っかかった。加羽沢は席を立つと、気づかれぬよう柱の陰に隠れて後を付けた。待合室で、男は、新聞を広げた男にさりげなくうなずいた。新聞の男が立ちあがる。加羽沢はあわてて奥へと引き返した。

泌尿器科まで来ると、中年の看護婦が入り口で待っていた。

「お次の方どうぞ。」

「え、あっ、いや。」

加羽沢は、後ろ振り返りながら、仕方なく診察室に入った。

「はい、こちらでお待ち下さい。」

診察用の椅子に座らされると、年取った医者が手を拭きながら出て来た。禿げた頭の横に癩癩じわがあり、いかにも頑固そうな先生だった。

「どうしました。」

「あ、いや、あの、その。」

「あんた、いい年して恥ずかしがつていないで、ちゃんといったらどうな
んですか。」

医者がキツとなって大きな声でいう。

「いや、そういう訳じゃねえんですけど。」

「こっちは医者なんだから、遊んだのなら遊んだとはつきりいう。」

「そう、決めてかかられても…。」

「なんかいったか。」

「いや、ほんとに、そういうんじゃないやねえんで。でもまあ、…ちつとばかし、
あそこが痒いような気がしたかなあと…。」

「じゃ、便所に行って、これにオシッコ採って来る。」

紙コップを渡されると、看護婦がドアを開けて、トイレの方向を示し
た。加羽沢はつられてトイレに向かった。途中で振り替えると看護婦は、
診察室の戸口に立って加羽沢を待っていてくれるようだった。幸いな事
に、追手は、別な場所に行ったようで、近くには見えなかった。

加羽沢が、トイレで紙コップに小便を取っていると、奥の方から、水が
流れる音がして、ドアが開くと、吉田が出て来た。

「あれっ、加羽沢さん、なんでこんな所で検尿してるんですか。」

「うーん、これにや訳が…。いや、あとでまとめて説明する。それより、
待っていたんだ。すぐに白衣着て車の付いた寝台を持ってきな。外科の
方の廊下に行けばあるだろう。」

トイレの外に出ると、看護婦がやさしく微笑みながらこちらを見て
いた。逃げる訳にもいかないので、加羽沢はこぼさないように歩きなが
ら診察室に戻った。

「はい、こちらでお預かりしますよ。あら、まあ、こんなにたくさん。今
度からは少しでいいですよ。」

そこに医者が戻ってきた。

「じゃあ、奥に行つて、ズボンを降ろして待つ。」

医者が、ゴムの手袋をはめながらいう。加羽沢は気おされて、急いでズ
ボンを脱いで待った。

「違う。ズボンを降ろせといったんだ。脱いでどうするんだ。あんたの
ケツ見たつてしようがないだろう。もういいから次はここに立つて。」

医者は、前に回ると、加羽沢のモノを指で一回ぐつとしごき、「フン」と
いつて戻っていった。カルテを書き込みながら、顕微鏡を覗くと更にまた
何かを書いた。

「陰性だ。いつまでもケツ出していないで早くしまいなさい。タムシの方
は薬出しておくから、無くなったらまた来なさい。」

声の調子が急に優しくなったが、性病でなくて、なんとなく残念そう
な様子に思えた。

「先生口は悪いですけど、本当はやさしいんですよ。」

と、看護婦がフオローするところを、加羽沢は「お世話になりやした。」と外に出た。当分小便とは縁が切れないらしい。

廊下では、吉田がストレッチャーを前にして立っていた。

「とんだ事で、手間がかかっちゃった。」

加羽沢は、廊下の先を人の目につかない所まで行くと、ストレッチャーの上に乗った。

「牛肉はどうした。」

「これです。」

吉田が紙包みを出した。

「浅草の今半で買ってきました。あと、ねぎと白滝と焼き豆腐も入っています。」

「いったいどうするつもりだ。」

「だから、すき焼きするんでしょう。気を利かしたつもりですが。」

「洒落のわからねえやつだ。」

加羽沢は、牛肉を取り出すと、顔の上ののせた。顔が肉と油と血でぐちゃぐちゃになった。ストレッチャーの上に寝ると腹の上に荷物を乗せシートをかけた。

「いいか、今から何があっても、車の所まで止まるなよ。」

加羽沢は、両手で顔を覆うと「ぐえー」という悲鳴を上げた。指の間から、赤い牛肉がはみ出して見える。

「すみません。前を開けて下さい。」

吉田が勢いよくストレッチャーを押していく。廊下を歩く人は、加羽沢の顔を見るといつせいに目をそむけた。待合室の人込みを掻き分け、いよいよ出口にさしかかると、例の三人が行く手を塞いでいた。

「すみません。道を開けて下さい。」

加羽沢は、「ぐわあ」ともう一声叫ぶと、牛肉を一枚顔から引き剥がし、目の前で振って見せた。三人は、「うっ」といって後ろに下がり、道が開いた。

ストレッチャーはすつ飛ぶように病院の建物の外に出た。しかし、吉田が調子に乗ってまっすぐ進んだため、階段を三段ばかり飛び降りるはめになった。買物袋が飛び出して、すき焼きの材料が地面に散乱した。落ちた長ねぎを見て、三人もさすがにおかしいと気づいたらしく、すぐに後を追いかけてきた。さらに別の場所を張っていた仲間も加わった。ストレッチャーは勢いに乗って車道に飛び出し、車が急ブレーキをかけて止まるのもかまわずそのまま走り抜けた。加羽沢が仰向けにずり落ちそうになるのを、吉田がズボンを引っ張って押さえている。しかし、さすがにストレッチャーが歩道と車道の段差にぶつかって止まると、加羽沢は勢い余って放り出され、地面に背中から落ちた。「ぐう」という声が出たが、腹の上のパソコンは無事だったようだ。

「車はどこだ。」
「あっちです。」

吉田の指差す方を見ると、白いカラーが止まっていた。ちようど前方からミニパトが来たので、二人はその脇を走り抜け、間一髪の所で車に飛び込むと、走り出した。

「やっぱし映画のようにはうまくいかねえもんだ。」
「でも、加羽沢さんは、もう十分に人を食っているから。」
ミラーにはしっかりと駐車違反のオレンジ色の手錠がはまっていた。

車は、言問橋を渡ると墨田区に入り、路地を曲がっては尾行が付いていない事を確かめた。さらに、隅田川の堤防で車を止めて、高い所から眺めてみたが追手はいないようである。

「どうしますか。」
「気になることがある。店に帰ろう。」
「あそこも危ないんじゃないですか。」

「ああ、だが、行かねえともつとヤベえことになりそうだ。」
二人は、両国から神田を回り、大きく迂回しながら湯島に着いた。車を乗り捨て、しばらく店の周りを見張っていたが、特に怪しい様子はないかった。

店は、しばらく開けていなかったせいで埃が積もり、さらにすすんで見えた。加羽沢は慎重に、入り口から中を見渡した。

「お前が、素人だったら、どこにブツを隠すと思う？」
「ブツというと。」

「シャブよ。テツの所で見つかったとすると、ここもいつガサ入れにあっただっておかしくねえ。」

「なんでここにそんな物があるんですか。」
「決まってるじゃねえか。やつらが仕組んだのよ。でなけりゃ、テツがいくらバカだって挙げられたりはしねえ。」

「ならば、テレビでよくあるのは、トイレの水洗のタンクの中でしょう。あと、ソファアのマットレスの中とか、パソコンの中とかも怪しいですね。」

本当に、水洗のタンクの中から、ビニール袋に入った透明な結晶が出て来た。パソコンの中からは、カプセルと錠剤が出て来た。

「いかにも見つけて下さいだ。たぶんもっと見つけにくい所に、もう一つ二つ隠してあるんだろう。」

「早く探さないと。」
「いや、もうそんな時間はねえ。」

店の電話が急に鳴り出した。加羽沢と吉田は顔を見合わせたが、加羽沢が受話器に手を伸ばした。

「征さん、あたし、光子。」

「…。」

加羽沢は、手で吉田に外を見張るように合図した。

「征さん、お願いよ、助けて。」

「どうして俺とわかった。」

「そんな事、どうだつていいじゃない。この連中、スパイごっこしたらプロよ。それより、ほんとに助けてよ。あたしも利用されてたの。このままだと殺されるわ。」

「冗談いっちゃいけねえ。」

「ほんとよ。今度こそ、ほんとうなんだから。親分だつて、いってたわ。困ったら征を頼れつて。」

「…。」

吉田が戻ってきて、外を指差しながら何か叫んでいる。

「わかった。今日の五時に一人で浅草の観音様まで来い。」

加羽沢はそういつて電話を切ると、店の台所に飛び込んだ。石油ストーブ用に置いてある灯油缶を取り出し、そこいらにあった干からびた雑巾と使い捨てライターを拾った。

やつらは、店の入り口と裏口の両方から来るだろうと思った。奥の裏口の鍵をはずし、一瞬躊躇したが、台所のガス栓を開けた。ガスが噴き出してくる。すぐに店のフロアに取って返し、ソファーに灯油をぶちまけた。そこに吉田が飛び込んできた。

「加羽沢さん何やってるんですか。やつらが来てますよ。」

「出口に行つてドアの脇で小さくなつてろ。」

雑巾に火を付けようとしたが、なかなか火が点かない。何度もやっていくうちに、灯油の匂いとがガスの匂いが強くなってきた。ようやく灯油をかぶったソファーに火が点いたが、火はたいして大きくならず、店の真ん中でたき火でもしているかのようだった。ビニールのソファーからは、煙ばかり出て、部屋中が真っ白になり始めた。刺激的な煙の臭いにむせ返り、加羽沢もたまらなくなってきた。ようやく炎が絨毯に燃え移って大きくなった所で、店の扉が開いた。馬鹿でかい男が入ってきた。男は、炎と充満する煙に驚いた様子だったが、戸口の脇にしゃがみこんでいる加羽沢と吉田をすぐに見つけ出した。

顔中に傷のある大男だった。体は、半端でなくでかい。まるで、『ハリスの旋風』の番長のようなだ。薄笑いを浮かべ、男はじりじりと近づいてくる。

その時、裏口が開いた。台所に新しい空気が流れ込んだため、充満していたガスが一気に引火した。台所から炎が音を立てて噴き出し、だれかの悲鳴が聞こえた。

加羽沢は、相手がひるんだすきに、缶に残っていた灯油を、男めがけて振りまいた。灯油は、男の顔にかかり、男はうめきながら手で顔を覆った。加羽沢が石油缶で男の脳天をひっぱたくと大きな音がした。

吉田が入り口から飛び出し、加羽沢もその後を追った。

「火事だあー。火事だぞー。」

加羽沢が叫ぶ。店は表と裏から盛大に煙を噴き出していた。

吉田を追いかけて、二人で近所の蕎麦屋に飛び込むと、勝手に中を通つて、非常口から飛び出した。蕎麦を肴に、昼間から一杯やっている粋な爺さんが、何事かという顔をして加羽沢たちを見ていた。

「こないだは警察で、今度は消防署。いいんですかね、本当に。」

「なあに、税金はちゃんと払ってる。ただ、やつらには、もう一つ貸しが増えた。」

浅草寺の境内は広い。普通は、大提灯の雷門から入って仲見世を通り、まっすぐに本堂へとたどり着くが、この他に東の馬道、北の言問通り、西の六区にも抜けられる道がある。すべての出入り口を一度に塞ぐにはかなりの人手が必要となる。また、本堂の入り口は高いので、三方向に視界が開けている。もし光子の後ろに誰かついていれば、必ずわかるはずだった。

車は六区の路地に止めた。手錠が付いているお陰で、かえってどこに止めておいても違和感が無い。まずは、三方向から入ってくる人の流れを調べるために、加羽沢は吉田と五重塔の脇に身を潜めた。ついでに吉田が人形焼を買ってきた。そういえばこの所、ほとんどろくな物を食っていない。独特の香ばしさとほのかな甘さで少し元気にはなったが、かえって空腹がつのった。

「これはやっぱり罠なんじゃないでしょうか。」

「たぶんな。やつらが電話のあとすぐ来た所を見ると、店に盗聴器でも仕掛けてあったんだろう。」

「だったら、どうしてこんな誘いをかけてきたんでしょう。」

「俺達の逃げ足が早いんで作戦を変えたか、もしかすると向こうにも何か焦る理由があるのかもしれないねえ。あと、もう一ついえるのは、お前と俺が合流した事で、やつらは目的が絞りにくくなってきた。」

「やはりパソコンのデータが重要なんでしょうか。」

「そこが俺にやよくわからねえとこだ。一体、あの中には何が入ってるんだ。」

「そのままファイルをコピーしたんで、メールのやりとりと発注先が全部。」

「テツはそいつらに、シャブを送っていたんだな。」

「そうですね。でも、どの客かはわかっていません。」

「俺の感だが、たぶんその中かなり大きなネタが入っている。それが動かなくなったことでやつらも焦っているんだろう。シャブの仲買いをやるやつらは、末端の素人と違う。でんでん虫みてえに臆病だ。物が予定通り届かないとか、返事がこねえとか、何かの異変に気づけばすぐに殻

の中に閉じこもる。そうでなけりや、あんな商売は続けられてねえ。一方で、それを当て込んで仕入れた方は、大量の物を抱えて立ち往生。こいつは気分よくねえだろうな。

ただ、テツが捕まったことで、警察も当然販売ルートを追求するだろう。金田ももうそう長く続けることはできねえ。

それに、俺達も、もういいかげん追いかけてこはごめんだ。」

夕刻が近づいた。浅草寺は年間で日本一の参拝客を集めるといいうが、しだいに人の流れがまばらになってきた。加羽沢は吉田から離れると、本堂の中に紛れ込んだ。中の観音様に思わず手を合わせる。巨大な柱の陰に隠れて山門の方を伺うと、参拝客は、もう外に向かつて流れ出していた。

しばらくすると光子が現われた。雷門の方から歩いてくる。大香炉の前を通りすぎたあたりで、人を探している素振りが見えた。ピンクのひらひらしたコートに、黒い大きな毛玉のボタンが付いている。さらにピンクの円筒形の帽子をかぶり、この上もなく目立っている。

「チッ、なんだい、今度はZ子様かい。」

加羽沢は舌打ちして毒づいた。光子の後についてくる者はいなかった。一通り外を見渡して、気になる陰を探したが見つからなかった。吉田は配置についているようだ。

光子が本堂の中に入ってくると、加羽沢は柱の陰から飛び出して光子の前に立った。何か言いかけるのを手で制して、目の前に紙切れを突きつけた。一人で、花やしきの方に向かうように書いてあった。途中で吉田が拾って違う方向に誘導して、車までたどり着く事になっていた。

加羽沢は、しばらく本堂から遠ざかる光子の後ろ姿を目で追った。光子が視界から外れても、人の動く気配は無かった。本堂を出ると、加羽沢は階段の上で辺りをゆっくりと見回した。どこかでこちらを観察しているとする、これで加羽沢に気が付いたはずだった。加羽沢は、光子とは反対の浅草神社の方に向かった。本堂の裏側でもう一度立ち止まって付いてくる人間を探したが、誰もいなかった。

六区を抜け、国際通りの歩道橋に登って吉田の車を待った。やがて、手錠をはめられたカローラが歩道橋の下を通過した。続く車をしばらく観察したが、車の流れは規則正しく、だれも追ってくる様子は無かった。浅草三丁目の交差点の手前でガードレールを乗り越えようと、加羽沢は止まっていた吉田の車の後部座席に飛び込んだ。

「コートを脱ぎな。それから、ハンドバックもよこしな。」

光子にいうと、光子は、嫌々ながら従った。加羽沢はついでに帽子も剥ぎ取ると、窓を開けて放り出した。

「ちよつと、何するのよ。それ、デオールよ。」

「誰か親切な人がいれば、警察に届けてくれる。発信機がついていりゃ、お前の仲間が拾う。」

「征さん、何疑ってるのよ。あたしはあいつらから逃げてきたのよ。」

「なんで今さらそんな気になったんだ。」

「テツがドジ踏んだから、あたしも巻きぞえになったんでしょ。テツのルートで流すように金田にいったのはあたしよ。そしたら、回収はできなくなるし、顧客名簿は無くなるし。とたんに関係がまずくなつたわ。」

加羽沢はあえて、言問通りを西に向かうように吉田に指示した。車が多いのでそう強引な運転はできない。ヒットエンドランにも向かない。時折、追い越し車線から、左車線に戻り、後ろの車をやり過ぎしてみるが、マークできる車は無かった。

本郷通りにぶつかって、東大をぐるりと回り、春日通りに出たが、尾行の車は見つからなかった。すでに日が暮れて、車の識別が付きにくくなっている。

「おかしいな。やつらがこんなでいいのか。」

「征さん、さっきからいつてるじゃない。あたしは、あいつらに見つからないように逃げてきたのよ。」

「俺と会ったら、どうするつもりだったんだ。」

「征さんなら、いっしょに逃げてくれると思って。」

「それがどんくらい大変な話か、お前の方がよく知っているだろう。」
「知ってるわよ。だから、もう一ヤマ当てられるように準備してきたの。その金さえあればどこにでも逃げられるわ。でも、早く品物の代金を納めないと、地下銀行の口座が閉じてしまうの。そしたら、もうブツが手に入らなくなるわ。だから、征さん、お願いよ。力貸してよ。もうちよつとでここから抜け出せるんだから。」

「やつらを出し抜いて無事で済むと思うか。」

「このヤマはずしたら、向こうだって無傷じゃ済まないわ。そのくらい大きなヤマなのよ。でも、ブツを仕入れるためには、前金があるの。売った方の代金を回収していったん金を払わないと、相手にもブツが納められないの。」

不忍池の周りを一周しても、付けてくる車は見つからなかった。寛永寺の前に車を止めて、しばらく様子を窺っていたが、他に車は通らなかつた。

上野に戻ると、加羽沢は、光子と吉田を連れて、女王様のSMクラブに向かった。

ドアを開けると、女王様が出て来た。皮のレオタードに盛り上がった胸の谷間が眩しい。ティアラを模った髪飾りを付けて、眉毛がシャープに引かれている。奇術士の引田天功のようだ。

「仕事中の所をすまねえ。」

「いいわよ。こっちもこないだは申し訳なかったわ。三人とも中に入っ

て。」
 部屋の壁は黒く塗られ、赤いビロードのカーテンが掛けられていた。天井からは何本も鎖が下がり、中世の拷問道具のようなインテリアが置いてある。

「それで、話しているのは、この娘の事ね。」

女王様は、光子に歩み寄るとにっこり笑った。

「よろしくね。」

「…。」

光子は困惑したような表情を浮かべている。

女王様の手が光子の手首を捕らえた。

「なにをするの。」

光子が思わず振りほどこうとすると、女王様は、そのまま関節をひねった。反動で光子の体ぐるりと半回転する間に、光子の両手には、皮の手錠がはめられていた。

「征さん、なによこれ。」

「ちつとばかり、お前の根性を試す必要があつてな。」

女王様は、光子を壁際まで引つ張って行くと、手錠を鎖で吊るされているフックに掛けた。反対側の鎖を引くと、滑車がガラガラと音を立てて巻き上がっていく。

「な、なにすんのよ。やめてよ。」

女王様は、光子の体が浮きあがる直前で、滑車を止めた。

「征さん、お願い、やめさせて。」

光子の叫びが恐怖に変わった。加羽沢も、吉田も思わずごくりと唾を飲んだ。

「さて、青少年諸君には刺激が強すぎるので、ここからは私一人に任せてね。」

女王様は、にこやかにそういうと光子の方を向いた。

「あたしは男をいじめるのも好きだけど、女をいじめる方がもっと好きさ。この娘のプライドが、はたしてどこまでもつか、さてと、見物だねえ。」

女王様が急に芝居がかって、俄かに女王様になった。声も違えば、顔つきまで変わった。加羽沢と吉田はその迫力に思わず一步ドアの下がつた。

「じゃ、じゃあ、よろしくたのむ。」

加羽沢と吉田は逃げるように部屋の外へと出ていった。

三十分ほど経った。待合室のソファ―に座っていると、女王様が出て来た。

「征さん、ちょっと。」

女王様は、掌の上のティッシュを広げて見せた。

「こんな物が出て来たわ。」

直径一センチくらいの青いプラスチックのボールだった。

「どっから出て来た。」

「聞かない方がいいわよ。きっと。」

加羽沢は床に落とすと、すぐに足で踏みつけた。丸いボールの中身が潰れた。

「僕、それ新聞で読んだ事あります。医療用のカプセルで発信機を仕込むと、たしかファイバースコープの代わりになるやつです。」

「だから、光子は堂々と乗り込んで来たんだな。だが、それだけじゃ、自分が人質になっちまう。なんでそんなに自信があるんだ。あんな演技で、通用すると思ったのか。」

光子は、白いネグリジェのような物を着せられて、十字架に張り付けになっていた。髪の毛が乱れている。

「征さん、お願い、助けて。」

「発信機の事は聞いたろう。」

「あれは、何かのまちがいよ。知らない間に飲まされてたの。」

「お前もいい根性している…。」

光子の目から、涙がこぼれ出した。

「あたしは、強くてやさしい男が好きだったの。だけどもいつも裏切られてばっかし。」

「ご期待に添えなくて残念だ。」

「征さん、あたしのこと、いい気味だと思っているんですよ。」

「いいや。だが、こんな凝ったまねをしなくても、俺の方から金田の所には行くつもりだった。いってえ奴の狙いは何だ。」

「知らないわよ。あたしは、ほんとに逃げて来たんだから。」

「わかった。まったくいい根性だ。それじゃあ、また女王様に可愛がってもらいねえ。」

加羽沢が部屋から出ていこうとすると、光子が呼び止めた。

「征さん、あたしをネタに交渉するつもりなんでしょうけど、カードがまだ一枚足りないわよ。」

「…。」

「智子さんの事は、どうするのかしら。」

加羽沢の娘の名前だった。

「お前、どうしてそれを。」

「智子さん、お店にEメールを出しているでしょう。こないだ、お店のパソコンの中身を調べたら、キャバレーのホームページがまだ残ってたわ。征さん宛てにメールが一件あって、その後、吉田君が返事出してるわ。メールアドレスさえわかれば、あとをたぐり寄せるのは簡単よ。」

「そうか、…だからトモチャンか。」

乱れた髪の毛の奥で、光子の目がキラリと光り、唇に残酷な薄笑いが浮かんだ。

部屋を出ると女王様と吉田が待っていた。

「これからどうするの。」

「俺は、ちつとばかし気になる所がある。そこに行く。」

「じゃあ、あの娘はウチで使っているラブホテルにでも放り込んでおくよ。ちゃんと道具使って逃げられないようにするさ。」

「ついでに吉田もたのむ。パソコンも持っていつてくれ。」

「じゃ、加羽沢さん、データをハードディスクからコピーしておきましたので、このフロッピーを持っていて下さい。」

「そんな物、俺が持ってもどうしようもねえ。」

「そう思っつて、友達の連絡先も入れておきました。僕のパソコンの師匠ですから、助けてくれるはずです。」

「そんなら、ここであずかってもらいねえ。何もなけりや必ずここに戻つてくる。」

ここから先の行動は、完全に読まれていたと思った。多少じたばたしてみたところで、やつらの手から逃げ切れない。それが十分にわかった。しかも、やつらは加羽沢の知らない間に、着実に外堀を埋めていた。

案の定、女王様の店を出ても、監視の気配は無い。携帯で娘の家を呼び出してみたが、誰も出てくる様子は無かった。しかし、行かない訳にいかない。

右膝の痛みがぶり返していた。加羽沢は春日通りまで出てタクシーを拾おうと考えた。すでに真夜中を過ぎていたので、人影もまばらだった。春日通りにさしかかる所で、後ろの方からガヤガヤという人の声が出てきた。振り返ってみると、そろいの白の半被を着た爺さんの集団だった。三社祭の打ち合わせで寄り合いでもあったのだろう。十人くらいの爺さん達は、びっこを引く加羽沢を追い抜いていった。その中で、頭の禿げた布袋様のような一人が、加羽沢の方に振り返りにこりと笑った。どこかで会ったような気がしたが思い出せなかった。爺さんたちはそのまま通り過ぎていった。半被の背中にはみな、丸のなかに「め」という字が書いてあった。

タクシーを降りると、加羽沢はまっすぐに娘の家のある棟にむかった。入り口の階段には、男が四人、ぶらぶらとしながら露骨に加羽沢を待っていた。加羽沢が立ち止まると、後ろの方でも人が動く気配がした。退路が塞がれた。

「全部で六人か。豪勢なこった…。」

前の四人は気だるそうに近づいて来ると、加羽沢を囲んだ。疲れ過ぎていた。右足が痛いのと空腹と睡眠不足で、抵抗する気持ちが失せて

いた。

後ろから羽交い締めにされると、一発目が鳩尾を襲った。胃液が逆流してきた。さらにまったく同じ所に二発目、三発目が当たった。悲鳴をあげたり、泣き付いたりすることはヤクザの意地が許さなかった。しかし四発目からは、声も出せなかった。加羽沢は頭の中で、早く眠りたいと思った。眠れば現実が夢になるような気がした。相手は疲れると別の人間に代わった。プロらしく余計な事はせず、体重を乗せ、ひたすら同じ所を狙った。そのうち、本当に加羽沢の視界に黒いカーテンが降りてきた。

顔が冷たいので目が醒めた。目の前はコンクリートの床だった。後ろ手に縛られているのがわかったが、腹が痛くて寝返りも打てない。衣類はすべて剥ぎ取られて、素っ裸だった。腹巻きも、中に残っていた現金も始末されたに違いない。

強烈に寒かった。縛られているせいもあるが、手足がしびれて無感覚なのは、きつと寒さのせいだろうと思った。なんとか顔を上げると、どこかの工場のような大きな機械が二台あったが、埃とクモの巣がたかり、稼動しているようには見えなかった。床からは機械油の匂いがした。顔を反対側に向けようと体をひねると、あまりの痛さに声が出た。鉄の階段が床から伸びて、上の階のドアにつながっていた。二階までの吹き抜けで、壁に沿ってキャットウォークが渡されている。天井は明り取りの窓になっていた。

加羽沢のうめき声が聞こえたのか、急にドアが開くと、逆光の中に男の影が浮かんだ。若い男が二人降りてきて、腕を後ろから引つ張り上げると、加羽沢を無理やり立たせた。腹の筋肉が痛くて体をまっすぐに伸ばす事ができなかった。

連れてこられたのは古びた応接室だった。中にはもう一人若いのがいて、加羽沢は、三人がかりで床に跪かされた。後ろから髪を引っ張られ、顔を上げると窓を背に長椅子が置かれ、金田が股間を開いて座っていた。ズボンのチャックが開いていて、そこから飛び出した逸物を、隣にはべった女が啜っていた。上下に揺れる頭を、金田が優しく愛撫している。

智子だった。

「バカヤロウ、なんてことするんだ。」

智子は何の反応も示さず、行為を続けている。

「こうなるまで、たいふ金かかったよ。クスリたくさんね。」

「俺を殺れば済む事じゃねえのか。」

「お前は、保険。この娘も、保険。ても、光子は、お前に恨み晴らせといた。」

部屋の奥にあった鉄のドアが開いて、馬鹿でかい男が入ってきた。顔が

傷だらけで、左半分の頭の毛が焦げたようにちりちりになっている。例の番長だった。加羽沢の顔を見るとにやりと笑い、ベルトのバックルをはずして、ジッパを下げた。

頭を床に押し付けられ、両腕を引っ張り上げられると尻が高々と上がった。大男が後ろに廻って跪いた。金田の笑い声が聞こえる。

「お前、知てるね。光子は、ぷらいと高い。あの娘好きにならないのは、みんなホモ。」

思わず腰に力をいれると、脇からベルトが一閃して、背中で大きな音を立てた。

「ちくしょう…。」

その時、奥の鉄のドアがグアンと大きな音を立てた。続いてもう一度。しばらくシンとすると、ノブがガチャガチャと回って、ドアが開いた。のっそりと、大きな木槌を持った薄らでかい男が入って来た。ヤスだった。

「バカヤロウ、そんなもんで殴る前に、何で取っ手を回さねんだ。」

小言をいいながら、もう一人、別の男が入ってきた。黒の細身のズボン。胸まで開いた白いシャツ。顔には、サングラス。首には赤いスカーフまで巻いてある。銃身の長いリボルバーをびたりと金田の頭に向けていった。

「みんな、動くんじゃねえ。」

その声は、親分だった。

「こつからだしたら、どこにもはずしっこねえ。みんな、下手なマネだけは、あ、するんじゃねえぞ。」

「親分、見栄切るのはいいんすけどね。俺の後ろの奴、まず何とかしてくれませんかね。」

加羽沢が小さな声でいう。

「みんな、そのまま手え挙げて壁際に立つんだ。」

加羽沢もようやく立ち上がる事ができた。

「やれやれ、もうちつとで痔が壊れる所だった…。」

見るとヤスまで長い鉄砲を抱えている。頭には星のマークの付いた鉄兜をかぶり、周りを精いっぱい怖い顔で睨み付けている。顔に力が入りすぎ、眼が寄り目になっているのが可笑的い。

ヤスが、白い上っ張りを放ってくれた。ズボンをはいていないので、変態のお医者さんごっこに見える。胸の所の黄色い染みはそのまま残っていた。

「待たせたな、征二。」

「いや、親分らしいご登場で。その衣装は、赤木圭一郎ですかい。」

「チツチ、エースのジョーと呼んでくんな。」

親分が人差し指を振りながらいう。

「さあてまず、ヤスは、征二に鉄砲を渡して、そこのお嬢さんを助け

な。金田のポケットには、表に停まっているベントの鍵が入っているはずだ。それに乗って先に行け。」

銃は旧帝国陸軍の三八式歩兵銃のようだった。

「親分、こんな鉄砲どうしたんで。」

「ずっと昔、横井さんからもらった。」

ヤスが智子を連れて出ていった。

「とうして、ここかわかった。」

「俺にや、朝鮮人の友達がいつぺえいるんだ。東上野で廃品回収やってた朴さんは、俺の戦前からのダチよ。お前のシンジケートの話は、とうに知っている。借金のカタで誰からこの工場を奪い取ったかもな。日本人だからつてなめちやあいけねえ。」

外で車のエンジンのかかる音がした。

「金よ。お前にはずいぶんと貸しができた。いずれ礼はさせてもらうぜ。」

その時、奥の大男が動いた。ソファアが音を立てて目の前に落ちてきた。加羽沢が反射的に、銃を向け、引き金を引こうとした。

「あ、そいつを撃っちゃいけねえ。」

銃は、弾が出るどころか、引き金が固定されてびくりとも動かない。ボルトも固まったままだった。

やつらが次の動きに出ようとした時、今度は親分が続げざまに三発撃った。派手な音がして、これには全員が床に伏せた。親分は、加羽沢の襟首を引つつかむと、さっさと部屋を飛び出した。

「この銃は、どうなっているんで。」

「本当は、アメ横で買った。」

「チャカもそうですかい。」

「東映でエキストラやった時、記念にくすねた。仮出所の身で、本物が持てると思うか。」

階段を駆け降りると、親分は側にあつた火災報知器のスイッチを押した。この設備だけはまだ動いていたらしく、非常ベルがけたたましく鳴り出すと、ガラガラと防火シャッターが降り、スプリンクラーから水が噴き出し始めた。

開いていたドアから外に飛び出し、三八式歩兵銃で門をかませると、外の門を抜けて二人は前の道を走り出した。

「ここはどこなんで。」

「向島だ。」

加羽沢は早くも息が上がり始めている。それ以前に体がいう事を聞かない。前に行く親分は、マラソンランナーのように姿勢正しくスイスイと走っているが、さすがに老齢か長年のムシヨ暮らしのせい、さしてスピードが上がらない。

さらに、前方を見ると、大きなベントがドブにはまって立ち往生して

いる。脇に立っているのは、ヤスだった。

「あの野郎。ほんとうになにやっているんで。早く運転席に乗ってエンジンかける。」

加羽沢は、後ろのバンパーに手を掛けると力いっぱい持ち上げた。親分も、となりで赤い顔に青筋を浮かべて踏ん張っている。白いドレスシャツでフランスの国旗状態だ。火事場の馬鹿力で車体が持ち上がった。突然、前方に力が加わり、腕から力が抜けると、ベンツは飛び出すように走り出した。加羽沢と親分は、勢い余って前につんのめった。

「おい、ちよつと待て。」

ベンツは、そのまま黒い煙を吐き出し、えらい勢いで走ると、たちまち視界から消え去った。ヤスを呼び止める暇も無かった。

「親分、あいつぁ運転免許持ってましたっけ。」

「知らん。」

今度は、追手との距離が次第に縮まりつつあった。親分は、振り向きざまに更に二発撃ったが、やつらももう驚かなかった。

ブロック塀に囲まれた工場地域を抜けて、住宅の並ぶ路地に紛れ込んだ。追手は、数が多い上に若い。見るからに体を鍛えている。やつらはどんどん近づいてくる。

加羽沢がもうこれ以上走れないと思った時、キックボードに乗った女子中学生が二人、後ろから脇を追い越していった。

「君たち、ちよつと待ちなさい。」

加羽沢が呼びかけると、女の子達は不信そうな顔をして止まった。

「実は、この先で病人が出て……。」

加羽沢が近づいて、にこやかにそう言いかけたとたん、一陣の風が吹いて、白衣のすそをぱつと持ち上げた。女の子達の目が一瞬凍りついた。女の子達は悲鳴を上げると、キックボードを放り出して逃げていった。

「そんなに驚くほどのこたあねえだろうに。俺のも見してやろうか。」

「親分、そんな事いってないで、それ使えますか。」

「あたぼうよ。俺達の子供の頃はスクーターといったもんだ。」

追手はすぐ後ろまで迫って来ていた。危うく捕まりそうになるのかいくぐり、キックボードで南に向かった。加羽沢の白衣が時折はためき、毛の生えた尻が見える。隅田公園の脇をぬけ駒形橋までたどりつくとき、さすがに追手の数が減った。馬鹿でかい男の影が小山のように見えていたが、それも厩橋までに消えた。

「気に入った。今度から出入りにはこいつを使う。」

親分が厩前橋を渡りながらいった。

「そんな事より親分、どうやってムシヨを出てきたんで。」

「こちとら模範囚だ。傷害だったってヤクザ同士の話だ。ハナつから一人でかぶってるし、歳も食っている。刑期が半分過ぎた所で、ぼけた振りし

て、二、三度寝小便もらしてやった。そしたら娑婆の空気吸ってもいいぞつて事になった。

「といっても、出て来てお前を捜すのに二日もかかっちゃまったがな。」

「ヤスはどこにいたんで。」

「店の前で拾った。お前を捜して毎日店に来ていたらしい。火事で燃えちまった後もな。」

「そいつはかわいそうな事をしやした。」

急に智子の事が心配になつてきた。

「親分、どこか行くあてはあるんで。」

「まかしとけて。」

二人は、キックボードをかつぐと、地下鉄で、親分の隠居所に向かった。

「なんで、こんな所に隠居所があるんで。」

「女房にいえない仏ができて…つう都々逸を知らねえか。もつとも、仏さんをほつといたら、住み込みの婆さんみてえになつちまったがな。」

親分の隠居所は、谷中にあつた。黒板塀に見越しの松。典型的な妾宅である。座敷は濡れ縁に面し、庭には小さいながら築山があり、その向こうは竹藪に覆われている。床の間のわきには、丸い雪見窓があり、真新しい障子が張つてあつた。

「ここなら安全だ。俺もこの事を忘れていたくらいだからな。」

着物を着た婆さんが、何もいわずお茶を置いて出ていった。食卓の上に茶碗を並べただけであつたが、その所作には芸事からくる気品のようなものが感じられた。舟和の芋羊羹が並べられると、加羽沢は親分の分まで食べてしまった。

玄関の引き戸が開く音がした。例の婆さんが襖を開けると、ヤスが智子を背負つて立っていた。泣きそうなくらい嬉しいという顔をしている。

「娘は、ここにしばらく置いておけばいい。何を使ったかわからんが、ヤクを抜くには結構手間がかかる。見たところ、ただのシヤブ漬けとも違うようだし、下手すると警察がうるさい。ここはひとつ俺にまかせろ。いい医者を知っているから安心しろ。」

隣の座敷に床がとられ、智子が寝かされた、智子は、よだれを流し、視線も定まらない。加羽沢は、込み上げてくる物を飲み込んだところで声が出なくなつた。婆さんが、後を引き取ると目で促した。

外に出て襖を閉めると、加羽沢は木の柱を思い切り拳で殴ってみたが、目からこぼれた物を自分でごまかす事はできなかつた。とうの昔に忘れていたはずの感情だつた。

「だいてえの察しはついてるが、お前の口からも聞いておこう。」
親分がそういうので、加羽沢はこれまでの顛末を話して聞かせた。

「そういやあ、組もキャバレーも済まねえ事をいたしやした。」

「まあ、たいていは、俺の考えていた通りに運んだ。今から四の五のいうつもりはねえ。」

「姐さんのことは。」

「あれか。たしかに困ったもんだ。あんまし米山にせびるもんで、米山も眼鏡がくもっちゃった。あいつんとこのしのぎたって高が知れてる。だからシヤブにまで手を出した。このままじゃ光子も巻き込まれる。そう思って、米山の始末にかかったが、まさかその上にまで手を伸ばしていたとは思わなんだ。年甲斐もなく俺も色に惚けたようだ。」

「めっそもねえ。」

「いや、五年もたてば、俺だって目は醒める。だが、これが最後の女になるだろうと思うと、可愛くてな。とんだ弱みを背負ったもんだ。」

「つてことは、親分は今でも…。」

「それは、そのつまりなんだ…。」

「あつしは、どこまで本当か自分でもわかりやせんが、裏には全部姐さんの匂いがしやす。組の事も、智子の事も。実際、姐さんの欲しかったもんは、金というより、何か別のもんだったような気がしやす。」

「…さてとな。」

久しぶりに体を横にすると、加羽沢は吸い込まれるように眠ってしまった。真つ暗な地の底に蒲団を抱きしめながら落ちる夢を見た。何度も叫けぼうとしたが声にならず、必死で声を出そうとしていたところまで目が覚めた。すると、夢の中で自分の叫び声だと思っていたのが、実は若い女の叫び声である事がわかった。智子の声だった。

急いで駆けつけると、婆さんが智子を蒲団の上で押さえつけるようにして、しきりになだめている。智子は笑いながらそれを跳ね除けようとしている。

「お騒がせしました。もう大丈夫ですから。」

「智子お…。」

金田の顔が頭に浮かぶと、体が震え出した。

いつの頃からか、怒りや興奮を覚えると、頭のこめかみの部分がすつと冷たくなるような気がした。こめかみが急に冷たくなる。そうすると、手の甲の古傷が逆に熱く感じられ、傷を撫ぜていると、いつの間にかひどく冷静になっている。このおかげで、出入りの時にも大怪我をせずに済んだと加羽沢は思っている。

しかし、この日だけは冷静にはなれず、すぐに家を飛び出そうと思った。金田をこの手でぶっ殺してやりたい。その思いが冷静さに勝っていた。

肩に手が置かれて、気が付くと親分が寝間着姿で立っていた。

「お前の気持ちはわかる。金のところに殴りこみに行ってえんだろう。ただ、俺に考えがあるんだ。お前たちを助けた俺の顔を立てて、今は待ってくれ。」

加羽沢は、仕方なく蒲団に戻ったが、頭の中に光子とにやにや笑う金田の顔が交互に浮かんできて、それからは一睡もできなくなった。

翌日、衣類一式を親分の年金で新調してもらった。千鳥格子の上着に黒のズボン。何を着てもたいして変わり映えがしないが、加羽沢はその足で女王様のクラブに向かった。

昼には少し早く、女王様は仕事前の顔で迎えた。

「それがね、朝になったら二人ともいないのよ。後で吉田君から店に電話があつて、どうやらあの女を逃がしちまったみたい。ちゃんと手錠とSM用の猿轡かまして動けないようにしておいたんだけどね。」

「そんなこつたろうと思っていたさ。手が使えないっていったって、二人きりにしたのは失敗だったな。三人目からは目で殺すとはよくいったもんだ。」

「征さんには、携帯に電話してくれっていったよ。」

電話をかけるとすぐに吉田が出た。

「お前どこにいるんだ。」

「加羽沢さんこそどこに行ってたんですか。」

「俺は生きている。光子を逃がしたそうだが。」

「…。」

「お前まであいつに啜え込まれたか。」

「そんなんじやありませんよ。あの人、殺されるっていうから。」

「お前はどこまでアマちゃんなんだ。」

「光子さんは嘘なんかついていません。」

「やれやれだ。いいか、今からいう所にすぐ来て、自分の目で確かめる。後の話はそれからだ。」

加羽沢は、一足先に根津の駅に着くと、吉田が地下鉄から出てくるのを待った。道路の反対側から距離をおいて周囲を見渡す。時間が半端なため、それほど地下鉄を降りてくる人間はいなかった。向かいの喫茶店からアタッシュケースを持ったサラリーマン風の男が出てきて地下鉄の入り口に消えるとそれきり人陰が無くなった。約束の時間から、二十分ほど経っていた。

吉田は出て来なかった。頬に風が吹いて、いやな予感がした。突然、右手から巨大な4WDが飛び出してくると、加羽沢の目の前で止まった。中から人が何人か飛び降りてくる気配がした。一足早く路地に逃げ込むと、今度は後ろから4WDが道幅をいっぱいにして追いかけて来た。例の大男がにやにやしなながらハンドルを握っている。4WDはたちまち加羽

沢に追いついた。わざとスピードを上げずに、加羽沢の直ぐ後ろを走り、今にもぶつかりそうになるとブレーキを踏む。加羽沢を躡るようになっている。ごみ箱が一つ二つ跳ね飛ばされたが、大男は意に介さないようだ。足がもつれはじめたので、右に躲そうとしたところ、背中をバンパーの角にぶつけられた。軽く当てられただけだが、加羽沢は数メートル跳ね飛ばされると、コンクリートの上を転がり、右側の石塀にぶつかってようやく止まった。次は、本気で轢くつもりだと思ったところで、向こうから対向車が来た。赤い車が急ブレーキをかけて加羽沢の手前で止まると、中から人が降りて来るのがわかった。4WDは加羽沢の頭を危うく掠め、対向車の脇を通り過ぎて逃げていった。

大男の遊びが過ぎたお陰で、今度だけは命拾いとなった。親分を買ってもらった一張羅の膝がかぎ裂きになってはためいていた。

智子は周期的に錯乱と禁断症状に襲われていた。婆さん以外は自分の部屋に寄せ付けず、親分や加羽沢が近づくと、足音で敏感に察知し、身体を硬くして震える。加羽沢が誰なのかも、わかっているのかどうかかわいそうに身体が反応して自分を閉ざしてしまうようだ。たぶん、金田に犯されたことよって、被害妄想の症状が出ているのだろう。その結果、男の姿を極端に恐れるようになっていられるらしい。親分は、医者からの勧めで、折りを見て専門の精神科の施設に収容することにした。崩壊した人格がどこまで回復するか、予断を許さなかった。

金田なら、素直な智子を手玉に取るくらい造作も無いことだったろう。金田のことを考えると、加羽沢は手の甲の古傷を無意識に撫ぜていた。

「こうしちゃいられねえんで、あっしは、吉田の線を手繰りやす。」

「たぶん金がテツを利用したのは、自分の手を汚さずにシヤブを捌くためだったんだらう。テツがドジ踏んだんで、金はお前にあとをやらせようとした。しかし、ひよんな事で、吉田がそのお先棒を担ぐ事になった。」

「吉田はそこまで気が付いてはいねえでしょう。」

「しかし、テツがからんだことで、警察はお前の事も疑っている。となれば、このルートは、無理に押ししても使えるのはあと一回くれえだ。」

「そういや、姐さんは、でっかいヤマがあるとかいってやした。吉田は、どっちに転んでも、その後切られるってことで。」

「最低あいつに全部おっかぶせてサツに売る事もできるだろうな。その頃にはきつとシヤブは、全部現金に化けている。」

「でも、なんで金田は、吉田を使わなけりやならねえんで。」

「そりやむしろテツがどうやってシヤブの送り先を指示されて、どうやって代金を回収していたかだ。金にはそいつを直接扱えない理由が何

かあったんだろう。だからこそ、テツが回収にまでからんでいる。でもって、テツがいなくなりや、今度は吉田だ。テツが捕まっちゃまった以上、それを調べるとしたら、吉田のパソコンのデータしかない。おそらく警察もそこに行くだろうな。」

「一つ思い出しやした。吉田はデータとかを女王様のところにあずけているんで。あつしは今からひとつ走りそいつを取ってきやす。」

加羽沢が帰ってくるのと親分がパソコンをちゃぶ台の上にのせていじっていた。

「えつ、親分はパソコンが使えるんで。」

「あたぼうよ。こう見えても勤労奉仕の時やあ機械物を一挙に引き受けていた。」

「親分、それは、いつの話で。」

「とにかく運んできたやつがつかないでったんだから、あとは、この辺のところをいじるだけじゃねえか。日本の首相もいった。これからはパソコンが使えないと日陰者になっちゃまう。さあ、お前が持ってきたシロモノをここんとこに入れてみる。たしか、この絵んところに矢印もっていつて、こいつを二回押すといつてた。」

「あ、動いた、動いた。」

「なんだこのパスワードってのは。」

「たしか、トモチャンって入れてやした。」

「平仮名か、カタカナか、それともローマ字か。」

「なんの話で。」

「わかった。もうお前には聞かない。テーはどこだ。テーは。」

「ここで。」

「あ、なんだって違う字が出るんだ、ちくしよう。」

「親分、それは違うところ。オーじゃなくて、そつちは数字のゼロ。だいたいそれじゃチャになりませんぜ。」

「うるせえ。だったらお前がやってみせろ。」

二時間かかってようやく白い紙に吉田のメッセージが現われた。青いローマ字にアンダーラインがしてある。

「ここをさわるのか。」

突然画面がまた動き出して真っ黒になった。白い大きな字が浮かび出てくる。

「ドクター木暮の部屋。十八歳未満お断り。なんだこりや。」

「とりあえず入るつてえとこを押すんでしよう。」

いきなり女の子のヌードが出てきた。「私にさわって」と書いてある。

「どこさわりたいんだ。」

「とりあえず、この胸のここんところでも。」

『キヤ、あなたなつてエッチ。』という表示が現われた。

「もうやつてらんねえ。」

「とにかく、このドクター木暮ってやつに連絡取らなきゃなんねえんで。吉田の話だと、こいつは本当の天才なんだそうで。」

ドクター木暮にメールというボタンを押した。

「なんだ、また字書くのか。」

「親分、この際、全部カタカナにしましよ。チチキトクスグカエレみてえに。」

それでも最後に電話番号を書いて送るまでに三時間かかった。

翌日、その天才ドクター木暮が親分の隠居所を訪れた。歳は吉田と同じくらいだろうが、小太りで、髪の毛には白髪がまじり、膝の抜けたジーンズに食べこぼしのしみが付いた「シャツを着ている。」

「木暮です。吉田がお世話になってます。」

「わざわざお運び下さってありがとうございます。」

親分が出迎えた。

「実は、その吉田が、ちつとばかり厄介事に巻き込まれちまって、そこでぜひ力を貸していただきてえと、こういう訳なんで。吉田の身の事もありやすんで、今から話す事はぜひご内聞に。」

加羽沢は、これまでの話の重要なところをかいつまんで話した。

「とすると、このデータの中に、覚醒剤取引の鍵が隠されていると。」

しかも、吉田が何かを始める前にそれを止めなければならぬと。」

木暮は、親分のパソコンに自分のノート型パソコンとさらに箱を二つばかりつなげた。

「パスワードはなんですか。」

木暮は、しばらくパソコンを動かすと、クククと笑った。

「吉田の奴、無理に開けると、データが壊れるように細工しやがって。」

親分と加羽沢は青くなったが、まだデータは壊れていなかったようだ。

「だいぶ数があるな。オーダーの内容はどれも同じようだし。もしかすると、肝心な指示は、メールを使っていなかったのかもしれない。試しに発信者のアドレスから入って、ハックするか。」

「ハックてえと。」

「相手のパソコンに忍び込んで、メールを盗み見たりするという事です。もちろん全部成功するとは限らないし、相手が嚴重にセキュリティをかけていると、…やっかいなんだな、これが。えーと、このファイルか…。」

木暮は引き込まれるようにパソコンに専念しはじめた。時々パソコンに意味不明の事を語りかけている。

「こいつはもう、俺達には出番なしだな。おい、先生に茶でも出してや

つてくれ。」

親分が引つ込んだので、加羽沢は、ぶつぶついながらパソコンを操作する木暮を見守っていた。店屋物のうなぎをかつ込みながらも、操作を止めない。夜中を過ぎても木暮はパソコンから離れなかった。

「やった。」という声で加羽沢は目を醒ました。

「こいつは、外部からの指示でオーダーを出している。指示を出した奴のアドレスは、これか。注文は六本。という事は六本で注文した客があやしいのか……」

木暮の顔が輝いている。

夜が明けてしまった。気が付くと木暮もパソコンにむかっただま、後ろに倒れ躰をかいている。加羽沢が見ていると、気が付いたのか木暮の目が開いた。

「おっと、眠っちゃったか。」

木暮は、むっくり起き上がると、またマウスを握りながらいった。

「残念ですが、やはりオーダーリストの前身だけじゃ何もわかりませんでした。どの客にクスリが送られていたかが特定できません。前金の局留めだと、どれも同じ条件になってしまえますので。たぶんメールだと記録が残るので、別に電話で指示して送り先を特定していたのでしよう。

だから、オーダーのリストとメールのやり取りを手がかりにして、残っていたアドレスの中で入り込めるところまでは行きました。

肝心なクスリ関係の話はさすがに出てきませんが、オーダーを出した人間のうち、四人が同じところからメールを受けて、このホームページにオーダーを出すように指示されています。しかし、物の送付先は、それぞれ別なところで局留めになっていて、住所も何もわかりません。だから、例の大きなネタというのもこれだけだとよくわかりません。

次に、四人にメールを出した所に入っていきましたが、これも残っていたメールの前身では、なにもわかりませんでした。ただ、ひとつだけ、発信者の居場所は、赤坂のようです。これも『赤坂で会う』という一言があっただけです。」

「赤坂って事は、日東会の連中か。」

寝間着に丹前を羽織った親分が入ってきた。

「てえことは、金の所から日東会のルートにまでシャブが流れるようになったってことか。」

読めたな。でっかい山つてのは、この取引きのことだろう。金の所と日東会のインターネットつうもんを使った業務提携ってところだな。日東会のルートまで流通を引き受けようとしたんだ。

前金を払わないとブツが仕入れられない。地下銀行が決まった時にしか使えない。こいつはたぶん朝鮮側の事情だろうな。本国を出荷され

たブツは、足つかねえように早く始末する必要がある。だから、一番先に金払ったやつに売る。ところが金は、サツの監視がこのところ厳しくて、思うように動けねえ。光子のいったことは、まんざら嘘でもなさそうだな。お前達は、まさにその代行をやらされそうになってたんだ。」

「ただ、姐さんのいうことをそのまま信じるなら、姐さんのやろうとしていたことは、もうちっと別のものになりやせんか。」

「たしかに、あいつのことだ。まだ何かあるかもしれん。」

親分はまた考え込んだ。

「しかし、日東会が出てきたってえことは、連中のパソコンにまで入っていったってことか。先生、どうしてそんな金庫破りみてえな事ができるんで。」

「それが、ハッカーなんですよ。コンピューターの金庫の中に侵入するのが楽しいんです。」

「いつてえどうやって。」

「そこは、企業秘密です。でも、ちよつとだけ、今度はみなさんが侵入を防ぐ必要があるので教えておきます。」

ハックのポイントは、どうやってパスワードを盗むかです。それには、コンピューターを使って個人データを集め、パスワードを暗号破りみたいにして解くというイメージがありますが、本当はそうじゃありません。パスワードを盗むのは、単純な詐欺の手口がほとんどです。初歩の例ですが、これは僕の作った画面です。」

パソコンの画面が真っ黒になって、何行かの白い文字だけになった。

「これは、コンピューターがストールした時の典型的な画面です。ストールというのは、まあ、車でいうエンコと考えていいでしょう。で、復帰するには、ここで、パソコンがパスワードを要求するんです。ここにパスワードを書き込めってね。しかし、この画面は、さっきいったように僕が作った偽物です。パスワードが書かれるとそれが僕のパソコンに転送されて、画面がもとに戻ります。だから、これを誰かのパソコンに仕掛けておけば、そいつがだまされてインプットすると、そいつのパスワードが僕のパソコンに送られてくるという仕組みになっています。あとは、そのパスワードを使って入るだけです。この画面でパスワードが要求されれば、よほど警戒していない限り、九十九パーセントインプットしますね。偽物と気づく人もいません。パソコンを使っている人に、こういう話をすると同じような経験のある人が一人二人、必ずいますよ。」

木暮は、さも得意げに説明する。

「何だか俺には霊界通信の話聞くようなもんで、よくわかんねえんだが、吉田もこれをやってるのかい。」

「あいつは、ハッカーまでやれません。次は、吉田のメールアドレスが分かっているんで、入ってみます。たぶん吉田は予想していると思うんですがね。」

木暮はまたパソコンの世界に戻っていった。今度は、ブツブツいいながらしきりに首を振っている。

「吉田のメールですが何も残っていません。あと、あちこちのファイル関係も見ましたが見事消されています。」

「てえことは、吉田は仕事を終えちまったってことか。」

「その可能性があります。」

「吉田が危ねえ。」

腕を組んで向こうを見据えていた親分の目が光った。

「何とか始末される前に、吉田を先に捕まえるんだ。」

「居場所がわからねえ。」

「頭使うんだ、頭を。仕事を済ましたってことは、次は集金じゃねえか。金を集めたらそれをどこに持っていくんだ。」

「話だと地下銀行で。」

「やつらがやりてえのは、物の仕入れと現金を洗うことだろう。そこん所で吉田を利用している。どっちも銀行の話になる。」

「しかし、地下銀行てえと。」

「北朝鮮に送金するための秘密の銀行なら、俺から朴さんに聞いてみる。」

親分から聞かされた場所は、東上野の奥にあった。サラ金とパチンコ屋の前をいくつか通り過ぎ、角を曲がるとラブホテルになっていた。加羽沢はそのラブホテルに入っていた。

自動ドアが開くと、「いらっしやいませ」と声がかかった。その方向にカウンターがあり、くもりガラスのつい立ての向こうに人影が見えた。

「朴さんから、聞いた。」

くもりガラスの下の方から、眼鏡をかけた婆さんの顔がのぞくと、ひとしきり加羽沢の顔を眺めてから引っ込んだ。窓口から手が出て、黄色の紙を差し出した。

「初めてなんだ。」

「先にお金を出して、そこに住所書いて。」

「今、持っていねえんだ。」

「バカにするんじゃないよ。」

黄色の紙が引っ込んだ。

「待ってくれ。明日までに持ってくるから。」

「…。」

それ以降は、加羽沢が何を話しかけても返事がなかった。婆さんの陰は、くもりガラスの向こうで微動だにしなかった。

仕方なく外に出ると、加羽沢は出入り口から離れて、飲み屋の脇にある路地に身を潜めた。昼前とあってそのあたりの道にはまったく人通りが無かった。しかし、加羽沢には、吉田が目の前を通り過ぎていくと

いう確信のようなものがあつた。

路地はゴミの臭いがした。カラスにつつかれたのか、穴の空いたビニール袋からゴミが散乱している。道が曲がっているため、ホテルの玄関は見えるが、その先まで見渡せないのが難だった。吉田が通り過ぎる時をうまく捕まえないとまた見逃してしまう。

しばらくして、ふと、見慣れた色のフリース姿が通り過ぎたような気がした。路地から乗り出してみると、思った通り吉田だった。大きなナツプザックを背負っている。後を追って一歩踏みだそうとすると、後ろから手首をつかんだ奴がいた。

「加羽沢か。久しぶりだな。お前もあいつに用があんのかい。」

刑事の宮地だった。

「旦那。ちつとばかし急ぐんでご勘弁を。」

宮地はにやりと笑うと更にきつく手首を握った。その後ろには、いつかの役者顔の刑事が立っていた。吉田が現われたためにできた一瞬のスキを、加羽沢は呪った。

その時、罵声とともに二発、銃声が出た。ラブホテルの前で、吉田がはずむように倒れた。

「まてい。」

役者顔の刑事が素早かった。吉田を飛び越えると、全速力で狙撃した犯人を追っていった。加羽沢は、倒れた吉田に駆け寄った。胸に丸く赤い染みが出ている。至近距離から撃たれたので、弾は背中に抜けたようだ。肺の中の大きな血管を傷つけていなければ、助かる見込みはある。ただし、撃たれたショックにどのくらい抵抗できるか問題だ。

「加羽沢さん……。」

「しゃべるんじゃねえ。バカヤロウ。」

吉田の呼吸が急速に弱くなっている。

「吉田、聞こえるか。聞こえたら上向いて口開けるんだ。」

反応が無かった。

加羽沢は、自分の口を吉田の口にあてがうと、息を吹き込み始めた。口を離すと吉田の胸が下がる。穴の開いた所から空気が漏れているような気がしたが、頭を振ってその考えを打ち消した。また口から息をゆつくりと吹き込む。首の内側に触れると、まだ脈はあつた。加羽沢は、辛抱強く人工呼吸を繰り返した。

「加羽沢、今、救急車呼んだからな。」

宮地の声が出た。

「旦那、これ知ってたら代わってくれませんか。もうへとへとなんで。」

「わかった。俺がやる。」

宮地が交代した。

「吉田、悪いが俺にやどうしてもやらなきゃならねえ事がある。がんばれよ。」

宮地が驚いて加羽沢を見る。

「旦那、今止めたら、そいつは死にます。そいつを捨ててまで行くってことで、あつしの立場、察してくださいませ。頼みます。」

救急車のサイレンが近づいてくるのを背中中で聞くと、加羽沢は吉田のバッグを拾い、上野の駅の方に歩き出した。

「まてい、加羽沢。」

宮地が呼んだが、加羽沢はもう振り返らなかった。何も聞こえず、ただ両方のこめかみが冷たくなっていた。

赤坂に着くと加羽沢は、一ツ木通りの脇道を回り地回りを捜した。店の開店前の数時間が、地回りの稼ぎ時となる。表向きは、氷や貸しタオルの注文取りや集金だが、その実は、みかじめ料の徴収等本来の仕事が行なわれている。誰だって今から開店という時に、ヤクザに絡まれたくはないだろう。

加羽沢は、店を出てきた二人組みに声をかけた。若い上に、服装がけばけばしく、いかにもチンピラ然としている。まだ年期が入っていない証拠だ。

「ちよいとばかり聞きてえ事がある。」

「なんだい。」

「今朝、上野で若いのを弾いたのはだれだ。」

「なんの話だ。」

「そんな話、俺達を知る訳ねえだろう。」

「ならば、知っている奴はだれだ。」

「てめえ、俺達のことをなんだと思ってるんだ。」

片方が加羽沢の胸座をつかんだ。もう一人は、その後ろで見ている。

「素人だな。」

加羽沢はニヤリと笑った。左右の手で相手の両耳をつかむと親指を相手の眼に突っ込んだ。上体がのけぞった所で鳩尾を二発殴った。相手が前かがみになって、頭が下がってきたので、後頭部にひじ打ちを加えた。ドサリと倒れる音が聞こえた。

「てめえ。」

もう一人がナイフを抜いたので、加羽沢はくるりと踵を返すと走り出した。

「待ちやがれ。」

相手が追いかけて来た所で、足を止め、右に振り向きざまに、裏拳を相手の喉をめぐけて放った。見事に顎の下に入った。転んだ所で、相手の脇腹に爪先で蹴りを入れた。ナイフを持った手を握り内側にひねると、体が半回転して力が抜けた。その反動で加羽沢は、刃先を相手の臀部に突き立てた。

「いいか、こういう物で遊ぶと必ず怪我するんだ。」

悲鳴を上げて反り返った背中を膝で踏みつけた。

「もう一度聞く。弾いた奴は誰だ。」

「知らねえよう。知らねえつてば。」

「誰に聞けばわかる。」

「わかんねえよ。組長にでも聞いてくれよ。」

下っ端では、やはりわからないらしい。加羽沢は諦めてナイフを引き抜いた。ギャツといって持ち上がった頭を蹴飛ばすと、次の相手を探して歩いた。このまま踏み込んでも埒があかない。下の方から手繰っていても、素直に話しが出てくるとは思えない。

そこで、加羽沢はさらに道を進んで、それらしき車を捜して歩いた。赤坂駅の近くになって、大型のベンツが違法駐車しているのを見つけた。窓ガラスは黒塗りで、運転手は、外で煙草を吸っている。ヤクザだ。服装はチンピラよりも改善されていたが、同業の臭いは拭い切れない。

加羽沢は運転手に近づくといきなり正面から切り付けた。シャツが切れて中の皮膚が見えた。刃先が少し体に触れたかもしれぬ。相手がひるんだところで、体を寄せると首にナイフを突き付けた。

「何すんだよ。」

「俺は本気だ。いうこと聞いた方がいいぜ。」

血の付いたナイフを見て男は大人しくなった。加羽沢は、トランクを開けさせると、中に押し込んだ。

「せまいが、ちつとばかし辛抱していてくれ。」

加羽沢は、ベンツを運転すると、ぐるりと回って、もとの道に出ると、駐車していた所から五十メートル手前に止めた。しばらく待っていると、側のビルの出口から、男が二人出てきた。一人は、高そうだが派手な背広を着ている。もう一人は体が一回り大きい。用心棒だろう。加羽沢がライトを点けて合図すると、向こうも気づいて手を振った。車をゆくり発進させ、男達の直前で大きくハンドルを切った。スピードは出ていなかったが、ベンツの重量は、軽々と人を二人跳ね飛ばすのに十分だった。通行人がいたが、加羽沢は、無視して車を走らせていった。

日比谷から築地に向かい、勝鬨橋を渡ると清澄通りを北上して、向島を目指した。途中で車に接続された携帯電話が鳴ったが、無視して取らなかつた。相手も動き出したようだ。そこでふと思いついて、親分の所に電話した。

「あつしです。木暮の旦那はまだいますかい。」

「ああ、今パソコンをおせーてもらっていた所だ。」

「だったらこう伝えて下せえ。例の日東会が今から騒がしくなるから口座を見張ってくれと。出来れば金田の名前を使って騒ぎを大きくしてやりてえんですが、それは親分にお願えしやす。金田が黙っていられなくなるように。」

あと、木暮の旦那には内緒ですが、吉田が弾かれやした。胸でした。口径が小さかったのと、うまく骨はずれて抜けたんで、もしかしたら助かるんじゃないかと。ただ、ショックで危ないかもしれないやせん。日東会の下っ端を締めつてみやしたが、弾いた奴はわかりやせん。」

「よし、その辺も調べてみる。任しときな。」

話し終わると、加羽沢は携帯を窓から捨てた。車は墨田区に入っていた。住宅街を抜け、例の倒産した町工場を見つけると、いったんその前を通り過ぎた。夜なので辺りに人影は無く、シャッターも下りたままだった。最初の角を使って「ターンすると、四十キロまでスピードを上げ、オートクルーズにした。そのまま、車の鼻先を町工場の方に向けると、加羽沢は車から飛び降りた。ベントはゆっくりとそのまま走り、軽く、それでも結構大きな音を立てながら町工場の入り口の門柱にぶつかって止まった。前面が潰れ、エアバッグが膨らむのが見えた。

「これでベントもまた儲かるだろう。」

加羽沢は人通りを確かめると、現場から逃げ出した。空には満月がかかり、朧に霞んでいた。

真夜中過ぎに向島から帰ると、親分と木暮が待っていた。

「お前のいった通り日東会のメールが騒がしくなっているそうさ。そこになちよつかい出しているのは金田の組の者だという噂を流しておいた。」

「金田の向島の工場に日東会の車をぶつけときやした。ほんとなら、チャカ使ってガラスを割っておくんでしようが。」

「また噂を流してやつらのどっかの事務所が二、三発弾ぶち込まれたてえことにすればいい。話だけならほとんど大袈裟にする事ができる。」

木暮は夢中でパソコンに向かっている。目が笑い、唇がだらしなく開いているが、指先だけは、別な機械のようにキーボードの上を動き回っている。

「やつらは携帯だと盗聴されるもんだから、メールに切り替えたようです。だんだん深刻になってきて、今は金田の組の場所を調べています。」

「よし、出来るだけあっちこちでつじつまが合うようにして、もっと煽っておくんせえ。」

木暮には、ハッカー冥利に尽きるという仕事のようだ。加羽沢は、木暮から離れると親分に耳打ちした。

「ところで、吉田の方は。」

「それがわからねえ。金田の組の者が弾かれたって事を日東会が知っている。てえことは、日東会の仕業ではないかもしれねえ。」

「吉田の事を知っているのは、金田の組の他には、日東会しかありません。金田にしてみれば大事な送金の邪魔だてをされた訳で、吉田を

始末するにはまだ早すぎる。第一ブツが確保できなきや、日東会に對してますますまずい立場になる。だから、金田の組みが弾くという線は薄いてえことになりやす。

それに、もし吉田が何か余計な事をしたとするなら、シャブの流通のルートからいって、不審に思つて警戒するのは日東会の方でしょう。」

「たしかに、今回の商売は、日東会の顧客の話に卸しものである金田の組が直接動いている。日東会は、インターネットを使うことで、手を汚さずに売り上げが伸びりや、こんないい事はねえだろう。しかし、今まで自分達で開拓した顧客層を他の組織に知られるという所だけはおもしろくねえはずだ。だから、金田の話に乗つて、うまく行つたら乗つ取るつもりでいたんじゃないか。」

「てえ事は、やはり始末に入つて吉田を弾いたのは、日東会で。」

「わからん。それにしても日東会の動きが早すぎたような気がする。」

親分は腕組みをしながら天井を見上げた。

「ところで、吉田が運んでいた金は何処に隠した。」

「上野駅のコインロッカーで。」

「となれば、もうじきばれて矛先がこっちに向くな。金田と日東会がゴタゴタしている間に、こつちのことは片づけちまつた方がいいかもしれねえ。」

「吉田はまだ生きているんで。」

「ああ、東大病院に担ぎ込まれてまだ死んじやいない。ただ、警察と金田の組の者が絶対に張っているだろうから、見舞いに行くのはまだだ。」

酸素吸入器をつけた吉田の顔が加羽沢の頭に浮かんだ。

「警察は。」

「動いている。何処までつかんでいるのかはわからねえ。」

親分が、腕を組んだまま目を閉じると、木暮のたたくキーボードの音だけが響いた。

「おれあ、ちよつくら出かけてくる。」

親分が立ち上がつていった。

「こんな夜中にどちらへ。」

「その夜中にしか会えねえ連中に会つてくる。それから、金田にも連絡して、明日の夜遅くにでも会えるようにしておけ。」

「どうしようってんですか。」

「決まつてるじゃねえか。果たし合いよ。場所は、千束小学校の校庭。」

「小学校の校庭って、そんな暴走族の喧嘩じゃねえんですから。」

「そこが一番便利でいいんだ。こつちがやつらの金を預かっているといえ、いやでも取りに来るだろう。他の誰にも邪魔されねえように、約

東は夜中の一時にでもしときな。」

「しかし、こっちはヤス入れたって三人、向こうは大勢でチャカだつて持つて来るでしょう。」

「なあに、ヤクザは気力よ。最初に相手を飲んじまえば、後はどうにでもなるもんだ。しっぽ巻いたらそこで終わりよ。」

「しかし、もうちつと勝ち目のある方が。」

「征二、お前、俺を信じられなくなったか。」

「いや、そんなんじやありやせんが。」

「じゃ、まかせておくんだな。」

親分は何処からか明け方になって帰ってきた。そのまま寝室に引っ込むと昼過ぎまで寝ていた。

その間、木暮の情報によると、金田の組の者を日東会が狙撃して、墨田区で二人ほど怪我をしたようだ。だんだんきな臭い雰囲気は漂ってくる。警察は、すでにこの抗争に気づいているようだった。日東会の事務所にも拳銃が打ち込まれたというニュースが朝刊に載っていた。

夕刻、いつものように一風呂浴び、二合の晩酌を済ませると、親分は木暮に礼をいった。

「どうも先生には、世話になりやした。これから多少めんどうな事になるやも知れやせんが、ここでのことは、どうぞご内聞に。先生には決して迷惑をかけるつもりはございやせん。無事に帰ってこられたら吉田も入れて、また一杯やりやしよう。」

婆さんに厚手の封筒を渡されて木暮は当惑した様子だった。

「では、あつしらには仕事が控えておりやす。見送りも出来やせんが、パスコンのこたあまた後日でえことで。」

木暮を送り出すと、親分は加羽沢とヤスを呼んだ。

「おめえ達はこれを着て付けてこい。」

婆さんが着物と晒し、関東戸谷一家と染め抜かれた半纏を差し出した。

「めったにあることじゃねえから、それなりに格好をつけなきやな。半纏の方はこないだ新調しといた。」

親分は紺の着流しに羽織り、すその辺りに白く文字があしらわれている。

「南無妙法蓮華経ですかい。」

「いや、南無阿弥陀仏だ。宗旨変えした。」

神棚に灯明と塩を供え、手を合わせた。

「よし行くぞ。」

婆さんが切り火を切った。

「じゃあ、行ってくるぜ。」

玄関を開けると、親分は雪駄の音も高らかに歩き出した。外は、急にまた冷え込んで、春は名のみ寒風が吹いている。

「車は。」

「近所だ。歩いていく。」

三、四十分ほどかけて、千束まで歩くと、汗が出てきた。災害時の避難に学校は夜中でも入れるようになっていた。校門の側をすり抜けると校庭に出た。

「用務員のおっさんが出てきやしやせんか。」

「いや、話をしといたから、大丈夫だろう。」

さすがに校庭の真ん中までは周りの光が届かず、闇が更に深い。金田の見張りがどこかに付いているような気配がした。

加羽沢は、長ドスを借りて、晒しに指していた。ヤスは、例の木槌を担いでいる。親分は手ぶらである。解散の結果、組はほんとうにこれだけになっていた。

時折、風が着物のすそをはためかせる。校庭の砂が音を立てて舞う。親分は校舎を背にすくと立って闇の奥を見つめていた。加羽沢とヤスはその側を固めた。

目が暗闇に慣れた頃、校舎の後ろから黒い影が現われた。影の集団は散開して、三人を取り囲むようにして近づいてきた。ヤスは、木槌を振りかぶり、加羽沢はドスに手を置いたが、親分は腕を組み微動だにしなかった。三人は横に並んだままで、相手が近づいて来るのを待った。

金田のグループは、十二、三人いるだろうか。いずれも黒っぽい影に見える。こちらが三人である事がわかると、緊張が緩んだ。全員が間合いを測って立ち止まる中、痩せた影が一人近づいてきた。金田だった。

「金、よくきたな。」

「たいふ、好き勝手なことしてくれたな。迷惑だったよ。船、荷物下ろさずに帰ったよ。」

「そいつあすまねえな。」

「人の顔つぶして、このまま済むと思うな。」

後ろの影のうち何人かは懐に片手を入れている。相手方は、横に広がると、射線が交差しないように扇形に散開して来た。

「金はどこだ。」

「あいかわらずよつぼど金には困っているらしいな。」

「お前たちに、勝ち目は無い。すぐ返すか、痛い目にあうか。」

「今日でこの話は終わりだ。こっちからケリつけてやる。」

金田が一步後ろに下がった。

風が吹いていた。まだ木枯らしの冷たさだった。加羽沢は、金田と刺し違えるのに何発くらうだろうかと考えていた。ヤクザの射撃は至近距離からのものだ。普通は移動する標的を撃つなどという訓練は受けてない。だから運悪く頭にでも当たらなければ、一度くらい切りつけるチ

ヤンスはあるだろう。ただ、その先は、いかんせん相手の人数が多すぎる。親分にしては無策だ。あえて視界の開けた所で、どうしろというのか。死ぬという気がしないので、恐くはなかつたが、厄介な事になったと思つた。親分やヤスの面倒までは見られないだろう。

加羽沢は、軽く身をかがめると、左手でドスの柄を下に向け、右手をかぶせた。腕がくの事になって、体の前面の急所を覆った。ゆっくりと右足を半歩前に出すと、校庭の砂が引きずられて音を立てた。こめかみがひやりと冷たくなり、手の甲の傷が熱くなつた。加羽沢のかすかな動きを認めて、何人かが拳銃を抜くところらの方に向けてきた。ヤスは、木槌をふりかぶつたまま凍っている。

その時、遠くで男の唄う声が聞こえた。

高調子で流れる声は、木遣だつた。すると校舎の側から、こちらの方に向かう人影が見えた。影は見る間に次々と増えて、一塊の集団となつた。夜目にも白く、みなが揃いの半被を着ている事がわかつた。人数はあつという間に五、六十人になり、まだ増え続けている。風吹く中を集団が砂埃を立てて近づいて来た。

中に二人ほど、大きな荷物を担ぐ人の姿があつた。棒の先にはためく飾りは、同じように白く、よく見るとそれは、火消しの纏だつた。大きく『め』という字が書いてある。

木遣が流れる中、白い影が校庭の半分を覆うようになり、先頭の一団が、さらに近づいて来た。顔がわかるようになると、それは爺さんばかりの集団だつた。真ん中で、懐手をした人物は、頭の禿げた布袋様だつた。大きな目がぎよろりと光つた。

「伝八。ちつとばかし騒がしいな。」
「へえ。」

金田の組の者は、自分達を守るように小さく固まつた。それを囲むように白い集団が広がっていった。

「金よ。おめえに話がある。」

声に、有無を言わせない迫力があつた。ヤクザとしての格の差が明らかだつた。金田の組の動揺が見て取れた。

「この喧嘩は俺があずかる。命までとろうたあいわねえから、金よ、俺達について来い。」

「おまえたちと話すことなんか無い。」

「そうかな。今、おめえがどんな立場にいるのか、一番よくわかつているのは、おめえの方だろう。もう少し冷静になって考えてみな。今までの後ろ立てとまぶくなつて、手を組もうとした相手ともしくじつちまつた。シノギに使つた物の供給源まで危なくなつている。弱つた魚は食われるのがおちよ。警察にもしつぽつかまれて、おめえは、これからあつちこつちからも追われるはめになる。これで今、心配しなきゃなんねえのは、何

だかわかるうってもんさ。」

金田の子分達の目が金に集まっていた。白の半被姿が金田に近づくとき、子分が動こうとしたが、金田が首を横に振ってそれを止めた。

「わかったか。おめえは、だれかに守ってもらわなきゃなんねえんだ。朴さんの顔があつてよかつたな。」

すでに金田のまわりは囲まれていた。白い半被の老人達は奇妙にくつろいだ様子でこの騒ぎを楽しむかのようなのである。しかし、スキが無い。もしどこかに動きがあれば、死角から一突きできるように金田の子分の一人一人を固めていた。

老人二人が左右から金田を促して歩き出した。子分達も囲まれたまま、否応無くその後が続いた。校庭の砂地を這う音だけが響き、白い集団が校舎の陰を曲がり、暗がりの中に消えて行くのを加羽沢はあつけないとられたように見えていた。

最後に残った布袋様の後ろから、もう一人の影が現われた。白い半被を着ているが、夜目におぼろげながらも、それは老人の姿ではなかった。影は政子だった。しかし、いつものあの笑顔はなくて、心配そうな表情が浮かんでいた。

「征さん、無事でよかつたわ。」

「なんで、お前までここにいるんだ。」

「心配だから私もめ組の頭に相談したのよ。征さんは気づかなかつたよ。うだけど、だいぶ前から頭の所の人が付いていてくれたのよ。」

「おめえんところの若いもんが弾かれたのは済まなかつた。こつちにもいろいろと事情があつてな。それから、金のことは、悔しいだろうが、今回だけは目をつぶってくんな。朴さんの顔も立ててやらなきゃならねえんだ。どの道あいつはろくな死に方はしねえだろうさ。」

と、め組の頭がいった。

「大将同士の手打ちとあつちやあ、あつしに出る幕はござんせん。娘のことは、今度やつに会った時にたつぷりとお礼させてもらいやす。ただ、吉田のことは。」

「そいつは俺からいおう。やつたのは金の組の者じゃねえ。」

親分がすぐ後ろに立っていた。

「じゃ、どこの者で。」

「いずれわかる。頭のおかげでおよその見当はついている。ただ、裏で糸引いたのは、おめえも気づいての通り、光子だ。金の野郎は結局、踊らされたにすぎん。」

光子のことは俺が自分で何とかするつもりだったが、こう未練が残つていちやうまくはいかねえだろう。吉田のことは、俺の見当違いのせいだから、後のことはおめえに任せる。ただ、気をつける。光子はどんどん大きくなっている。」

いつの間にか空が白み始め、スズメの鳴き声が聞こえていた。

「征さん、またね。」

政子がそういうと、め組の頭が肩を抱き帰って行った。政子は、途中でこちらに振り返ると人差し指を一本立てて見せた。あの笑顔が戻っていた。

「親分は、これからどうするんで。」

「シヤバに出てみたら意外とおもしろえ。またまじめに勤める気になった。」

親分は胸の前で腕を組むと、朝日の昇る方角を眺めていた。朝焼けだった。親分はくしゃみをして、鼻をひとすすりすると、家の方に向かって歩き出した。顔にそよと吹いた風が暖かくなっていた。

「征二、金が要る。こいつを青山あたりまで持っていって始末して来い。」

隠居所に帰ると、親分が廊下にあつた茶碗を拾い上げていった。白地に青い渦巻きのような模様が描き込んでいる。

「しかし、そいつはさっきまで猫がエサ食ってたやつでは。」

「ちつとばかり古いもんだ。とにかく持っていきやわかるつて。ただ、猫のことはいうなよ。」

婆さんがどこかから古そうな桐の箱を持って来ると、猫の茶碗を布に包んでしまった。

「その代わり、吉田が落とした方の金はめ組の頭に預けちまいな。いくら爺さん達でもまったくだじゃ働いてくれねえ。それにあの金は洗つてからじゃねえと使えねえだろう。あと、吉田には弁護士を頼んでおいた。たぶん挙げられるだけの材料はねえと思うが、吉田が自分からおかしなことをいっちゃったら大変だ。あとで先生に金がいるから始末しておけ。」

ここまでいうと親分は大きなあくびをした。

「ずっと規則正しい生活をしてきて、このところこれだ。もう眠くつてしようがねえや。」

親分は自分の部屋に引っ込んでしまった。

一通り用事を済ませると、加羽沢は吉田のいる病院に向かった。六人部屋だったので、同室の患者に用意したモモとパイナップルの缶詰を配っていた。

吉田は鼻に吸入器をつけて点滴を受けていたが、顔はしっかりしていた。

「どうでえ、ちつたあ元気になったか。」

「笑うと、とつても痛いですけど。」

「冗談がいえるなら、もう退院だ。親には連絡したか。」

「いえ。心配かけると思つて。」

「わかった。あとはまかせろ。」

「ぼくのした事が気にならないんですか。」

吉田が思い詰めたようにいった。

「そいつは、もうちっと後でいい。」

「ぼくを撃つたのは誰ですか。」

「そいつは警察が調べてくれるだろう。そうだ、警察とやべえ話はしてねえだろうな。」

加羽沢は一步乗り出して、吉田に顔を近づけた。

「ブツの送り先のことですか。」

「そうだ。」

「ヤクザの人は字を書くのが嫌いなようで、テツさんもやり取りは全部電話だったようです。でも、それだと黄金液の送付先と混ざってしまうので、ホームページで受け取ったオーダーと出荷伝票との差を調べて僕がリストにしてみました。たぶんそれが。」

「そいつはどこにある。」

「光子さんです。」

「わかった。光子に頼まれてやったことだけは誰にも言うな。弁護士が先生がついているってのは知っているだろう。」

「はい。」

「しばらく静かにしてるんだ。あと、金のことは心配するな。親分が面倒見てくれるから。」

思ったとおり病院の玄関では刑事の宮路が待っていた。例の役者顔もいつしよだった。

「その節は、吉田がお世話になりやした。」

「それより、加羽沢、お前の知っている事が知りたい。」

「あつしが知っているってえと。」

「金田の組は、どこに消えた。」

「なにも知りやせん。」

「とぼけるな。おまえんとこのテツと吉田はそうはいわなかったぞ。」

「旦那、脅かしっこはなしにしましょうや。もう組はねえんで。それに吉田はカタギで被害者だ。あつしらの線を探るのは筋違いってもんでしよう。金田の組がきれいさっぱりなくなって、シヤブのルートまで掃除してきたとなりや、旦那の仕事はバンバンザイってもんで。それとも、あつしが一枚噛んでいたとでも。」

「あの日、吉田が運んだものはどうした。」

「何のことかわかりやせん。そんでもって挙げられるものだったらあげてもらいやしよう。」

宮路はしばらく加羽沢を睨みつけていた。

「加羽沢、お前のことだから知ってるだろう。この世界はそんなに甘

くはねえ。だれかがいなくなりや、必ずその隙間を埋めるやつが出てくる。まして、こう不自然に消えた者がある時は、必ず裏に何かある。でかい魚がまだ逃げたまんまだ。」

警察は決定的なところをまだつかんでいなかった様だ。

「ま、その辺は、何か気づいたら知らせるってことで勘弁してください。」

宮路はまだ不満そうであったが、それ以上食い下がるネタがないらし。

「吉田のことをよろしくお願えしやす。」

加羽沢は頭を下げると病院を出ていった。

覚醒剤は、昭和二十六年に覚醒剤取締法が制定されるまで、一般の薬局でも家庭薬として売られていた。同じ様に韓国、台湾でも販売され、それは日本の禁止以降も長らく続いていた。日本での使用と販売が禁止され、取引がヤクザの手によって地下に潜行すると、覚醒剤はわか

にその価値を増す。
まず韓国が主要な供給源となった。しかし、その中毒性と副作用はさすがに韓国でも放置できなくなって禁止されると、今度は北朝鮮、台湾のルートが中心となった。特に、日本からの外交上の制限を受けない北朝鮮にとつて、覚醒剤の闇輸出は外貨獲得の貴重な手段であった。

ところが、北朝鮮のミサイル発射事件で二国間の関係が急激に緊張すると、北朝鮮に対する監視と絞めつけは以前にもまして厳しいものとなる。また海路しか使えないことで、北朝鮮からの密輸は、台湾、中国のルートに比べて不利な状況にあった。大量の摘発が相次ぐ。おそろく金田の組の問題もこの辺からの影響を受けたものである。

一方、台湾製の覚醒剤は、チャイナマフィアの日本進出に伴って、様々なルートで密輸されるようになる。大半は小口で観光客を装って入るため、摘発しにくい。人海戦術を使ったアリ作戦である。

実際、ここ数年、覚醒剤使用者の検挙数が増加しているのに対し、譲渡、販売者の検挙数は減少する傾向にある。これは、アリ作戦により、販売ルートと密輸がますます巧妙になって摘発の網の目をくぐるようになったことを示している。覚醒剤の水際の押収量は毎年のように過去最高を記録して一トンを超えているが、それはまだ氷山の一角でしかない。

「俺の親父は、せっかく復員したのにポン中になって死んじまった。だからシャブだけは許すわけにいかねえんだ。」

加羽沢を呼ぶと、親分はポツリといった。

「俺の親父は特攻くずれよ。昔、シャブはヒロポンっていつて疲労回復に軍隊でも配られていた。あれを使えば二、三日寝なくてもぴんぴんし

てられる。敵の中飛び込めといわれたって、平気なくらい度胸がつく。親父はそれでポン中になって帰って来た。

ところが上野は焼け野原。商売っていつてもどうにもならねえ。しかたなく昔の仕入先から位牌仕入れて行商やったんだが、稼ぎまで薬に食われる一方で、がりがりになやせちまった。親父はまだそんな時もヒロポンを疲労回復薬だと思ってたな。体に悪いものを薬局でうるわきやない。そのうち頭がやられて、訳わかんなくなつて栄養状態の悪いところであつという間に衰弱死よ。

今じゃこういつてるが、あんどきやみじめだった。俺が家を出てグレちまったのもその頃だ。お袋もどうやってその頃をしのいでいたのか、今となつちやあもうわからねえが。しかし、後になって、それもこれも薬のせいつてわかつたときはもう遅かつた。ヤクザに罪滅ぼしもねえが、おれももうそう長くはねえ。せめて俺の関わるどころじゃ、ヤクがらみの話は意地んなつてつぶしてやりてえとそう思うんだ。」

歳とつて涙腺がゆるくなつたせい、ここら辺で親分は目じりをぬぐい、チクシヨウメと鼻をすすつた。

「め組の頭の話じゃ、光子は今度あ中国人と付き合つてゐるそうだ。この辺にできたシャブの隙間を埋めるのはたぶん光子だろう。」

「あつしもおぼろげながらそういらんでおりやした。するつてえと、吉田を弾いたのは、姐さんと中国の連中で。」

「たぶんな。もうお前にも光子の考えていることがわかるだろう。吉田を弾くことで金の組がつぶれ、日東会の客が手に入った。しかも警察の手が入つて、日東会は動けなくなる。自分は、新しいシャブの供給源と結んでその保護を受ける。」

「金田の組と日東会、それにあつしらまで引つ張り込んでおいて、その間に自分はどんどん大きくなる。つくづく姐さんは頭がいい。」

「しかし、あいつは、ヤクザでも中国人でもねえ。あんまし調子にのるとこの先そう長生きはできねえだろう。征二、だから、これは俺からの頼みだ。この辺で光子をなんとかしてやつてくれ。」

「姐さんは、今どこに。」

「新宿だ。しかし、中国の連中のシマは複雑怪奇で、そこから先がどうもよくわからねえ。」

新宿歌舞伎町。わずか五百メートルの半径の中で、人間のあらゆる欲望の坩堝となっている町。その中にもうひとつ、中国人達の闇の世界があるという。

古くは台湾系のマフィアが台頭していたが、しだいに大陸から来た中国人のグループが置き換わろうとしている。マフィアと呼ばれているが、その実態は同郷人が小規模の組に分かれて緩やかな繋がりを持つだけのもの、集団としての捉えどころがない。名簿までできている日本の

暴力団組員と違い、警察もなかなかその組織を判明できずにいる。

不法滞在により捕まれば強制送還を免れないという人間達が、日本で生きていくならば、おのずとその方法は限られてくる。中には本国で何らかの罪を犯し、そのために日本に逃れてきた者もいる。潜伏すること、そして捕まりそうになれば、必死で抵抗すること。そうしなければ生きていけない。現に台湾の殺人犯が日本に逃れ、新宿で自分を捕まえようとした警察官を射殺したことがある。

中国本土では、人間の命が安い。死刑の適用は日本では考えられないような微罪にまで及ぶ。たとえば麻薬だ。したがって犯罪者の命のかけ方、体の張り方は、その覚悟からして違ってくる。

一方で、暴対法により骨抜きにされ、目立った動きも取れない日本のヤクザは、その地位を脅かされている。中国人に縄張りを侵されても有効な対抗手段がない。向こうから来た中国人の集団に、日本のヤクザが道を譲っていたという冗談ともつかない噂が、最近の歌舞伎町までことしやかに流されている。

十一時を過ぎ、酔客の流れが新宿駅に向かい始めた頃、加羽沢は歌舞伎町にいた。目当ては一軒の中華料理屋であった。新宿区役所の裏手にあるその店は、そろそろ店じまいにかかろうとしていた。

「お客さん、悪いけど今日はもうおしまいね」。

白いシャツにエプロンをかけた中年の店主が愛想よくいう。

「手間はとらせねえ。郭さんの居場所をしりてえんだ。」

親分の昔の知り合いの名を加羽沢は告げた。

「郭さん。台湾の人なら、郭さんはたくさんいるからね。」

「台湾マフィアの元締め郭さんだ。」

「あなた、怖いこというね。そんな人、私知らないよ。」

店主の顔色が変わった。

「ここへ来ればわかるって聞いたんだ。」

「知らないもんは知らないよ。あなた、へんなこというと警察呼ぶよ。」

私、ヤクザに知り合いないよ。」

厨房から若い男が二人出てきた。どういわけか包丁を握っている。

「悪かったな。じゃまたあらためて来る。」

加羽沢はひとまず退散することにした。台湾マフィアと聞いたとたん雲息が怪しくなった。何かあると踏んだが、まだ事を起こす訳にはいかない。親分の昔のつてはいささか心もとなかった。

コマ劇場に向かう途中、加羽沢はいくつかの店をのぞいてみた。しかし、予想通りまともな反応は何も無かった。それどころか、中国人はすっかりこの町に溶け込んでいて外側からだけは判断がつかない。中華料理店はともかく、カードゲームの店などは、ほとんどが中国人の経営と聞いていたが、雇われている店員は日本人ばかりで、加羽沢の問いにも首を

かしげるだけだった。この町に中国人の世界など存在しないかのようである。

終電が近くなると、町にいる人間の様相が変わってくる。ビルの入り口では、ホステスがさかんに客を送り出し、背広姿のサラリーマンがしだいにその姿を消してゆく。ラフな服装の若者の数が逆に目立ち始め、注意してみるとポン引きやそれと思しき女の姿も見える。取り残された酔客の上げる大声が響き、赤や黄色のネオンサインは、道行く人にまだ夜が続くことを訴えるかのようである。

加羽沢のもう一軒の目当ては、台湾バーであった。

雑居ビルの狭いエレベーターには、客を送り出した後のオカマが乗っていた。一仕事終えたせいで化粧が落ちて、もとの男に戻りかけている。視線が合うと目を大きく開いて笑った。顔に笑い皺が濃く浮き出した。香水と建物のすえたような匂いが入り混じっている。

二階で降りると目の前の看板がその台湾バーであった。

中は、思っていたより広く、そして暗かった。フロアを中心に小さなステージが突き出していて、それを囲むように椅子とテーブルが並べられている。背もたれの高い椅子は、向かい合わないように配置され、独立した微妙な空間を保っている。カラオケのセットがステージに置いてあるが、だれかが使っていた様子は無い。青いスポットライトがステージを照らし、ミラーボールとテーブルに灯された小さなロウソクが店の明かりの全てだった。

「いらっしやいませー。」

元気な声がかかる。バックに流れているジャズの音が大きすぎるせいかもしれない。時々ホステスの上げる嬌声が聞こえるが、暗闇に慣れない目に、客の入りはよくわからない。

チャイナドレスのホステスが加羽沢を席へと案内した。青い光に白い腕が輝いて見える。

「いらっしやいませー。」

となりの椅子に黒のチャイナドレスが座った。胸の辺りでспанコールの縫い取りがきらきらと光っている。

「お客さん、ここ初めて。」

ワゴンでウイスキーが運ばれると、断りも無く封が切られた。手早く水割りを作られる。

「じゃ、かんぱーい。」

濃いマスカラと赤みの強い口紅。照明のせいで白い肌がいつそう白く見える。アーモンド型の目が愛らしい。全体には、なかなかの美形かもしれない。

「わたし、玲玉です。みんなリンドラっていうよ。」

「いくつだ。」

「もうおばあさん。二十八。」

「どつから来てるんだい。」

「わたし、台湾。」

急いで追いかけてはならないと加羽沢は自分に言い聞かせた。

「もう、ここは長いのかい。」

「長いよー。ママさん一番だけど、わたし二番め。」

「台湾の娘は、たくさんいるのかい。」

「たくさんいたけど、いま、わたしだけ。香港、上海の娘、たくさんいるよ。みんな日本語話せなくてもくるよ。ほかの娘、台湾のことば話せない。わたし上海のことば話せない。たいへんよ。」

大きな声を出さなければならぬせか、玲玉は勢い込んだようにしゃべる。

斜め前の席から笑い声がして、ホステスの影が浮かび上がった。からだをのけぞらせた黒いシルエツトが青いバックライトの中で上下している。何かが始まっているらしい。

「あの娘たち、ばか。」

玲玉の眉が上がる。

「上海、大きいから、他から来た娘、みんな田舎もんで思っている。自分達が他知らないこと、知らない。だから友達できない。上海人みんな上海人で集まってるのもいっしょよ。」

上海から来た娘となにかあったらしい。そこまでしゃべると、玲玉は下唇をつき出したまま黙ってしまった。ハンドバックから細巻きのタバコを出して勧めた。加羽沢が手を振って断ると自分で啜えて火を点けた。

「台湾の友達はいねえのかい。」

「うん、いるよ。だけど、少ない。バブルの時、みんな帰った。その時、台湾景気よかった。でももうだめね。」

「お前さんもなんでそんな時帰らなかったんだい。」

「それは、いろいろよ。」

「台湾に家族はいるんだろう。」

「いるよー。」

その時、斜め前の席から悲鳴が上がった。ホステスが弾き飛ばされ、何かが割れる音がした。逆光の中に男の影が立ちあがった。腹の突き出た猪首の男だった。男はホステスの胸元をつかんで引き上げ、拳を振り上げて殴ろうとした。今度は別の場所から悲鳴が聞こえた。加羽沢は、後ろから近づいて男の右腕をつかんだ。

「あんまし、おだやかじゃねえな。」

男は酒くさい息を撒き散らしながら加羽沢にかかってきた。動きは鈍い。加羽沢の手がすつと男に伸び、のど仏を捕らえると、指を立てるようにして握りつぶした。男は声にならない叫びをあげ、加羽沢の手をはずそうともがいた。

照明が点り、ステージの奥のカーテンから、若い男が二人飛び出してき

た。加羽沢が手をはなすと、二人は後ろから襟首を捕らえて、むせて苦しがる男をあつという間にどこかへ連れ去った。あちこちに立っていた客とホステスが自分達の席に戻り始めた。

右肩に誰かが寄り添うのを感じた。玲玉は、加羽沢の腕を取り、自分の腕を絡ませた。明るい照明の下で、玲玉の姿はひとまわり小さく見えた。

「…お客さん、強いね。」

玲玉がかすれた声でささやくと、照明が暗くなり、また音楽が流れ出した。

「あいつ、福建人よ。金もって来る。女の子気に入らない。すぐ殴る。」

玲玉は体をぴったりと寄せてきた。何かの花の香りがした。

「お客さん。私とデートしよう。店に一万円、私に三万円払う。あなた私を二時間好きにできる。」

行く当ても無かったので、玲玉に従った。足は新大久保の方に向かっていた。

「むかし、うちの店、売り無かった。でも上海の娘、日本語話せない。だからすぐ売る。いつ入管、捕まるかわからない。だから急いで金稼ぐ。すぐ売る。店、儲かる。ママさんわたしに売れいう。だけど、わたし売り嫌いよ。」

外に出ると玲玉は快活を失い、日本語も急にたどたどしくなった。加羽沢の腕を抱きながら、自分に語りかけるようにぼつりぼつりと話す。

「だけど、お客さん、いい人ね。だからいいよ。一万五千円でいいよ。店の人デートのこと知ってる。私借金返す。だから一万五千円だけいいよ。いいよね。」

いつの間にかホテルの前に着いていた。

「いいか、こいつは金だ。取っておきな。それから、俺には、自分のきれいなことを無理矢理することはねえ。だが、ひとつだけ聞きてえことがあるんだ。台湾のかくさんのことだ。」

「なにそれ。」

「台湾マフィアの元締め郭さんだ。郭さんの居場所を知りてえんだ。」

「わたし、知らないよ。台湾にマフィアないよ。お客さん、そんなこと聞いてはだめよ。」

「迷惑はかけねえ。知ってるところを教えてくださいいいんだ。」

玲玉が腕を振り解こうとしたので、加羽沢は思わず手首をつかんだ。「お客さん、痛いよ。やめてよ。」

突然、手の甲で何かが光った。少し遅れて血が流れ出した。すぐ側に男が立っていた。まったく気配を感じないうちに後ろを取られていたようだ。手には細身の両刃ナイフが握られている。斬ることよりも刺すこと

を狙っているらしい。相手はまちがいになくその道のプロだった。

間合いを取ろうと一歩下がると、男は玲玉の間にすつと割って入った。まだ若い男だった。長い前髪で、目の周りに赤いあざがあった。

玲玉が中国語で何か叫んでいる。何秒かあって、男は玲玉に視線を移すと、不満そうにナイフを皮のケースに収め、戦闘服のようなジャケツトの内側にしまった。

「ごめんね、お客さん。ごめんね…。」

玲玉がいった。加羽沢の手の甲からは、血が滴り落ちていた。玲玉は駆け寄るとハンドバックからハンカチを取り出して加羽沢の手に巻いた。目には涙が浮かんでいた。

男に促されて、玲玉は暗がりの中にまた帰っていった。

それからも加羽沢は、歌舞伎町詣でを繰り返していた。台湾の出身者に出会う事は少なく、また一様に口が堅かった。ヤクザと思しき中国人は、上海の出身者が多いらしい。しかし、人数が多いせいもあるのだろう同じ連中に繰り返し出会うことは極端に少なかった。

「ムショの中で聞いた話じゃ、新宿はもう大陸系の中国人の縄張りだそうだ。上海が中心で、福建の連中は池袋辺りをおさえてる。だが、シヤブというと大陸じゃなかなか作れねえんで台湾がからんでくる。とはいうものの、台湾の組織もいろいろあってな。大陸とのからみでどうなっているのかわからねえ。」

め組の頭の方も調べてくれているが、あつちはあつちで手間がかかっている。

中国人の陰で小さくなっているが、もともと新宿は関東連合の縄張りだ。そっちには俺の方で仁義を切っておくんで何かわかったら教えてくれるだろう。」

二十年も前なら、中国マフィアといえれば台湾の連中が仕切っていた。東京のみならず横浜、大阪、神戸と古くからの日本に繋がっていることで、台湾系の組織は日本の闇組織ともうまく共存していた。しかし、本国で組織犯罪の摘発と取締りが強化され、日本のバブルが崩壊すると、台湾系の組織は一挙に基盤を失う。一方で流れ込んでくる大陸系の組織に対抗するために、台湾系のマフィアは生き残りをかけて自分達の組織を再編したらしい。潜伏した外国人の組織を探り当てるとなると、さすがに親分のつてもあまり役には立たないようだ。

歌舞伎町の路地を歩き回り聞き込みを始めたことで、逆にガードが固くなったような気がした。加羽沢の動きはもう伝わるべきところに届いているはずだ。時々どこからか視線を感じるころがあるので、おそらく隠れて見張りがついているのだろう。

もともとヤクザはヤクザの血を嗅ぎ分けることができる。台湾人マフィアの間で加羽沢の行動は、どう考えても穏やかではないだろう。その

うちに向こうから何らか動きがあることを期待して、加羽沢は歌舞伎町詣でを続けていた。

やつらは突然やって来た。ゴールデン街の入り口から人がばらばらと飛び出すと、手に手に木刀を持って襲ってきた。幸い第一撃は、それで肩口を掠めた。前のめりになったやつを後ろから捕まえて反対側に放り出し、店を背にして立った。すぐに正面から切り込んで来たやつをかるうじてよけると、木刀が店のガラス戸を音を立てて打ち破った。加羽沢は、木刀を脇の下に抱え込み、反対の腕の肘で相手の頬を打った。歯の折れるいやな音がした。後ろに転んだ拍子に手が離れ、木刀が地面に落ちた。加羽沢はそれを拾うと、ゆっくりと正眼に構えた。

酔客が何人かこちらを見ているのに、やつらはまったくお構い無しだった。奇妙なことにだれも声を立てない。口をきけば中国人であることが周りにわかるせいだろうか。相手は五人いた。しかし、長いものを振って一人を襲うには人数が多過ぎたようだ。最初から刃物を使わなかったのは、ただの脅しのつもりなのだろう。加羽沢がそう思って安心していると、横の方で何かが風を切る音がした。とっさにしゃがみこむと、頭の上を何かが回転して通り過ぎ、後ろの壁に音を立てて深々と刺さった。見ると、何と手斧だった。

「くそつ、本気かよ。」

しかし、相手の攻撃が協調性を欠いたために、加羽沢は貴重な時間を稼いでいた。そのうちにようやく遠くの方からサイレンの音が鳴り出すと、やつらは現れたときと同じように唐突に消えていった。加羽沢のメッセージは十分に伝わっていたようだ。

真夜中を過ぎていた。寒の戻りのせいだろうか、空はよく晴れて月が煌々と輝いていた。さすがにあの警告を無視するわけにもいかず、狭い路地はできるだけ避けて通った。これまでに知った中華料理屋の一軒に入ると、湯麵を取ってゆっくりと食べた。厨房のほうから視線を感じたので、しつかりとガンを飛ばしてやった。あのくらいの脅しでは、まだ諦めていないというメッセージである。

しかし、外に出ると、加羽沢はいぜん歌舞伎町の雑踏の中で孤立していた。人の流れにさからいながら、行く当てもなく風林会館の方に向かった。

駐車場にばらばらと人が走り出して来た。今度は別の誰かが追われているようだ。新宿も物騒になったものだ。灯りの中で一人が転ぶと、数人が寄ってたかって足蹴にし始めた。そいつを助けようと集団の中に飛び込んだやつがいた。ナイフが抜かれていた。ただの喧嘩ではない。

すでに野次馬がおおぜい集まり始めていた。歌舞伎町は、このような喧嘩に慣れてしまったのだろうか。

「なんだ、なんだ。ここを何処だと思つてやがんだ。」
突然の大声で、一瞬辺りの動きが止まった。ヤクザが三人乗り込んできていた。

「ケツ、なんだい中国人の喧嘩かよ。」
ヤクザはとたんに興味をなくしたようだ。もはや止めるつもりもないらしい。もつとも三人では中国人の集団を相手にたいしてできることもなかっただろう。だから一応、自分達の縄張りであることを示そうとしただけだ。

この隙に倒れていたやつがうまく逃げおおせた。しかし、後から飛び込んだ方が羽交い締めになれ、周りを囲まれてしまった。新手が加わり、中に青龍刀を持った者の姿があった。

「危ねえ……」

羽交い締めになれた男に正面から一太刀浴びせようと構えたところで、加羽沢は電柱の下にあつたごみバケツを投げた。大きな音がしてバケツがごみを撒き散らしながら転がった。一瞬遅く、青龍刀が振り下ろされて、羽交い締めになれた男がのけぞった。

「わおーっ。」

加羽沢は、大声を出しながら次々にごみバケツを投げた。バケツがなくなるまでそこいらにあつたものを手当たり次第に投げつけた。

その時、遠くからサイレンの音が聞こえてきた。男は放り出され、集団は瞬く間にどこかへ散つて行った。

駐車場のコンクリートの上に残された男は腹の辺りを切られていた。アーミージャケットと厚手のネルシャツがかなり傷を防いでいたが、すでに血がズボンの方に流れ出していた。男の腕がゆっくりと上がり、加羽沢に差し出された。助けて欲しいらしい。加羽沢は、男を背負うと野次馬の間を抜けて北に向かった。

男は意外に小柄で軽かった。一言も発せず、行き先を指差して示した。新大久保の駅に向かう住宅街の一角に、さびれた町医者看板が出ていた。ペンキの剥げたガラスかまちのドアに百武医院と書いてあった。

昔ながらの呼び鈴のボタンを押したが、だれも出てくる様子はない。しかたなく加羽沢は扉をたたいた。立て付けの悪いドアはがんがんと鳴り響いた。加羽沢はかまわずたたき続けた。開くまで止めないつもりだった。

しばらくして、中に小さな灯りが点ると、ドアが細めに開いて、面長の老人の顔が現れた。

「先生か。こんな時間にすまねえが、診てやってくれねえか。」

老人は背負われた男を見てうなづくと、中に入るように手で示した。瘦せた老人は、パジャマに毛糸のカーディガンを羽織っていた。

診察室には大きな机があり、埃の積もったカルテが散乱していた。医

者は、黒いビニール張りの診察台を指差すと、自分はすり足のままよぼよぼと歩いて煮沸器に火をつけた。白衣を着て、台の上の琺瑯の洗面器で手を洗うと、ゴム手袋をはめた。トレーの上に道具を集め、カチャカチャと音を立てている。

「あなた、あなた。」

医者が初めて口をきいた。

「あなた、これやってくれませんか。」

しわがれて震える声だった。

トレーの上には、手術用の針が並んでいた。糸を通せということらしい。加羽沢が糸で針穴を探っていると、医者も口を開けてそれを見ている。

診察台に寝かされた男の服を脱がせた。医者は、ピンセットでつまんだ脱脂綿に消毒液を含ませると丁寧に傷口を洗った。男の顔が苦痛でゆがんだ。

「腹膜は大丈夫。」

医者は顔をくつつけるようにして傷口を観察すると、ひとことそう呟いた。

「あなた、あなた。」

加羽沢を呼び、ないしょ話のように手で口を覆いながらいった。

「薬やつてるかもしれないから、麻酔なしでやります。」

足を診察台に包帯で固定して、上半身を加羽沢が押さえることになった。ちょうどレスリングのフォールのように、加羽沢は男の上半身に上のほうから覆い被さった。傷の部分を残して白い布をかけると、医者は男の腰の上にまたがり、目で行くぞという合図をよこした。針とはさみを持つ手がわなわなと震えている。加羽沢の頭に一瞬不安がよぎった。

「ええい。」

腹の底から絞り出すような気合いだった。男の体が加羽沢の下で跳ね上がった時には、目の前で太目の針と糸がつうと傷口の皮膚と肉を通り、それを医者がそそくさと結んでいた。再び医者の目がきらりと光る。

「ええい。」

つごう十五回、この「ええい」を聞かされた。

「南方では、こんなのあたりまえでした。」

医者がこともなげにいう。

お陰で加羽沢はふらふらだった。気がつくくと、男の方も加羽沢の下で汗だくになってのびていた。長い前髪が額に貼りついて、目の周りに赤い痣が現われた。

医者がガーゼを傷口に留めている時、男の上着の中で携帯電話のベルが鳴った。男は気が付いたらしく、加羽沢が渡してやると中国語で話し始めた。

しばらくして、男が携帯電話を差し出すので、加羽沢は受け取るに当てた。

「お客さん、弟をありがとう。」

聞き覚えのある女の声は、玲玉だった。

玲玉の弟は、台湾で人を殺していた。自分の組からも追われるような事件だったらしい。弟を日本に逃がすために玲玉は借金を背負った。組と台湾警察の両方から逃れるために、借金の額は半端ではなかった。だから玲玉はもう台湾に帰ることができない。弟も、そのような状態で日本に來た所で、まともな職に付けるはずもない。結局また裏の世界で用心棒となるのが精一杯だった。借金のカタには、両親が押さえられている。いつでも台湾から脅しが入る。台湾マフィアの本当の恐ろしさは、台湾の人間でないとわからないと玲玉はいう。

「わたし、何もできないから、お客さんの知りたかったこと教えません。」

翌日、玲玉から指示されたとおり、加羽沢はコマ劇場の前に立った。昼間の歌舞伎町は別の顔をしている。通勤時間とあって、西武新宿から勤め人風の男や〇〇が区役所通りの方向に流れていく。カラスが電線に止まり加羽沢を見下ろしている。どこからか監視されているような気がしたが、自分に向けられた視線を捕らえることはできなかった。

突然、加羽沢の後ろに男が立った。男は加羽沢の手の中に何かを押し付けると、何もいわずに去っていった。男の後姿はすぐに人ごみの中に紛れていった。紙には、大久保にあるマンションが指定されていた。

大久保の駅で総武線を降り、指示された方角に歩いてみると、線路沿いにある鉄筋の建物が見えてきた。一階入り口の郵便受けには表札が出てないので、加羽沢は管理人室を訪ねた。

「台湾の郭さんてえ人に会いたいんだが。」

中から眼鏡をかけた背の高い老人が出てきた。

「郭さん。ああ、郭なら私ですが。」

管理人の老人がにこやかにいう。

「どうしました。中国人の男というと閻魔様か鍾馗様みたいな格好でもしてないといけませんかな。ま、お入りなさい。」

驚いた加羽沢の顔を見て、郭さんは事もなげにいった。管理人室の台所で、パイプの椅子に座ると、黄さんはきゆうすでお茶を入れてくれた。

「上野のトンちゃんでしょう。はい覚えていますよ。最後に会ったのはもうだいぶ前のことですが、たしかにお世話になっています。あ、そういえば、私の国の者がお世話になったそうで、ありがとうございます。」

歌舞伎町で私の事を探している人がいるというので、そろそろ誰かが訪ねて来るかと思っていましたよ。」

まったく淀みのない日本語で、加羽沢には外人と思えなかった。

「本当に郭さんで…。」

「あなたが私について何を聞いているのか知りませんが、たぶん私がそうでしょう。」

名前さえ聞かなければ、どう見てもそこらにいる品のいい爺さんだ。

「日本語は…。」

「まだお若いからご存知ないのでしょね。でも、戦前の日本で教育を受けた人間はこれが普通なんですよ。私はこれでも途中まで東大に行ってたんですよ。物理学をやっていました。もうちよつとで学徒動員になつて兵隊に取られるところで終戦でした。」

郭さんは、ショートホープを取り出すと美味そうに燻らした。

「台湾マフィアの。」

「いや、それはもう引退しました。日本のヤクザの方は引退しないのかもしれないませんが、私はもう十分働いたと思つて。だから今はこんな生活しています。」

「するつてえと、跡目を誰かに。」

「その辺が、日本のヤクザと違うんですね。確かに黒の社会というのがあるのですが、台湾マフィアと呼んで、全部の組織をひとつに括つてしまふのが誤解のもとです。少なくとも私の組織は、もう表立つて活動してません。でなければ、こんな生活していませんよ。」

郭さんの着ているセーターはどこか古びていて、ズボンも膝が飛び出している。

「じゃ、台湾マフィアの組織は消えちまったと。」

「そうじゃありません。組はいくつにも分かれてましたので、まだ活動しているところもあります。ただ、新宿辺りでチンピラみたいなことをするのは外省の人間にまかせて、台湾の人はもう少し頭のいいことをしていますよ。経済の方に力を入れてるといえばわかりますか。だから逆に、大陸から来た連中が悪さをすると、私達のビジネスも非常にダメージを受けます。同じ中国人でもいっしょにして欲しくないというのが本音ですね。」

「でも、台湾の人は今でも台湾マフィアを怖がっている。」

「それは、個人的な利害があるからです。台湾で食い詰めて日本に来るような連中は、たしかにいろいろあるでしょう。でも、お金を借りて返さなかったら、日本のサラ金だつて怖いでしょう。」

キツネにつままれたような話に、加羽沢はどう対応したらよいかわからなくなつた。

「で、あなたがわざわざ私を探して来られたのは。」

加羽沢は、これまでの光子の話をした。

「なるほど、覚醒剤ですね。で、光子さんの居場所を知りたいと。」
郭さんは考え込んだ。

「なるほど覚醒剤は、台湾の南の方の組織が関わっているかもしれません。でも、日本と直接取引をするなら、私も何か聞いているはずですから、きつと上海や香港の連中が間で絡んでいるのでしよう。」

光子さんの件は調べておきます。連絡先を教えておいて下さい。」
郭さんは何かを思いついたようだった。

「で、今回は、色々お世話になりましたし、そちらの親分さんのことでもありますので、ビジネスの話はなしにします。でも、次回からは、台湾のネットワークが絡むと、そうはいかないかもしれません。このことを覚えておいてください。」

眼鏡の奥で郭さんの目がきらりと光った。

この時、管理人事務所の電話が鳴ったので、加羽沢は電話中の郭さんに向かって一礼するとマンションを後にした。

翌日、親分の家に郭さんから連絡があり、光子の居所がわかった。西新宿。華光貿易という会社で、光子は社長に納まっていた。郭さんのついで、すでに先方には連絡が届いているという。やはり中国人の連中は裏でどこか繋がっているらしい。

京王プラザホテルの並びにある高層ビルの十階でエレベーターを降りると、ガラスの扉の奥に受付があった。金色の文字で華光貿易と書いてある。インタホンのスイッチを押すと、中の受付の女性が受話器を取るのが見えた。

「社長に用がある。加羽沢が来たといってくれ。」

「加羽沢様ですね。」

しばらくして、ガラスの扉が開いた。

「こちらでお待ちください。」

加羽沢は、廊下の奥の応接室に通された。ベージュ色の革張りのソファが置かれ、マホガニーのキャビネットが設えてある。壁には赤い富士山のような山の油絵が掛かっていた。大きな窓のブラインドの隙間からは、西日が差していた。天井の隅にはモニターカメラがあって、こちらをにらんでいた。

部屋の向こうのドアが開くと、紺の背広を着た若い男が二人入ってきた。

「すみませんが、ちょっとお立ちになっていただけませんか。」

両脇を固めると、片方がいった。加羽沢が立ち上がると、胸から始まり背中から足首まで素早く手が動いてチェックした。もう一方は終始、加羽沢の目を睨みつけていた。いかつい体で、よく見ると耳がつぶれている。殴り合いとなるといっさか苦戦しそうだった。

男達が出て行くと、入れ違いに着物を着た女が入ってきた。光子だっ

た。

「征さん、お久しぶりじゃない。征さんの方から訪ねて来るなんて、感激よ。」

藤色の着物に合わせるように、明るく染めた髪が結ってあった。上品にまとめているが、気のせいか、やはりもとの水商売の色が残っている。社長というよりも、クラブのママに返り咲いたような雰囲気である。

光子が椅子に座ると、ピンク色のスーツを着た若い娘がコーヒーを運んできた。

光子は少し痩せたようだった。もとはといえば肉付きのよい方で、顔も、どちらかといえば丸顔であった。今は頬がこけて、頬骨の下に陰が強く出ている。目の下にもうつすらと隈があり、目が少し落ち窪んだように見えた。

しかし、それが全体の色の白さと相まって、むしろ彫りが深まり、あらゆる妖艶な美しさを醸し出すようになっていた。

「えらく繁盛されているようですよ。」

「そんなことないわよ。一見豪華だけど、ビルも家具も借り物だもの。個人的にも仕事が忙しくなっただけで、ちっとも儲からないわ。くたびれるだけで、本当に社長なんてやるもんじゃないわよ。」

光子は早口でしゃべった。

「香港の財閥系の商社と組んだの。今じゃ雑貨と飲料の輸入をやっているわ。今度、漢方薬入りの清涼飲料水を開発して自分のブランドで売るのは取ったの。それがわたしの本格的な仕事の始まりってわけ。」

動きが妙に落ち着かない。光子の手は、置き場に迷うように、絶えず着物の襟元をいじっていた。

「それより、今度の仕事。できればまた、征さんと組みたいな。あれだけ冷たくされると、逆に忘れられなくなってしまうのわかるかしら。あらいやだ、私ってマズだったようね。」

光子は大げさに笑った。手を口元にもっていくと、袖口から白い腕が現われた。やはりそれは、だいぶ細くなったように思えた。

「征さん、これあたしの新しい名刺。雇われ社長だけど、あたしと仕事をしたくなったら、いつでも知らせて。」

「へえ。」

「でも、征さんってわからないわ。鈍いのかなんなのか。やっぱり私に魅力がなかったってことなのかしら。」

「めっそもねえ。」

「だったらどうして気付いてくれなかったのよ。」

ぴしゃりというと、いきなり光子の表情が怒りに変わった。眉がつりあがり、目が大きく見開かれて光った。

「征さんなら、わかってくれると思った。征さんなら、あたしをこの世

界から救い出してくれると思った。征さんなら……。」

ことばが途切れると、光子の目から大粒の涙が流れ出した。

「あたし、征さんのこと、好きだった……。」

唇が振るえ、袂を顔に当てると、光子はひとしきり泣いた。

「ばかね。あたし、なんてこと話しているんだろう。」

光子は、ちらりとモニターカメラに目をやりながらいった。

「ここまで来たらもう後悔しないの。やれるところまでやってやるわ。」

「姐さんのこと、親分がずっと心配しておりやす。」

「冗談じゃないわ、あんな爺い。」

光子は、吐き捨てるようにいった。

「最初は頼りがいのある人かと思った。あたしは強い男が好きなの。自分が惚れてついて行きたかったの。たけど、あたしも若かったのね。ヤクザの親分だって、ただの男よ。人前じゃかっこつけて威張っているけど、二人つきりになればただの子供。東映のヤクザ映画とはえらい違いよ。」

「そりや、まあ。」

「はいトンちゃん、きょうはいいこでちたか。トンちゃん、ママがおっぱいあげまちゅよ。こんなの、いつまでやってられると思う。」

「いや……。」

「あたしも自分がプロだと思ってた。だから、相手に合わせて色んな女を演じたわ。でもそんなの一生続ける訳にいかないの。そのうちに決まって、あたしを恋愛の対象と勘違いし始める。馬鹿いっちゃいけないわ。あたしがあんな爺いに惚れると思って。」

また光子が激昂し始めた。

「征さん、知ってる。輪ゴムよ。輪ゴム。あたしが立ててあげると、根っこにはめるの。それで終わったあとは、必ず聞くのよ。おまえ、そんなによかったかいつて。」

はらはらと涙がこぼれ落ちた。光子はもうぬぐおうともしなかった。

「征さん、わかる、わたしの気持ち……。」

「……。」

光子は立ち上がると身を投げるように加羽沢に抱きついた。

「征さん、助けて。」

覗き込むと、光子の瞳が震えていた。何かおかしい。やはり、シヤブに犯されているようだった。

「姐さん、あつしといっしょに行きやしよう。」

「何処へ。」

「何処へって……。」

光子は体を起こすと、簪を抜いた。髪がはらりと解けて散った。

「征さん。」

光子の吐息が頬にかかった。腕が首に回され、ひしと力が入った。唇が重なった。

光子の舌が唇の上をさ迷う。光子の目が、加羽沢の目を覗き込み、しきりに問いかけている。

「なぜ…。」

加羽沢は光子を振りほどき立ち上がった。

「姐さん、姐さんは、悪い夢を見ているんで。」

光子はソファーに崩れたままだった。

「嘘つき…。」

嗚咽が洩れると、泣き声に変わった。

「征さん、ヤクザ辞めたんでしょ。いったい何のために忠義立てしてるのよ。あたしは、誰の女でもないわ。あたしには、愛される資格はないの。」

「これだけはわかってくださいませ。あつしは、姐さんのことを救いてえと思っております。」

「わからないわよ。絶対にわからない。」

「姐さん、あつしに付いてきちゃくれませんか。」

「無理ね…。」

最後に向けられたのは、憎しみのこもった目だった。冷たい風が光子の方から吹いてくるような憎悪だった。きれいな顔が、どうすればこのように酷薄な表情に変わるのか。光子の口の右端が上がった。

髪を掻き上げて立ち上がると、襟元を直し、光子は何処へとなくいった。

「お客様がお帰りよ。」

最初の男が二人入って来た。さらに、ドアをくぐるようにして、巨大な男が一人、入って来た。いつかの大男だった。嬉しそうな顔を加羽沢に向ける。顔中の傷も以前のままだった。

「二度とここに来れないようにしてあげて。」

冷ややかな声に、男達が加羽沢を取り囲むと、光子は部屋を出て行った。

男二人が両脇から腕を捕らえると、大男が正面に立った。大男の動きは鈍かったが、加羽沢はよける訳にはいかなかった。一発目のボディブローは、身長差のせいか、上の方に外れて肋骨をしたたか打った。ダメージは少なかつたものの、かなり痛んだ。どこかにひびが入ったかもしれない。しかし、腹をやられるよりはいくらかましだった。殺す気がないのなら、一発でノックアウトさせて欲しいと加羽沢は思った。ようやくでかい拳のアップパーカットが入り、加羽沢の意識が遠のいていった。

気が付くと、路地裏でゴミ箱のとなりに捨てられていた。肋骨が痛み、あごが痺れていたが、覚悟していたほどのダメージは無かった。あの馬

鹿力を全部まともに受け止めていたらいくつ身体があつても足りない。身体を起こすと何とか立ち上がることができた。

見上げると光子のいたビルが夜空に聳え立っていた。歌舞伎町さながらに、新宿の高層ビルも夜がふけるのを知らぬようだった。

光子のいったことがほんの少し頭の奥に引っかかっていた。いつの間にか、ほれたはれたを解さないようになっていた。そんなこととは無縁の世界にいた。それがヤクザだと加羽沢は思っていた。痛む肋骨を撫でながら、加羽沢は上野に帰ることにした。

「そうか…。光子はそんなになつていたか。」

「あつしが至りませんで。」

「いや、せいもかなわねえだろう。」

親分は腕組みをしながら、ちゃぶ台の上の電灯を見上げると目を閉じた。

「思えば、あいつも可愛そうなやつよ。」

親分が語り出した。

「光子は継子だったそうだ。母親は、地方のいい家の出だったが、亭主に先立たれて、しかたなく光子を連れて後妻に行ったらしい。光子がまだ赤ん坊の時の話で、相手は、東大出の公務員。光子はそいつとなんかあつたようだ。嘘か本当か知らねえが、最初の男がその義理の父親って話だった。まあ、割とよくある話で、光子のことだ。どこまで自分を語っているのかわからねえが、その後の光子の事を考えると、不幸な生い立ちってえのは、わかるような気がする。」

婆さんが徳利に入った酒とスルメを持ってきた。

「おめえもご苦労だったな。ま、何もねえがこれでも飲んでいってくれ。」

親分は自分の杯を取ろうとしなかった。

「悪いがムシヨにいる間、酒を一滴も飲まなかったせいで、飲むとえらく酔っぱらっちゃうんだ。今晚俺の方は遠慮させてもらう。」

好きか嫌いかは別にして、酒を飲むことはヤクザの家業の一つである。普段なら身体を張っても飲むというのが親分だった。歳を取ってからの刑務所暮らしは、よほど身体にこたえたらしい。婆さんが、また何かを運んできた。

「蜷の味噌汁だ。今の俺にはこいつが一番よ。」

熱い味噌汁をすすりながら親分がいった。心なしか、親分もだいぶ疲れているように見えた。

「久々にまた木暮の先生でも呼んでもらおうか。」

親分は、何か考え付いたらしい。

翌日、天才ドクター木暮は簡単に見つかった。一日の大半をパソコン

の前で過ごしているのだから、居場所はすぐにわかる。その日の昼過ぎ、木暮は親分の家に姿を現わした。両手にパソコンとなにやら得体の知らない機械を重そうに引き下げていた。相変わらず頭はぼさぼさで、汚いTシャツを着ている。

木暮は、なんと吉田を連れていた。

「なんだ、もうすっかりいいのか。」

「病院にいてもいいことないし、そろそろ復活しないと後期の試験に間に合わなくなります。体力を回復するってことで、外泊許可をもらいました。」

病み上がりの顔はまだ青白いが、思ったより元気そうである。

「いい面構えになった。きつといいヤクザになれるぞ。」

「よしてくだいよ。」

親分の冗談に、吉田は照れたように笑った。

「俺の考えじゃ、まずは情報収集だ。」

ちやぶ台を囲んで親分がまず口火を切った。

「光子の名刺で、どこに何するかはわかるだろう。」

「メールアドレスがあるので、試してみます。まだ出来たばかりの会社なら、パソコンにそう嚴重なセキュリティをかけていないでしょう。普通のメールソフトなら、十分ハックできます。」

木暮がさっそく答える。

「光子のことを炙り出すんだ。表向きはカタギに乗り換えているが、シヤブとはまだ切れていねえはずだ。きつと何かの手を使って、早晚シヤブを運んでくる。まずはそいつを突き止めるんだ。」

香港資本の商社となれば、日常的に物を輸入しているはずだ。問題はいつ、どうやってシヤブを密輸するかだろう。

「でかい儲け話しになりや、必ずどこかのヤクザが嗅ぎ付ける。中国の連中にも洩れて伝わるだろう。自分の縄張りに大量のシヤブが出回るとなれば、関東連合のやつらも黙っちゃいらねえはずだ。うまく入って来たら、例によってすばやく捌く必要がある。そのためには売人達にあらかじめ情報を入れる必要がある。征二はその辺を探ってくれ。」

加羽沢はさっそく地元の売人当たることにした。そいつがまだ商売を続けているなら、今からでも会えるはずだった。

上野駅の浅草口を出て、歩道橋を昭和通りの向こう側に渡ると、加羽沢はバイク屋街をしばらく歩いて入谷に出た。昭和通りを行く車の音がうるさい。

貧相な男が喫茶店の前に立って携帯電話で話していた。加羽沢を見ると、気づかない振りをした。

「どうだ、商売は。」

かまわず加羽沢は、後ろから相手の耳に怒鳴った。男は首をすくめる

と、探るような目で加羽沢を見た。

「何の話だい。」

電話機のアンテナをしまいながら男が聞いた。露骨にいやそうな顔をしている。

「シャブを分けて欲しいんだが。」

男はさりげなくあたりを見まわした。車の騒音で二人の会話は周りに聞こえないはずだった。

「あんたの所は、薬はやらねえんだろう。」

「頼まれたんだ。」

「怪しいもんだ。」

「かてえこというなよ。」

男はほとんど唇を動かさずに話す。

「俺がブツを自分で運ばないことは知ってんだろう。それにシャブはだめだ。このところずっと時化たまんまだ。あんたのところの客にまで分けてやれるほどの持分はねえ。」

「なんでだい。」

「そりゃ、あんたの方が知ってるんだろう。噂じゃ、あんたのところが金田の組をつぶしたってことになってる。」

「そいつは、デマだ。忘れちまいな。」

男は何もいわず、片方だけ眉を上げた。

「ところで、いつになったら手に入る。」

「さあな。来月になったら聞いてみな。」

「シャブが切れたやつはどうすんだ。」

「そいつは信用の問題だ。俺の客には絶対にそんなことは起こらねえ。他の売人の話なら、どこか違うモトで手に入れるんだろう。関西の方じゃ、だぶついて値段も下がっているそうだ。関西の組でこっちで商売したがつているやつもたくさんいる。どこかに穴が開いたらすぐ埋まる。切らしたらおしまいよ。」

「わかった。ありがとよ。」

加羽沢は礼をいうと、男の胸のポケットに千円札を突っ込んでやった。男はまた首をすくめた。

なるほど光子のせいで、シャブのマーケットがだいぶ変わってしまったらしい。

携帯電話が鳴って男は仕事に戻った。遠からず、どこからかこの辺りにもシャブは送られてくるのだろう。覚醒剤のマーケットでは新しい陣取り合戦が始まっているらしい。

親分の家に戻ると早くも木暮が情報を引き出ししていた。

「他にもいろいろあるのだけれど、輸入に関係する話で整理するところんなもんです。中国の扇子や箸、壺や木彫りの彫刻、筆や硯まであり

ます。で、問題の清涼飲料水ですが。」

「姐さんがいつてたやつだ。」

「香港から一番新しく来たメールに載ってました。同じ内容のメールが、他の人の所にも入ってます。英語でわかり難いのだけれど、日付が入っているからこのスケジュールだと思う。」

「そうですね。B/L」というのが船荷証券のことでしょう。INVは、インボイスかな。船名が「ガンビアベイ」。」

吉田がこの辺の内容を理解しているようだった。

「この船、四日前に香港を出ていますから、もうそろそろ日本に着くんじゃないかな。」

「積んでいるのはシャブか。」

「それは、わかりませんね。」

「光子の所はどうやってその荷物を引張ってくるんだ。」

「うーん。僕が貿易実務で習ったのは、たしか船荷証券があれば、船会社から荷物を受け取ることができるとは、たしか船荷証券があれば、書類だから、紛失しないように同じ書類がいくつかに分かれて送られてくるはずですよ。で、そのうちの一組でも、輸入手続を代行するフォーワーダーというところに提出すれば、後は輸入手続、通関から倉庫に運ぶまでの全部の仕事をそのフォーワーダーがやってくれることになっています。」

「フォーワーダーつうのはどこにあるんだ。」

「それは光子さんの会社が契約していると思いますよ。たぶん船の貨物ですから、東京か横浜です。」

「じゃ、そこでかつさらえばいいわけだ。」

「まあ、簡単にいえば、そうですね。」

「問題は、ふなにひょうなんとかだ。」

「それも、もうじき光子さんの会社に郵便で届くでしょう。」

「そうか。」

親分は、腕組しながら何かを考えていた。

「俺がもし、その船荷何とかを拾ってきたら、ブツは何とかなるか。」
 「船荷証券。それがあれば物は手に入ります。たぶん英語で B/L と書いてあるはずですよ。他の書類もくっついてかなり分厚くなったのが封筒に入って送られているでしょう。輸入をやっている所ならだれでもわかります。」

フォーワーダーもそうです。何処のフォーワーダーを使っているかと聞けば教えてくれるでしょう。で、フォーワーダーにその B/L を渡すと。」

「よし、一回だけなら奥の手が使える。どうやらその時が来たらしい。」

「奥の手てえと。」

「モグラよ。光子のところは一匹モグラを隠しておいたんだ。だが、日に当てるよと死んじまうんで、やたらと使えなかった。そいつにこの話を聞いてみる。」

親分が立ち上がった。いった。

「びーえるってのとほーわーだだな。そいつをなんとかすればいいんだな。」

親分はそそくさと外に出て行って、なかなか帰って来なかった。

午前様で家に着いたときはもうへべれけで、ごきげんのまま高敷で寝てしまった。寿司折かと思いきや、持って帰ってきたのは例の B/L だった。

翌朝、泊り込みになってしまった木暮と吉田と、加羽沢は朝食を取った。婆さんの味噌汁はやたらと美味かった。

「やつぱり同じ朝ご飯でも病院とは違うんですね。あと、こうしてみんなで食卓を囲むせいで美味しいのかな。」

吉田も感激していた。

親分が持ってきた書類を吉田は封筒から出して見た。

「なんだか書類を根こそぎ持ってきたみたいですね。一部で足りるはずなんで、残りは怪しまれないように返しておいた方がいいのでしょうか。ちようど香港からきた封筒に入っているんで、このまま誤配のため転送つて書いて、ポストに入れて起きます。そうすると明日華光貿易に着いても、同じような書類がいっぱいあるはずだから処理できるのは月曜日でしょう。こっちは、手元に残った方を今日のうちにフォーワーダーに提出して引き取るので、先を越すことができます。」

「ブツはいつてえどれくらいあるんだ。」

「インボイスによれば、中国製の清涼飲料水のパレットが六つです。」

「全部シャブか。」

「それはどうですかね。」

「とにかくトラックがいるな。どっかから借りるにしても、だれか運転できるか。」

三人が顔を見合わせていると、親分のへやの襖が開いて、ヤスが顔を出してきた。嬉しそうに何かを差し出すので、見てみると運転免許だった。大型牽引のところに印が付いている。

「お前、こんな免許どこで取ったんだ。」

「自衛隊……。」

加羽沢が以前のついで、池之端の葬儀屋からトラックを借りてきた。運良く友引なので夕方まで貸してもらえた。

親分は書類の他に、「渡島倉庫」という名前をつかんで来た。これで、華光貿易のフォーワーダー業務は、横浜の倉庫会社に委託されている

ことがわかった。

木暮が親分と一緒に留守番にまわり、吉田とヤスと加羽沢が三人で横浜まで行くことになった。

運転するヤスはともかく、吉田は着ている物のせいでとても会社員には見えない。そこで急遽親分から上着とネクタイを借りることにした。大昔の三つボタンの上着が、今の流行に合って妙に新しく見える。

「これって、ゼニアみたいですね。」

「てやんでい。そいつは英国屋のオーダーメイドだ。」

首都高湾岸線をベイブリッジ方面に行く途中、大黒埠頭のジャンクションを降りると、倉庫街に渡島倉庫の看板と十名くらいの小さな事務所があった。

「すいません、華光貿易の者ですが。」

ジャンパーを着た中年の男が、机の奥から出てきた。

「まいどどうも。」

「急ぎの荷物があつて、書類を届けに来ました。」

考えてきた通りに台詞をいうと、吉田は持っていた書類を渡した。

「あ、これね。もう入港してるよ。うちにも出荷元から書類のコピー来てるから、荷物は先に動いているよ。」

「今日引き取れませんか。」

「ずいぶん急いでいるんだね。いつもなら今からやって午後の引き取りに入れるんだけど、今日は金曜日だろう。通関が間に合わないよ。週末は休むから、早くて月曜日の午前中だね。」

「何とかありませんか。」

「俺たちはどうにでもなるけど、税関はね、お役所だから。」

加羽沢が何かいおうとするのを、吉田がさえぎって止めた。

「じゃ、月曜の十一時頃ですか。」

「そうだな。それなら確実だ。コンテナから出してうちの倉庫に入れておくよ。」

ここは一応退散することにした。

「いつもと違うことをしているんだから、あんまり目立ったらおかしいでしょう。たださえ加羽沢さんは印象に残りやすいし。」

トラックまで戻ると吉田がいった。

「でも、困ったな。月曜日となると、本者が書類を届けるかもしれない。」

「張り込んで、とっ捕まえるか。」

「いや、急いでいなければ、あちらも書類を宅配便で送るだけかもしれない。様子を見ましよう。」

月曜日は、約束の時間より早めに倉庫に着くようにした。

「すみません。華光貿易ですが。」

「あ、あの貨物ね。もう出てますよ。」

担当の男がクリップボードを持って出てきた。

「だけど、この書類ね。今朝もう一通来て、新宿に配送することになってるけどいいの。」

「あ、二重に手配したみたいですね。でも、来ちゃいましたから、こつちで引き取りますよ。」

「でも、行き違いがあるといけないから、確かめようと思つてさ。あんたも困るでしょ。」

男はコードレス電話の受話器を取つて、短縮ボタンを押した。

カウンター越しに加羽沢の手が伸びて、男から受話器を取り上げた。

「あ、俺だ。ちよつとした手ちげえだ。」

加羽沢は受話器に向かつてドスのきいた声でいった。

「うちの若いもんが、えらい手ちげえをしたようで、カンベンしてください。」

したから見上げるように加羽沢のひと睨みすると、相手は震え上がった。

「いや、手違いならいいんですけどね。」

男は小さくなった。

「じゃ、ここにサインしてください。他の書類は会社に送っておきますから。この書類をもつて、三番のプラットフォームに行ってください。」

気が変わらないうちにと、二人は倉庫に向かった。

「どうでえ、ちゃんと礼儀正しくお願いしただろうが。」

「もう同じ手は、ここじゃ使えませんよ。しつかり顔を覚えられましたから。」

倉庫での積み込みは簡単に終わった。

「はい、じゃここサインしてね。今日は通関早くて良かったね。」

「というと…。」

「何か密輸品が上屋の方で見つかったみたいでさ。税関の人は、みんなそつちに掛かりつきりさ。おかげで、手がまわんないせいか、こつちの貨物はすぐ通してくれたよ。」

帰りのトラックの中で、ラジオがそのニュースを流していた。なんでも大量の覚醒剤が横浜港で見つかったという。

「なんか、へんだ。」

加羽沢が、運転しているヤスの肩越しに、サイドミラーをのぞきこんでいった。

「さつきつから、同じ車が見えている。」

「つけられているんですか。」

「まだわからねえが。」

トラックは川崎浮島からトンネルに入り、羽田に向かっている。順調に流れてはいるが、前後左右にだいぶ車がいる。中でもトラックに混じって、窓を黒く塗りつぶしたベンツが一台目立っている。確かにカタギの車ではない。

大井を過ぎたあたりで流れが空いてきた。箱崎を通るか、木場に抜けるかと迷った時、ベンツが隣に並んだ。後部座席の窓がするすると下りると、中から拳銃を持った手が突き出された。

「危ねえ。」

加羽沢が、ヤスの襟首をつかんで引き倒した。二発銃声がして、一発が開いた窓から車内に飛び込み天井に穴をあけて抜けた。

ベンツはスピードを上げると、一挙にトラックを抜き去って見えなくなつた。

「焦るな。こいつはただの脅しだ。」

加羽沢がベンツの消えた方角を見つめながらいった。

向島に着くと、予定通り金田のいた工場にブーツを隠した。門は壊れたままだった。二階の非常口に登り、裏からシャッターを開けると、吹き抜けの屋内にコンクリートの床が広がっていた。加羽沢が裸で放り出されていた所だ。

「どの道天井に穴があいていちやそのまま返すわけにいかねえ。ブーツはトラックに載せたままにしておこう。」

「葬儀屋さんからは、何度も催促の電話がありましたけど、いいんですか。」

「俺に直接文句いうように伝えておきな。あの社長がキャバレーの娘と何をしてたか思い出させてやる。」

ヤスがトラックの荷台に乗ってこそこそしている。

「これって、缶に黄金液って書いてありますよ。」

「中国の漢方薬入り清涼飲料だそうだ。」

ヤスがさっそくひと缶失敬すると、蓋を開けて口をつけた。こういう時だけは実に素早い。

「べーっ。」

ヤスの吐き出す音がした。加羽沢は、その缶をつまみ上げ、中に指を浸すと舐めてみた。

「ほんとうにシヨンベンみてえな味がする。」

吉田は手にとって匂いを嗅いだだけで遠慮した。

「思えば、俺達もひでえもんを売ろうとしてた訳だ。」

「それとこれとはまた別の話です。でも、「黄金液」の商標登録はしておくべきでした。」

吉田が中身を床に捨てた。黄金色の液体が筋になって流れた。

加羽沢は、何か違和感を覚えた。どうも缶に残った中身が少なかった

ような気がする。

「ヤス、こいつを開けられねえか。」

ヤスは、こともなげに、空き缶をねじ切った。ふたの裏側に、透明なプラスチックの容器が貼りついている。

「シヤブだな。みっちり詰まっている。十グラム、いやもっと、その倍はあるかな。缶は、いくつあるんだ。」

全部の缶入っているのかどうかはわからないが、二十四本入りのケースが20個パレットに積まれていた。それが六パレットある。

「四百八十の六倍だから、二千八百八十ですね。二十グラム入っているとすると、えーと、全部で五十キロを超えますね。」

「するつてえと、ざっと十億の商売だ。質が良くて、末端の売りで考えればもっといくだろう。」

ついに光子も来るべき所までできてしまったようだ。後戻りできないと加羽沢は思った。

「わかった。お前達はよくやってくれた。」

親分が加羽沢の報告を聞いていった。

「いってえこれをどうするつもりですかい。」

「ブツをネタに光子を脅す。あいつも日東会のほとぼりがさめねえうちに、香港を敵にまわしたくはねえだろう。香港の連中も、ブツが消えたとあつちや黙っていねえはずだ。成り行きからいっても、光子は無傷じや済まねえだろう。もともと、韓国の話だって奴らには怪しげだ。物を盗まれたとிட்டたところで、あつちは光子が何かを仕組んだと思う。そうなるら奴らは日本のヤクザと違って妙に荒っぽい。特に女には、日本の男のようにヤワじゃねえ。」

「金田と日東会をハメたように、次は自分の首が絞まったということ。」

「今度は俺も行く。その首に縄かけてでも引つ張ってくる。」

親分は立ち上がると、婆さんと呼んで着物をよそ行きに着替えさせた。羽織にマフラーを巻いてステッキを持ち出した。

「イギリス製の舶来品よ。こいつがあつた方が歩くのに楽なんだ。」

親分は照れたように笑った。

玄関のたたきで鳥打帽子をかぶり、下駄を履いていると、親分の家の電話が鳴った。

郭さんからだった。

「ご無沙汰です。郭です。本当にお久しぶりで。今回のことは聞きましたよ。」

「何の話で。」

「私の電話は、盗聴されないようになっていきますから、率直にどうぞ。例の光子さんの品物の話です。そちらもずいぶん優秀な子分の方を揃

えていらつしやるようで。光子さんも、同じ船に皿を用意しておくとは念が入っている。久々の大物を抜いた訳ですな。」

「帰り道の途中で誰かに脅しをかけられたつてのは、やはり郭さんのところで。」

加羽沢たちが心配そうに親分を見つめた。

「正直にいうと、そうです。それで、ご相談の電話です。手短にいうと、例の品物をこちらに渡してもらえないかと。」

「郭さんは引退したつて聞いていたが。」

「それは、そうなんです。ただ、あれだけ大量の物が一挙に出回つてくると、市場が乱れて価格が安くなります。そうすると今まで手を出さなかった人のところにも、節操なく売られて物が届くようになります。私の引退後の生活がどうなるか以前に、トンちゃんも、そのような事態をお望みではないでしょう。」

親分は受話器を耳からはずしてひと呼吸おいた。

「さすがは郭さんだ。この辺にシャブが蔓延するのをなんとかしてやりてえと。」

「その通りです。」

「じゃあ、今回のブツはそちらに預けたとする。で、今流れている方は、だれがどうするんで。」

今度は郭さんが一瞬沈黙した。

「トンちゃん、そこは大人になりましょう。そいつまで無くそうとすると、今度は別なところから流れ込みます。」

「郭さんが扱っているうちは、まだ健全だと。」

「まあ、私が直接扱っている訳ではありませんが、そうですね。その辺の、必要悪というか、白黒はつきりしないところに、ヤクザの世界があるのではありませんか。」

「郭さん、なるほど立派なご意見だ。しかし、シャブのことになると、あつしはどうも頭が固くなっちゃうんで。」

「そうですね。私はいっこうにかまいませんよ。なんなら、この話、警察に流して品物を始末するだけでもいいんです。ただ、光子さんのことも絡むから、交渉が成り立つかと思ひましてね。香港の連中とも話しましたが、怒ってましたよ。これを止められるのは、たぶん私だけでしょう。」

さすがの親分も、低く流れる郭さんの笑い声に、汗が一筋背中を走った。

「わかりやした。今晚ブツのところ。征二、郭さんに時間と場所を教えてやってくれ。」

親分は加羽沢に受話器を渡しながらいった。郭さんは夜の八時を指定した。加羽沢は、向島の工場の場所を教えた。

「話が変わった。今度は俺一人で行く。おめえたちは手出し無用。」

加羽沢が受話器を置くなり、親分がいった。

「本気ですかい。」

「わからん。こうなりやもう出たとこ勝負よ。しかし、あいつにヤクザのなんたるかを教わるつもりはねえ。これがたぶん俺の最後の果し合いつてえ訳だ。征二は、済まんが光子を頼む。いよいよあいつの命があぶねえ。」

木暮と吉田が途方にくれている。

「せつかく来てもらって申し訳ねえが、まあそういう訳だ。ここもひよつとしたら危ねえかもしれねえ。どこか安全なところにしばらく身を置いてくれ。お前たちにもほんとうに世話になったな。」

「親分、縁起でもねえ、姐さんの件が済んだらすぐ駆けつけます。」

「なあに、ちつとは俺にも格好つけさせてくれ。シャブの元締めと五分で渡り合えるなら、おれも本望。じゃ、行ってくるぜ。」

婆さんが切り火を切った。親分は颯爽というにはあまりにもさりげなく出て行った。杖をつく後姿は、いつもより一回も小さく見えるような気がした。

加羽沢はしばらく親分の後姿を見守っていた。

「親分も何を考えているのかよくわからねえが、俺もこうしちゃいらねえ。二人は、ヤス連れて、親分よりも先にうまくブツを隠してくれ。あれさえなければ、俺が戻ってくるまで時間を稼げるだろう。ブツを前にしていきなり弾かれたら、何もしねえうちに終わっちゃう。」

「光子さんの方は、いまから間に合いますか。」

「さあ、しかし一刻を争うことは間違いねえだろう。」

「だったら、加羽沢さん。香港のヒットマンが光子さんの所に行くのをなんとか妨害すればいいんですよ。」

吉田か何か思いついたようだ。

「今なら、こんな広告を出すと、人が集まって身動きがとれなくなりますよ。」

木暮のパソコンに文字が打ち出されていた。

「いいですか。『新宿・華光貿易では、日ごろの皆様のご愛顧に感謝いたしました。まして、本日ご来店のお客様の中から、先着200名にワールドカップ・サッカーのご優待券を差し上げます。尚、ご希望者多数の場合は抽選になりますので、弊社窓口でご確認下さい。このサービスは本日限り。今すぐ新宿・西口・華光貿易まで。』わりと、いいコピーだと思いませんか。どうぞね。」

「いってえお前達は、どこでこういうことを考えつくんだい。」

「単純にこれだったら、自分も騙されて新宿に行くだろうなと。ワールドカップの招待券なら、人に譲ったってけっこうな金額になりますからね。これで人が千人も集まったら、さすがに目の前で人は襲えないでしょう。」

「おもしろえ、やってみろ。」

木暮が急に忙しくなった。あちこちのサッカーファンのホームページ、掲示板やメールマガジンにメッセージを流し始めた。

「三十分もすれば、きつと何か動き出しますよ。」

「まさに流言蜚語だな。これで、こつちが先手を取った。」

加羽沢が満足そうにいう。

「あとは俺の出番だ。行ってくるぜ。」

加羽沢が玄関出て家の前を曲がろうとした所で、後ろからいきなり肩をつかまれた。レインコート姿の男は、刑事の宮路だった。

「加羽沢、お出かけのところまで申し訳無いが、お前に逮捕状が出ているんだ。おとなしく付いて来てもらおう。」

「いつてえ何の話で。」

「タタキだ。郭って人から訴状が出ている。」

「なんてこった。」

「加羽沢征二。恐喝、強要の疑いで逮捕。」

加羽沢に手錠がはめられた。吉田が玄関から出てきて何かをいおうとした。

「落ち着け。俺はすぐに戻ってくる。その間は、俺がいったとおりにしておいてくれ。困ったら、吉原の政子を訪ねるんだ。いいな。」

道の向こうには例の役者顔が待っていた。裏口を固めていたらしい。宮路はいつになく無口だった。パトカーの後部座席に押し込められると、役者顔が運転した。

「旦那、あつしをケチなたたきで挙げる前に、一つ頼み事があるんで。」

「なんだ。」

「一目光子に会ってえんで。旦那だってあいつには聞いてみたいことがあるんじゃないやねえすか。ワツパはめたままでいいんで、一時間だけ寄り道させてもらう訳にはいきやせんか。今度こそ、でけえシャブの話で組織の連中を一網打尽にできる。」

「加羽沢、俺にも立場つてものがあるんだ。」

「あつしがこのまま箱に入ったら、もう身動きがとれねえでしょう。旦那にもこれが最後のチャンスだ。」

「井上、こいつがこんなこといつてるがどうする。」

役者顔の刑事が振り返りながらいった。

「俺なら、いいですよ。一時間くらいで何かの手がかりに繋がれば儲けものでしょう。タタキで挙げてそんなに面白くないし、今から帰って調書取るにも、まず先方の話を聞かない事には半端でしょう。」

「そういや、まだ逮捕の時間決めていなかったな。よし、加羽沢、どこ行きたいんだ。」

新宿に着くと、人が集まり始めていた。西口の地下道出口からも続々と人が吐き出されている。サラリーマンから、若い男女、子供連れの母親の姿まで見える。それがひとつの流れとなつて、光子のいるビルへとつながっていた。ちやうど帰りのラッシュの時間帯にぶつかつて、路上の人は増えるばかりだった。

「何だこれは。近所でコンサートでもあるのか。」

「インターネットつうもんは、恐ろしいもんで。」

宮路は工学院大学の脇に車を止めさせた。

「あそこのガラス張りのビルの中に、光子の会社がありやす。」

「しようがねえな。井上、ここで待機して見張つていてくれ。」

宮路は手錠に自分のレインコートをかけた。

ビルの入り口では、警備員が懸命に人を追い返そうとしているが、うまくいっていない。逆に、人の群れに取り囲まれて隅の方に押しやられるようとしている。

石畳の広場には、人があふれ出て溜まつていた。ざっと千人はいるのだろうか。あちこちのチームのサポーターらしいユニフォームが目立つ。気の早いことに顔にペイントしている者までいた。

人の波を泳いで渡り、なんとか建物の中に入ると、今度はエレベーターホールにも行列が出来ていた。

「すみません、警察です。道を開けてください。」

宮路が加羽沢を引っ張りながら割り込んでいく。

上の階の混雑はさらにひどかった。エレベーターから華光貿易の受付までびっしりと人で埋まつている。

「警察だ。道を開けろ。」

今度は加羽沢が叫んだ。

「よせよ、お前がいうと、俺の方が犯人に見えるじゃねえか。」

宮路がいやな顔をした。

華光貿易のガラスドアは開かれていて、例の男の社員が並び、なんとか人を押し留めていた。会社の人間に集まった連中が食つてかかり、険悪な雰囲気は漂っていた。

「社長はいるか。加羽沢が警察付きで来たといつてくれ。」

手錠のついた方の手を持ち上げて見せると、周囲の人間がぎよつとして目を向けた。加羽沢と宮路はその隙に受付を抜けた。

光子は奥の社長室にいた。大きな机の向こう側で背の高い椅子に座っていた。今日はブルーのスーツを着ている。相変わらず体調が悪いようで、肌の色が極端にくすんで見える。

入り口の外の様子は机の上のモニターでわかるらしい。さっきからそれを監視していたようだ。

「何てことしてくれたのよ。もうじきここまで人が押し寄せてくるわよ。」

「姐さん、あつしらと一緒に逃げるんだ。自分が命を狙われているのがわからねえのか。」

「なんだ、なんだ、その話は。」

「宮路が割り込んだ。」

「中国人のヒットマンが、ここに来るんで。」

「どういうことだ。」

「旦那もあぶねえってことで。」

「この騒ぎは、お前が仕組んだのか。」

「へえ。」

「くそつ。応援を要請する。」

「それじゃ、もう間に合わねえんで。」

「何でもいいからあたしのことを勝手に決めないでちょうだい。」

光子が怖い顔をしている。

その時、ガラスが割れる音と女子社員の悲鳴が聞こえた。

「このままじゃ、人を隠れ蓑にするつもりが、逆に雪隠詰になっちまう。」

飛び出すなら今しかねえ。」

「どうしたらいいのよ。」

「ついて来るんだ。」

「わかったわ。でも一人じゃいやよ。」

奥のドアから大男が出てきた。

「この男を連れていくわ。征さん、こないだ一人で動いたら、ずいぶんなことしてくれたわね。あれ以来懲りたの。」

入り口では、殺気だった連中が何かをわめき、強引に押し入ろうとしている。男の社員と警備員がピケを張って必死で食い止めている。

「今から一階で整理券を配るといふんだ。」

加羽沢が光子にいった。

「みなさん、予想外の混雑でここは大変危険です。いまから一階で整理券をお配りいたしますので、係員の誘導にしたがって一階ホールにお集まりください。」

「うん、いい調子だ。ここ以外に出口はねえのか。」

「裏に荷物用のエレベーターがあるわ。」

「よし、そいつだ。」

事務所の机の間を通り裏側に抜けると、四人はエレベーターに飛び乗った。

「地下の駐車場に降りられるわ。」

「そいつはだめだ。絶対に張られている。出口を押さえられたら袋のネズミだ。それより、人の波にのって一階の出口から出た方がいい。」

光子は黄色のコートを着ると右手にだけ皮の手袋をした。光子はひどく落ち着かない様子で、身体を震わせていた。

「姐さん、手にけがでも。」

「あ、これ。最近、手から虫が出るのよ。だから手袋でふたしてるの。」
「…。」

「あら、いやだ。あたし、靴を履くのを忘れたみたい。取りにいかなきや。」

足を見ると、光子はちゃんと紺色の高そうなハイヒールを履いていた。

「こいつ、飛んでるな。」

宮路がいった。

「シャツが切れたのか。」

大男がうーとうなった。

「姐さん、よく見ろ。俺がちゃんと持ってきてやった。こいつを履けばいいだろう。」

「あら、征さん、よく気が付いたわね。」

光子が透明の靴を履く。

「井上、聞こえるか。四人で一階の出口から飛び出す。何とか拾ってくれ。」

一階のホールは人で埋め尽くされていた。

「くそっ。これじゃ、こっちも動けねえ。」

「がんばれ、出口はすぐそこだ。」

四人は人を掻き分け出口に向かった。

その時、

「あ、あの人よ。」

若い女の声が出た。

「あの人が整理券配るっていったの。」

すぐに側にいた男たちが反応した。

「どこへ行く。」

「逃げるなっ。」

光子があつという間に人波に飲まれて見えなくなった。加羽沢は宮路につながれていて早く走れない。大男も人が邪魔になってさらに遅れを取っている。

何とか入り口にたどり着いた時、加羽沢の耳元を何かがかすめた。目の前のガラス戸にヒビが入ると、大きな音をたてて崩れ落ちた。どこかで悲鳴が上がる。

「撃ってきた。撃ってきたぞ。」

「見えねえ。どっから撃って来るんだ。」

宮路が拳銃を取り出しながらいった。

出口を抜けて外に出た。後ろからは人が津波のように押し寄せてくる。いまや完全にパニックとなっていた。

遠くに光子の黄色いコートが見えた。

「あっちだ。」

加羽沢は宮路に引きずられるようにして走ったが、広場を超えようと

したところで足がもつれた。加羽沢が倒れると、宮路が上から降ってきた。

加羽沢が何とか頭を起こすと、地面の下の方から走る人の足の間をぬって、紺色の人影が近づいて来るのが見えた。いつの間にか、加羽沢との間に邪魔なものが無くなっている。間近にその男の全身が見えた。男は、にやりと笑うと、ゆっくりと銃口を下ろし、加羽沢の頭に向けた。宮路は加羽沢の上で仰向けのまま亀のようにじたばたとしている。男の指が引き金を絞った。

その時、黒い大きな壁が横から飛んできた。目の前がおおきな座布団のようなものでさえぎられたとたん、二発銃声が出た。宮路が何か叫んでいる。

気が付くと、加羽沢は大男の下敷きになっていた。大男の股間が加羽沢の顔を被っていた。

「バカヤロ、早く起きてくれねえと死んじまうぞ。」

加羽沢はやっとの思いで下から這い出すと、膝を突いて立ちあがった。周りから人影が消え、急に静かになっていた。宮路は地面に頭を打ちつけたらしくグロッキーの様子で、仰向けのまましきりと首を振っている。大男は、尻と太ももに後ろから傷を負った。飛んで来た弾を身体で止めていた。加羽沢が手を貸すと何とか起き上がった。

「なんで助けた。」

「オレ、め組。」

「お前がそうだったのか。傷はどうだ。」

「こんなの、大丈夫。」

「済まなかったな。恩にきるぜ。」

大男は、横に首を振った。

「オレ、あんたのこと、好きだった。」

大男の顔がぼつと赤くなったような気がした。

「オレ、光子探す。」

大男は足を引きずりながら新宿の方に歩いていった。

「旦那、旦那。」

宮路がようやくやく四つん這いになった。

「加羽沢、こんな目に遭わせやがって、ただじゃおかねえぞ。」
 ようやく正気に戻ったらしい。

「光子のやつはどうした。」

「消えちまいやした。」

「早くなんとかしてやらないと、あいつは完全にいつちまうぞ。」

「甘えついでに、もうひとつお願いがあるんで。」

「今日はもうおしまいだ。署に帰ってゆっくり聞いてやる。」

「旦那、そうはいかねえ訳があるんで。」

加羽沢の手に宮路が落とされた拳銃があった。

「これを今から返そうと思ってるんで。だから、銃口だけは、そっちに
向けたくありやせん。」

「どうしろっていうんだ。」

「このまま旦那についてきて欲しいだけで。今日、光子を狙った連中と
関わりがありやす。旦那だつてこのまんまじゃ済ませられねえでし
う。」

「…わかった。」

宮路は観念したようだった。イヤフォンをはめなおし、胸のポケットに
入っていた無線機を調整した。

「井上、宮路だ。お前、今どこにいるんだ。」

役者顔の刑事は、ヒットマンを追いかけているらしい。

「俺は、加羽沢と向島に行く。お前もそっちがかたづいたら、向島ま
で来い。金田の工場は知っているだろう。」

「旦那、今日のことは恩に着やす。」

工場は、シャッターが下りていて中の様子がわからなかった。加羽沢
と宮路は裏の非常階段を上がって中に入り、キャットウォークのへりま
で這って進んだ。一階を見下ろすと、薄明かりの中でかろうじて親分が
見えた。さらにその先には黒い人影が固まっている。真ん中の背の高い
影が、郭さんのようだった。

「さて、挨拶はこれくらいにして、そちらも忙しいことだろうから、商
売の話とするか。」

親分の声だった。

「こちらは、例の品物を渡していただければそれだけです。何の後腐
れもありません。品物はどこにありますか。」

ゆっくりと念を押すように郭さんが話す。

「俺もここにあると聞いて来たんだが、どうやら俺の身を案じて、手
下がどこかに隠したようだ。」

「それは困りましたね。」

「いや、どの道、渡すつもりも無かった。」

「光子さんの事は、もういいと。」

「はったりは、よしな。あれだけ騒ぎが大きけりや、どこにいたって耳
に入るわ。光子は元気だそうだ。」

お互いにブラフをかけあっているようだ。

「そうですか。では、直接交渉ですかな。」

「そうだ。早いとこけりを付けちまおう。」

「あなたのお望みは。」

「お前さんの首だ。」

「それは穏やかじゃありませんね。」

「いや、俺は本気だぜ。いくらシノギがきついたらって、シヤブは外道だ。」

本当のヤクザが扱う物じゃねえ。一番気にくわねえのは、そいつを右から左に流しておいて知らん顔してるやつだ。」

郭さん側の影が反応して散開した。親分は杖の頭に両手を置いたままぴくりとも動かない。間合いは五メートル以上あるだろう。

「馬鹿な話はやめましょう。貴方に勝ち目はありません。」

「郭さん。あんたも引退してボケたな。あんたが自分でのこのこ出てきたことで、この勝負はあんたの負けだ。いくら組織を隠して、自分は引退したようなことをいつていても、ちんけな商売にのこのこ出かけて来るなんざ、郭さん、あんたもまだ枯れちゃいねえぜ。」

「相変わらず口が減らないようですね。私がここに来たのは、それなりの自信があつてのことです。必要な手は打つてあります。あなたと命のやりとりをするまでに、今日の件は片付く話です。」

階下のドアが開くと、新しい影が入って来た。薄明かりの下で見ると、吉田と木暮だった。後ろの男に拳銃を突きつけられている。

「優秀な手下とは、この人たちのことですか。」

親分が突然、大声で笑い出した。

郭さんもつられるように笑い出した。

「さすがだ、郭さん。ならばそいつらはこれと交換だ。」

笑い声が止むと、親分は着物の方袖を跳ね除け、中から筒のようなものを取り出した。暗がりの中でよくわからない。

「昔の日活映画にはイヤつて程出てきたもんだが、近頃は炭鉱が無くなったせいか、品薄でいけねえや。見つけ出すのにえらく手がかかっちゃった。」

百円ライターに火が点って親分の顔を映し出した。

「そいつらを放してやつてくれ。このマイトと交換だ。」

今度は郭さんが笑う番だった。親分も笑い出し、二人はひとしきり笑いあつた。

「わかりました。では、その物騒なものをしまつてくれますかね。」

「親分……」

「二人とも外に出ててくれ。」

吉田と木暮は、鉄の扉の向こうに消えた。親分はダイナマイトを投げ捨てた。

「さて、いつまで二人で切り札を出し合いますかな。」

「郭さん、あんたは、頭で動いているんだ。ヤクザは、俠情氣動くもんだ。あんたは、ビジネスとやらのお陰で、日本のヤクザがどんなものだったか忘れちゃったらしいな。」

親分は杖を持ち直した。

「あなたのいう、ちんけな商売に、ヤクザの俠気まで引つ張り出すとは、笑止千番です。礼儀がわからないだけなら、こちらから教えてあげましょうか。」

親分はフフと小声で笑った。急に辺りが静まって、親分の身体からは、赤くオーラが立ち昇るようだった。

「郭さん。あんたが考え付く限りで、一番ばかばかしいことを、俺がやったとしたらどうする。」

どこからとも無く木遣の聲が聞こえてきた。

「いけねえ。つまらないことに時間をかけ過ぎちまったようだ。」

その時、二階の事務所のドアがガシャンと大きな音を立てて開いた。大槌を振り上げながら飛び込んできたのはヤスだった。

「お前は引っ込んでいろ。」

声よりも早く親分の身体が飛んでいた。

「撃つなつ。」

加羽沢が叫んだ。

親分の姿がスローモーションのように見えた。着物の裾をはためかして、男の群れの中を走り抜けた。次々と拳銃が火を噴いて、八人の男達が暗がりの中から浮かび上がったが、狭い工場の中に散開していたため、射線が重なり合い、だれも二発目を撃つことが出来なかった。そのうちの三発が親分の身体を捕らえた。親分の身体は衝撃に揺らいだが、ついに拳銃の弾も親分を動きを止めることはできなかった。仕込み杖の鞘が払われて、親分は身体ごと郭さんにぶつかっていった。倒れようとする最後の力で刀身が郭さんの腎臓を貫いた。即死だった。親分は郭さんに重なってどうと倒れた。この間、五秒ほどの出来事だった。

「警察だ。全員動くなつ。」

宮路が叫んだが、その声を掻き消すようにシャッターが音を立てて開き、人がなだれ込んで来た。め組の連中の殴り込みだった。

「緊急配備。緊急配備。」

宮路が無線機に向かって叫んでいる。加羽沢は、宮路に繋がれたまま階下の出来事を見下ろすだけだった。

薄明かりの中にぼろきれの塊のようなシルエットが二つ浮かんでいた。辺りはもう静かになっていた。親分の方は、まだほんの少し息があった。

「伝八。かっこつけやがって、この。」

め組の頭がいった。

「こ…これが、や…りたかつたんで…。」

親分が苦しい息の中でいった。

「光子は…。」

「無事で…。」

親分はゆっくりとうなずくと、そのまま静かに動かなくなった。ぱたりも、がくりも無かった。

め組の頭と爺さんが二人、親分に向かって手を合わせると、ヤスが両手で顔を押しさえて泣き出した。辺りの静けさを突き破る力いっぱい泣

次から次へと焼香に訪れる客を、婆さんは一人で仕切って、最後まで涙を見せなかった。

そこに、め組の頭から電話がかかってきた。

「征二、取り込み中だろうが、もう一つ仕事が残っている。」

「へえ。」

「光子の居場所がわかった。新宿の松田組の事務所にいる。」

「松田組っていやあ、関西の組じゃありやせんか。」

「そうだ。中国マフィアと地場の関東連合が新宿でぶつかっていたのは知っているだろう。関東連合があんまり情けねえんで、その隙に松田組が伸してきた。光子はそこへ逃げ込んだらしい。」

「あつしに行かせてください。」

「一人で大丈夫か。」

「いや、これはあつしの仕事です。親分との約束をたがえるわけにはいかねえんで。」

「わかった…。」

加羽沢は、人知れず晒しを巻き、親分の葬儀にと思つて用意してきた和服に着替えた。幸い通夜の準備で忙しく、だれも加羽沢に注意を向ける暇が無かった。たぶんこれが自分の最後出入りになるだろうという予感がした。

「ちよつくら、そこまで行ってきやす。」

家の奥に声をかけると、ドスを抱いて表に出て行った。家に向かって軽く頭を下げた。

新宿では、時ならぬ着物姿がかえって目立ったが、そんなことにはかまっていられない。サブナードを足早に歩いて北に向かった。

花園神社の奥に、最近建てられたビルがあり、その二階のフロアに松田組の事務所があった。松田商会という会社の名前が看板に載っていた。一見、ただの事務所である。ドアを開けると、受付と書かれた所に女の子が出てきた。

「この親分さんに会いてえんだ。光子を連れに来たと伝えてくれ。」

「はあ。」

「といって、女の子は奥に引っ込んだ。」

「すいません。受付にへんな人が来てるんですけれど。」

奥で女の子の声が聞こえた。

出てきた男を見て、加羽沢はほっとした。粋な背広を着ていても、同業の色は隠せない。

「戸谷一家の者でござんす。親分さんにお目通り願いてえ。光子のことで参りやした。」

「あんさん、冗談はやめてください。そんな人、ここにはおりません。」

で。」

「ちよつくら、失礼させてもらいやす。」

「ちよ、ちよつと待ちいな。」

男の脇をすり抜けると、加羽沢はかまわず奥に入った。代紋も提灯も無いが、広く取ったフロアにソファとテーブルが置かれ、十人ほどの男がたむろしていた。全員の視線がこちらに向いた。

「ご同業の方とお見受けしやす。こちらの親分さんにお目通り願いてえ。」

「ちよつとまてい。われはここをどこだと思ってるねん。」

加羽沢の気を察したのか、男達は立ち上がると、加羽沢を囲むように近づいて来た。

「あつしの思っていた通りの所でござんす。こちらの親分さんにお目通り願いてえ。光子をもらいにやってきやした。」

「あほなこと抜かしよると、血い見るで。」

奥の方にいた一人が腰の後ろ辺りに手を回すのが見えた。加羽沢も右手を懐に入れて、長ドスの頭を押さえ、身をかがめた。部屋の中が急に緊迫し、男達が身構えるのが見えた。

加羽沢のこめかみがすつと冷たくなる。手の甲の古傷が熱くなった。

「もう一度お聞きしやす。親分さんはどこで。」

男たちの顔が引きつったように固まっているのが見えた。何も答える気はないらしい。加羽沢が一步前に踏み出すと、二、三人が早くもドスを抜いた。

「縁も恨みもございやせんが、子供と女房もちだけは、手出し無用におねげえしやす。」

加羽沢は視線を顔を上げ、十人の視線をひしと受け止めた。真中辺のやつらにはテーブルが邪魔になる。加羽沢は右にいたチンピラに狙いをつけた。目の端で見ると、そいつの顔は緊張のせいで笑いが張りつき、ドスの切っ先が細かく震えていた。手の古傷がさらに熱くなった。

相手は加羽沢の動きについて来れなかった。防ぐ暇を与えず、加羽沢は相手の額を横に払った。悲鳴が上がって盛大な血が飛び散る。連中は明らかに動揺した。狙っただけの効果があった。

右から飛び込んだできたやつをかわすと、相手の腕を下から切り上げた。ドスが飛んだ。机を蹴り倒し、ソファを足がかりにして次のやつ所に飛ぶ。正面から体当たりして、離れ際に頭を切った。そのくらいの傷で戦意を喪失してしまうのを見ると、あまり慣れたやつはいない。

「いてーっ。いてーよ。」

切られたやつが大げさに叫んでいる。

他の連中も、口々に何かをわめいているが、連携もない。すでに加羽沢は、相手を飲んでた。突いて来たやつを泳がせると、振り向きざまに背中を切った。脇から伸びた手を一度跳ね上げ、上からドスを振り

下ろすと、相手の指が切れた。あつという間に半分が片付いた。

「ちよいとまちいな。」

奥の方から声がかかった。

「やめとけ。今のお前らに、この方の相手はでけへんで。そのくらい見切れへんかったら、けがするやないか。」

色の浅黒い小柄な年寄りが出て来た。

「近頃の若いもんは仁義の切り方も知らんと、えらい失礼しましたな。わてが受けさせてもらいます。」

男は、絨毯に飛んだ血を一瞥したが、作法通りにネクタイをはずし腰をかめると、すつと右手を伸ばし仁義を切る格好をした。加羽沢も羽織の紐をはずすとドスを後ろに回し、同じ格好をして、声を発した。

「お控えなすって。」

「いえ、あんさんこそ、お控えなすって。」

「手前、若造です。お控えなすって。」

久々の仁義だった。加羽沢は、親分が生きていた頃を思い出していた。

「早速のお控えありがとうございます。今からあげますことば、間違えましたならばまっぴら御免なすって。手前生国と発しますは：。」

これが、自分の切る最後の仁義になるだろうと加羽沢は思った。

「いやあ、さすがやな。関東のテキヤさんの仁義は、いつ聞いてみても気持ちがあえわ。」

男はしきりと感心する。周りの連中は、あっけに取られて見ていた。

「もう、うちの仁義は恥ずかしゆうてかなわへんから、はしよらせてもらいます。わてが桜井です。組長代行をやらせてもろうとります。ここじゃ、よう話も出来ません。奥へどうぞ。」

加羽沢は桜井の部屋に通された。相手は桜井一人きりだった。大きな机と応接セットが並び、奥の壁には神棚があった。しかし、代紋も提灯もないただの社長室のようだ。

「そうですか。光子はんを連れて帰りたいと。わてもよく知りませんで失礼しましたな。」

「お願えいたしやす。」

「ま、もともとこの話は、光子はんの方から持ってきた話やし、降って湧いたと思えば諦めもつきます。いい仁義切ってもらいました。昔お宅の親分さんには、草鞋ぬがせてもろうたこともあります。ですからこの話は、無かったことにしましょ。」

「ありがとうございます。」

「ただですな。わたしらもうこの話、当てにして元手を使うとりま

すねん。けじめやさかい、その所は払ってもらわにやあきまへんな。このおっさんケチなことと思うと思うのはわかります。しかし、これが、今のヤクザの実態ですねん。」

桜井の顔は笑っているが、目だけは笑っていないかった。

「それとも、もう一度事をかまえますか。わたしかて、子分のでまえ、脅されてやったといわれる訳にいきまへんからな。」

結局、大阪のヤクザを相手に、二百万で話がついた。

「加羽沢さん、ええ度胸してますわ。ほればれしまつせ。」

桜井は、自分を並べて、加羽沢を玄関まで送った。

「光子はんは、別のマンションに囲ってます。この桜井、責任もって、必ず光子はんを返します。」

そういわれたら、加羽沢も引き下がるしかない。桜井は股を開いて、加羽沢の顔をみたまま頭を下げる、ヤクザ特有のお辞儀をした。貫目が違うことを、いやでも認めざるを得なかった。

廊下を曲がると緊張が解けて冷や汗が噴出してきた。子分はともかく、桜井との一戦を避けることが出来て正直ほっとした。加羽沢は、この勝負、自分の負けだと思った。

ビルの外には、め組の頭が爺さんを三人連れて立っていた。

「無事か。」

「おかげさんで。」

「今度ばかりは骨を拾うかと思っただぜ。」

どうやら無事に済んで頭も安心したらしい。

通夜も夜半を過ぎ、訪れる人の足が途切れると、急にひっそりと静まりかえった。残るは婆さんと加羽沢とヤスの三人で線香の番である。そこに玄関の引き戸が開く音がした。

「こんばんは。あたしにもお焼香をさせて下さいな。」

喪服を着た女は、光子だった。

婆さんは案内すると、顔を伏せたまますつと席をはずした。

光子はそそくさと線香を供え、手を合わせるとすぐに立ち上がった。挙げた髪、抜いた襟足が喪服によく似合っていた。

「そこまで送ってください。」

加羽沢がそのまま玄関の外まで送った。今日は、まだシャブが効いているようだ。

「親分は姐さんのことを最後まで心配しておりやした。」

「そうらしいわね。あたしだって感謝してないって訳じゃないのよ。でも今日は亡くなった人の手前、その辺の話はやめにしておくわ。」

光子はさらに痩せたようだった。目の下の隈と荒れた肌が化粧でも隠せずにいる。

「ただ、征さん、例のブツは返して欲しいのよ。」

「そいつは…。」

「あたしがどんなに困った立場にいるか、征さんならわかるでしょう。あたしのこと心配してくれるなら、なんとかしてよ。」

「…。」

「ねえ、お願いよ。こないだもいったでしょ。今度は征さんと仕事したいって。」

光子は、加羽沢の手を取っていった。

「征さんの不器用なところはわかるわ。でも行ってしまった人は、もうどうしようもないじゃない。」

「姐さん、勘弁してくださいませ。」

「征さん、今度はいつたい誰に遠慮するのよ。」

光子の顔が目の前にあった。

「あと少してこの辺のシャブの商売は、全部あたしのものになるはずだったのよ。あたしは、アメリカの会社経営を応用してみたの。争わせて、弱ったところで買収する。そして、どんどん大きくなる。」

「…。」

「結局、ヤクザのビジネスも原理は同じだったわ。でも、それがごとごとく潰された。しかもそれは、相手があたしに惚れたせいっていうのが可笑しいわね。全部あたしのためだと思っていた。挙句の果てに、そんなことに自分の命かけて死んじゃうなんてね。」

「姐さん、姐さんには人の情けつてもんがわからねえんですかい。」

光子は、加羽沢の手を取ると自分の胸に抱いた。光子の目が加羽沢の瞳の奥を覗き込んでいった。

「それは、征さんだって同じでしょ。あなただって、人の情けがわからない方輪なのよ。」

光子の唇の右端が上がるのが見えた。

声がすつと遠のいたような気がした。こめかみが冷たくなり、手がこわばっていた。光子のことばで初めて自分の奥にわだかまっていたものが何か、わかったような気がした。しかし加羽沢の手は、加羽沢の意に反して、光子の首を捕らえた。親分の顔が頭をよぎり、金田のことや、吉田のことが思い出された。指に力が入った。光子の目は挑むように加羽沢の目を見据えていた。

さらに力が加わると、光子の目はゆっくりと裏返って閉じた。眉間にしわが寄って、唇の間に舌の先が見えた。加羽沢は揺れる舌先を魅入られたように見詰めていた。光子の顔は、あたかも喜悦のような表情を浮かべていた。

「だめよ。やめて。」

後ろから女の声が出た。

「お願い。やめてよ。オジさんは、そんなことする人じゃないわ。」
手から力が抜けていった。立っていたのは、娘の智子だった。その後ろ

には、心配そうな顔をした吉田がいた。

「やめて。あたしの父さんは、人殺しなんかじゃないの。」
 智子はピンク色のカーディガンを着ていた。

「いやあ、いい葬式だった。」

廃業していたため、親分の遺言で葬式は近親の者だけで行うことにしていた。とはいえ、個人的に親分を慕う連中が日本中からはせ参じ、焼香の列は引きも切らずに続いた。め組の頭がうまく仕切ってくれたお陰で、派手さはないものの、どこか風情のある暖かい葬式を出すことができた。

「あいつは、昔っから、女には不器用だったな。」

「しかし、意地っ張りが、本当に自分の言ってた通りにして死んじまいやがった。」

「シヤブの黒幕と刺し違えるなんざ、これ以上の舞台はねえ。」
 死してなお、親分の株は上がるようだった。

葬式の間中、智子は吉田の側について離れなかった。別れがあれば、出合いもある。加羽沢は二人をくすぐったいような気持ちで眺めていた。

「そういや、例のブツはどこに隠した。」

「池之端の葬儀屋さんに、トラックごと預けました。」

「ずいぶん安直なところに隠したな。早いところ始末した方がいい。」

「それがその、トラックの修理代のかたに押さえられているんですよ。早く出さないとどこかの香典返しに使うぞって、脅されています。」

「まったく近頃は、誰がヤクザか本当にわからなくなったな。」

いつの間にか、お山の桜も終わっていた。

不忍池近くのキャバレーの跡地では、トントンと小気味よい金槌の音が鳴り響いている。

もともと鉄筋の建物であったため、火災は内装を燃やしただけで終わっていた。壁を修理して、椅子を換え、カウンターを作り直せばなんとか格好がつく。

「いっぱいやろうか。」

焼き場から帰って、骨壺をちやぶ台に置くと、婆さんが明るく加羽沢にいった。葬式ではずっと陰の方で小さくなっていたので、二人になった所で少し安心したのだろう。

「こんなもんがあるんだよ。」

婆さんが、赤と青のガラスの猪口を持ってきた。

「あたしといっぱいやる時に使うんだって、昔買ってくれたんだけどね。いつの間にか使わなくなっちゃってさ。」

冷酒を注いだ。深く彫られた格子模様指に心地よかった。婆さんは一息にあおって、ふうとため息をついた。

「よかったら、これ持っていておくれ。薩摩の古いものだそうだけど、売ればなんかの足しになるよ。」

「でも、そいつは思い出の品で。」

「ばかだね。死んだ亭主の思い出抱いて生きるってのは、正妻のすることだろ。妾のあたしは、忘れるっきゃないの。」

一筋こぼれた涙を拭うと、婆さんはへへっと笑った。

加羽沢は、キャバレーを再開することにした。ヤスも力仕事を手伝っている。テツも出所したら、他に行く所も無いので、またここに戻るだろう。

吉田が早速パソコンを持ち込んでいた。

「加羽沢さん、いつか黄金液をオーダーしてくれたお爺さんのこと覚えていますか。」

「ああ、シヨンベンを飲んじまった爺さんか。」

「まだ元気なようです。また欲しいっていつてます。」

「ついこないだのことなのに、もう遙か昔の気がする。」

「あん時の客とはまだ繋がっているのか。」

「はい。プロバイダーのところでメールが保存されていました。だいぶ溜まっています。その後もオーダーが入っていますよ。」

「またやってみるだけの価値はあるか。」

「それがですね。」

吉田がインターネットでどこかのページを開いた。

黒地のバックに若い女の子が裸で、金色の液体の入ったグラスを持っている。

「いつの間にか、類似品が売り出されています。それからですね。」

今度は禪をした村の青年団のような男が、振り向きざまに、グラスを突き出している。

「なんだこりゃ。」

「同じ類似品でも、その手の趣味の方用ですね。『俺のジュース、熱いぜ!』は、すごいキャッチコピーです。それでも、こちらは元祖『黄金液』ってことで、またがんばってみますか。」

「…いや、もう、やめておこう。」

大工仕事があらかた片付いたところに、人が二人入って来た。光子だった。傍らに背の高い外国人を連れてくる。

「征さん、お久しぶりね。この人、マンゾーさん。イランの人なの。今

度は、六本木で仕事するからよろしく。」

光子は屈託なく笑っていった。

そこに吉田が血相を変えて飛んできた。

「加羽沢さん。大変です。今、メールが来たんですけれど、こないだアメリカに送った例のブツで何か起きたみたいです。FDA(アメリカ食品医薬品局)が調査に乗り出しているって。」

外は三社祭の稽古だろうか、どこからか、かすかに祭囃子が聞こえていた。

(了)